

特 9

97

神田  
講談  
義傳

伯

龍

津

演

大高源吉

特9

97

大 高 源 吾



源

吾

回

神 田 伯 龍 講 演  
丸 山 平 次 郎 速 記



けを取らなかつたといふは世の風流人でございましたが、併し淺野  
 二を争ひましたる茅場町の實井野齋基角宗匠と肩を比べて毫も引  
 併名をば子業と申し、元祿年間江戸表において併道を以ちまして一  
 鍛錬をいたしましたるは世の人の能く知るところでございまして、  
 雄のお話に取掛ることでございます、尤も此の人は發句併諧の道に  
 第四編の終りにも一寸御披露を致し置きましたる如く、大高源吾忠  
 翁の中にて於て花方と呼ばれたる人々の傳記を伺ふことゝ致しますが、  
 扱て本日より講談義士傳第五編に引移り伺ふことに仕りますが、  
 翁の中に於て花方と呼ばれたる人々の傳記を伺ふことゝ致しますが、  
 翁の中に於て花方と呼ばれたる人々の傳記を伺ふことゝ致しますが、

然らば幸ひ中村勘助も當所を發足いたしたる様申し居る。鬼も角も  
 入りの當日までは夫れ山科へ參つて、段々と大石に此の事を申し  
 そこの身も及ばずながら、山科へ參つて、段々と大石に此の事を申し  
 て種々なる問者や勤め居る方々のあり、同様に強黨のうちに江戸に  
 こゝ江戸表には友人江戸屋敷に勤めて居りました。大抵二人三人と  
 波ッつう方には、成るだけ目立たぬ様にいたして、大抵二人三人と  
 相待つう方には、成るだけ目立たぬ様にいたして、大抵二人三人と  
 數多さいます。さうして京都大阪にも浪宅を構へ、時機の到るを  
 いたして種々様々に姿をやつし、吉良上野介の屋敷をば付け狙ふ者  
 助其雄山科に閑居いたしたるのうちは、まづ半ばは江戸へ下向  
 人の得でございませう、されば第四編に伺ひましたる通り、内蔵之  
 浪人の大高源吾といへば、天晴れば第四編に伺ひましたる通り、内蔵之  
 人の得でございませう、されば第四編に伺ひましたる通り、内蔵之  
 浪人の大高源吾といへば、天晴れば第四編に伺ひましたる通り、内蔵之  
 人の得でございませう、されば第四編に伺ひましたる通り、内蔵之  
 浪人の大高源吾といへば、天晴れば第四編に伺ひましたる通り、内蔵之

宗御前殿の御は内蔵頭殿に仕へまして、忠義武勇の武士でございま  
 した、お役は御遊習を相勤めなして、僅か御知行は二十石五入扶持  
 を領つて居られたる方でもありましたが、名前の聞がりましたのは  
 同様に四十七人のうちにも損得がございます。大高源吾といふ者は彼  
 れは何者であるといふと、赤穂浪士の一人といふことは、大抵の  
 方は御存じでございませう。同じ四十七士のうちにも矢田五郎右衛門  
 だとか或いは貝賀彌左衛門、奥田貞右衛門なごといふ様な名前にな  
 りますと、はてな赤穂浪士のうちに其様な名前の方があつたか知ら  
 んど、斯う一寸疑ひます。お方もございませう、いふ面の皮でござい  
 ます、この人々だからと云つて矢張り元禄十五年十二月十四日の夜  
 に大石の下知に従ひ、吉良家の邸内へ亂入いたしまして、共に雪の中  
 で働きをいたして、翌日泉岳寺へお引揚げて、その後四家のお屋敷へ  
 お預けになり、翌年二月四日に切腹をいたされる時は、同じ様  
 に死を賜ひましたることでもございませう、忠義の点においては、  
 同はないのでございませう、第一この大高といふ人の一つの特  
 得のあるものでございませう、第一この大高といふ人の一つの特

大 高 源 吾

公に對し折入つて願ひがあるが、何とおおき下さるといふ譯にはな  
りますまいか、勘助、ハア、何だ、大高源吾、ア、他でもないが、是れから  
一つ津まで迂廻路をして貰ひたいのであります、然うではないので、實は私のた  
もなまる積りか、源吾、イヤ、決して然うではないので、實は私のた  
めには義理の兄が一人あります、その義兄に餘所ながら今生の暇を  
告げたいと思ふのであります、何んかものであります、勘助、ハ、ア  
それは初めて承はつたが、貴公の兄といふと矢張り藤堂家の家中で  
源吾、左様、元は前中の藩中であつたが、今では藤堂家の臣となつて  
津の町奉行を勤めて居られる水沼久太夫といへる者である、勘助、ハ、ア  
貴殿の夫は兄か、源吾、左様、勘助、眞實の源吾、イヤ、今も申す通り  
義を結び互に意中の合つたるどころから、まづ生涯の我等がため  
兄と定め、先方も物數ならぬ源吾をば舍弟とお見做し下し置かれる  
といふ、尤も江戸に居る時分には此の水沼氏の劍道の師匠と相  
當の縁を食んだ者であるが、かねて水沼氏の劍道の師匠と相  
匠とが同じ先生で、その道場で先方は年齢も長つて居らつしやつた時  
前も優れて居らるところから、目代を勤めて居らつしやつた時

大 高 源 吾

中村氏と同道して彼の地へお乗り込み、相成る様、このことであ  
り、早速身支度をいたし、丁  
度十五年の春、先のこととございまして、早速身支度をいたし、丁  
至つて中村勘助とは意氣合ひでございまして、二人は途中へ出ま  
して、マア名所古跡、或は神社佛閣等を参詣いたし、殊に子葉は風流  
を、冒とす、人でございまして、その途すがら發句なぞを口吟み、  
日に歩み夜に泊り、日數を重ねまして、丁度伊勢路まで遣つて参りまし  
たることとございまして、不圖思ひ出して、丁度伊勢路まで遣つて参りまし  
理の兄、當時は勢州の津におきまして、藤堂家の町奉行を勤めまして  
高七百石を頂戴いたして、おいでに相成る水沼久太夫のこととござい  
ます、われ此の度彼の地へ乗り込んで、何れ本年のうちに主君の仇  
を報ゆる、さあるときは首尾よく行つた上にて、切腹、遣り損うた  
るところで、其の場において一命を抛てんければならぬ、素より覺悟  
とは云ひながら、わがためには義を結びたる兄のことである、一  
應、やらぬ立寄つて呉れても宜さうなもの、勘で兄上の小言を聞  
いては、大きに不都合のことであると思ひまして、源吾、さて中村氏、貴

大 高 源 吾

に、掛者は水沼を兄と敬ひ、十分に教育を受けたことである。尤も  
學問も相當に出來る御仁である。勘助ハア、然うすると何か中々の器  
量ある人だ。な源吾は云ふことだが、水沼ければこそ、餘り直なる了簡か  
ら、よく人の口柄に云ふことだが、遂に同役中の者より識言を被つ  
なるときは交はる友も少しとやら、遂に同役中の者より識言を被つ  
て、身に覺われないところの濡衣を着なすつた。それから備前家を浪  
人して、お了ひなすつた。けれども備前家に居られる時分より此の方  
は眞實の兄の如く思つたる御仁である。ところが浪人の彼は神田三  
河町の裏長屋に住居をなすつて、少々の財蓄もあつたのですが夫れ  
も無くなつて了ひ、それから弱り目に祟り目といふのであつたらうか  
不圖大病に遭ひ、折々は三河町の裏長屋へ参つて、枕邊に付き切  
ることもであるから、折々は三河町の裏長屋へ参つて、枕邊に付き切  
つて介抱いたしたこともあつた。ところが生憎その年に掛者は主用  
にて是非本國赤穂へ参らんければならぬことが出来て、アア万那出  
立の際には兄上にお暇乞を告げ、分けても兄上のためには備前に居  
られる時分からの御家内、元は他人とはいへば眞實此の方の姉の終

大 高 源 吾

に思ひ、今内證向きのところにか差支へもあるであらうと思ひ、實  
は其のとき紙入に持ち合せたのが十三兩二分はとあつた。それを悉  
皆水沼の御家内へお渡し申し、またか困りのときには書面をお遣は  
し下されたら、如何様とも金子は調達してお送り申さうと云つて、  
そこでアア水沼に別れを告げて、此の方は播州の本國へ歸つたんだ  
と、ところが何うやら斯うやら其の後病氣は全快になつた。ところが御  
自身も然ういふ氣象のお堅い方であるから、朋友の説とはいひな  
がら長らく仕へた備前家を浪人いたされたことでありませうから、二  
君に仕へる所存なく、一生浪人で送らうと思つたところだが、まさか  
武士の右手といふものは能う商賣に出るといふ譯にもならず、内職  
といつたところかホンの僅かなことである。けれども何なと其の日  
の暮しを立てるだけの兄上も準備をせんければならぬといふ者へか  
ら、到頭伊勢の藤堂家の辻番の足輕が入用といふことであつて、備  
かなお給金で藤堂様の辻番に雇はれて居らつしやつた。その足輕で  
以て辻番をいたして居つたんだ。辻番は要らぬ老爺の樂て所。なと云つて、  
意氣地のないもので「辻番は要らぬ老爺の樂て所」なと云つて、

ア川流にも出てございまする通りで碌な者は居りませんが、水沼の  
 義兄などは辻番の足輕なせには惜しいものである、御自身は夫れを勤めて居らつしや  
 食ふと食はぬの境界であるから、御自身は夫れを勤めて居らつしや  
 つたのだ勤助成るは邊源吾するも或る日藤堂の大守は式日のこと  
 て御出仕にならうといたして、お屋敷をお行列を立つてお出ましに  
 ならうと致したとき、大變な酒狂人があつて其の御行列を妨げて  
 非常な亂暴を働いたる浪人者があつたんだ、藤堂の家來の輩も今御  
 登城がけといひ、かゝるところの狼藉者を取押へるに甚だ迷惑をし  
 て、如何せん考へて居られた、ところの根が兄上は腕に覺のあ  
 る人だから、早速六尺棒を以て辻番から飛び出して、只だ一棒のあ  
 りなく御登城なすつたんだ、それから其の酒狂人といふのは上役人  
 の手へ引渡して了つて、それだけの處分に行うたことであるが、そ  
 のとき兄上への御働きがお徳儀のうちから藤堂公のお目に留まつて、  
 直に御歸邸になるお呼び出しになつて段々身分のほどをお認めに  
 なつて見ると、元は備前の家臣水沼久太夫といふ立派な武士といふ

ことが相分つて、そこで百石に見出しになつたのだ勤助も成る  
 はど、それから何うなすつた源吾するも自分には二君に仕へる心成  
 ないといへど、ア強てどの藤堂家の御所望について、據るなく其  
 の食祿を頂いて、藤堂の家臣とお成りなすつたのです、ところが根  
 が撃剣も出来れば學問にも達して居られる御仁であるから、見る  
 うちに追々御加増となつて、そこで今では伊勢の津の町奉行を勤め  
 て、高七百石を領つて居らつしやるのだ、なか／＼今孔明といつて  
 も耻かしからぬといふ智者で、町奉行を勤めて居らつしやつても、  
 大層下々の氣受けも宜いといふことで、拙者も其の後は一應兄上に  
 お目通りを願ひたいと思つて居るうちに、拙者も其の後は一應兄上に  
 勤となつて、そこで拙者は夫れから後は只だの一度も文通さへ致し  
 たことのない様な次第、今度斯うして貴殿と同道して江戸表へ罷り  
 越さば、何れ大夫の思召では當年内のうちに、恥度仇討ちを致さるゝ  
 ことであらうと思ふ、さうなればモウ生涯水沼の兄上に會ふことも  
 出来な、只だ一目だけお目に懸つて、上をながら夫れとはなくお  
 暇を告げたいと心得る様な譯合である、どうか餘り迂廻路といふの

大 高 源 吾

でもないから付合うて呉れたまへ」中村勘助しはらく考へて居りま  
した。が勘助なア大高、それはお手前も眞の兄弟から見ると、たどへ  
他人にもせよ然ういふ人との義の約を結び、盃をいたして義兄と敬て  
る人ならば會ひたいは無理もないが、かねて大夫の仰せられたるこ  
とを貴殿も御存じであらう。必らず器量ある人の傍へは立寄るなど  
仰しやつたが、相手が馬鹿なれば兎も角も、そんな器量ある人の傍  
へ立寄つて、若し吾々が江戸へ乗り込むのは仇討ちに参るのであら  
うといふ様なことをば悟られる様なことに相成つて見れば、大きに  
吾々、中一の者に對しても、さういふところから願儀に相成つて  
見ると實に相済まぬことである。で悪いことは申さぬ、ア大抵な  
らば立寄らぬ方が宜い、江戸へ到着の後に書面で以て断りをなすつ  
たら何うだ源吾、それは貴殿は他人のことであるから然う仰せらるゝ  
が、拙者も丁度一年餘といふもの面會したことがないから、何でも  
一通はお目に懸りたいと思ふ、たゞ一寸行つて暇を告げて歸るだけ  
のことだから、玄關へ立つたなりで、先方で何と云つても上りさへ  
しなければ宜いだらう。此の度急に吾々、江戸へ行くについで、一

大 高 源 吾

これへ立寄つたといつて、玄關前で一寸兄上の顔を見て、それなり  
に出で来た。仔細はなからう勘助、それは然ういふ譯に行けば宜いけ  
れども、つひ久々のことだからと云つて勤める、奥へ通る、一杯出  
る、跡で食事、モウ今夜は泊れ、かういふことになつて來ると何う  
も宜くない様に思はれる、それもお手前は今仰しやつた通り、先  
方で何と云はれやうとも決して草鞋は脱がぬ、座敷へは通らぬと仰  
しやるのか源吾、ヤッ通らぬ、素より上りません勘助、それぢやア先方  
で何と云はうとも其の場かぎりで以てお出ましなされるのならば宜か  
らう」と中村勘助に憫々と忠告をされましたが、素より只だ一目顔  
だけ見て直に立歸るといふ考へでございすから、さて勘助も承知  
いたしました、漸うのことに勢州津へ這入つて参りましたが、かれこれ午  
刻前といふ頃はひでございしました、町奉行役宅へ向けて來て見ると  
立派なお屋敷でございまして丁度御門も開いてございす、公事所  
の者は只今大方それ、片付さど相成りましたか、門内の受付係  
の者は退屈さうな顔をいたして居やうといふ、兩人は其のまゝオッ

に是れまで話を度々いたして居つたことであつたが、漸う源吾が参つたさうだ。まづ「オヤ左様でございますか、大高様がおいででございますか、何ういたしましたものぞ、久太、マア何は兎もあれ一寸お前床の間の軸を懸け換へ、その他髪、腕、手當をいたして置いて呉れませう、さうして私の袴を出して呉れ」とさア御夫婦は俄かにバクどお願ひに相成りまして、やがて黒の紋付にお袴をお着けなすつてそのまゝ久太夫婦は執次の方も出さず、御自身でズツと玄關へお出迎へになりまして、見ると草鞋穿き、大小方には髪肌柄袋をかけまして、手には一文字の笠を携へ、同年輩の武士と二人で其處に佇んで居ります。源吾、ヤツこれは兄上、誠に一別以來御壯健の体を拜しまして、源吾身に取り如何ばかりか……久太これく、源吾何を云つて居る、そんな處で挨拶が出来るか、さアさア兎も角も何うぞ……兄上お言葉の中でござるが、洗面水を持つて参れ、早くいたせ、源吾イヤ友でございまして、中村勘助殿と仰しやいます、實は此の度火急の用向がありまして、兩人江戸表へ参らんければならない些と氣急ぎで

と門内へ這入りました、やがて正面の玄關の處へかゝつて参りますると、頻りに案内を乞うて居ります、ところか玄關の執次は其所へ袴を着けまして、出て参りましたが、見ると旅装束の武士兩人、執次、お前方は何だ、源吾、エ、水沼の兄上は御在邸でござるか、この一言を聞きますると驚いたる執次の者、さては主人の縁者の方と思ひましたから、俄に丁寧にも御奉行は御在邸でございますか、大高源吾といふを支へ執次、ハイ如何にも御奉行は御在邸でございますか、大高源吾といふ者が一寸お立寄り申したと、お執次を願ひたい、此の度上方を發足いたして至急に江戸表へ用向あつて参ります、餘り御無沙汰をいたして居ります、それゆゑに兄上のお顔を一應拜して参りたいと思ひ、わざくこれまで罷り越したる譯で、大高源吾が参つたといふことを何うぞお執次を願ひたい執次、ハッ左様でございますか、如何にも承知いたしました」と早々奥へ参りましてお奉行水沼久太夫婦へ此の事を申し入れました。久太、なに源吾が参つた、それはかねてお前誠、に久し振りである、よく登つて呉れた、ア、まつた、かねてお前



でございませすから、何うぞ歸りに任候容お目に懸ることゝいたし……  
 久太、そんなにか前の様に急かないでも宜いではないか、急ぐのなら  
 ば決して長く留めやうとは云はぬ、モウこれ何時だと思ふ、いまは  
 正午刻でもあらう、たどへお手前が何の位急いで駆け出したつて、  
 人間だもの、を必らず時分が来れば立場にでも道入つて食事をするだ  
 らう、食はず飲まずにまんざら江戸表まで行く譯にはなるまい、だ  
 から夫れは手前が急ぐのなら、酒も出さうとは云はぬ、人間通常  
 の通り晝の食事だけを仕て行かつしやい、飯の喫へぬといふことは  
 あるまい、その位な猶豫のないことはあるまいと心得る、決して引  
 留めはせぬ、平生の有合せ物で晝御飯を差上げやう、それだけを喫  
 べて行つて呉れぬか何うだ、源吾、ハイ久太、それも可かぬといふのか、  
 源吾、それはア何事も食事は別段に當家で頂戴しませんが、途中へ参  
 りまして久太、ア立場へ道入つたところがお手前歩きながら飯を喫  
 ふことは出来なだらう、休息をいたして飯の一膳ぐらゐ喫つて居  
 る猶、球ぐらゐあるのだらう、その間だけぐらゐ與へ通れぬといふこ  
 ともあるまいではないか、それはせ忙がしければ盡でお前は來なけ

ございませす、何れ下向の砌には御厄介に相成りますが、今日は何を  
 云ふにも然う猶豫がございません、久太、何を又お前は其様に疎々して  
 居る、猶豫が出来ぬと申して何もお手前を留めやうとは云はぬでは  
 ないか、奥へ通つて話をするくらゐなことの出来ぬことはあるまい  
 源吾、それが其の兄上、何うも然ういふ譯には相成りませぬので、直  
 に参らんければなりません、只だ貴兄のお顔さへ拜しまして御社健  
 にて在らつしやれば、それで私は何より結構に存じます、何うか、是  
 れでお暇を、久太、何だつて其様に疎々とするのだ……こりや誰れか居ら  
 ぬか、手先ハッ、御用でござりまするか、とハタ、と十手を持つて其  
 處へ遣つて参りました、驚いたのは中村勘助、何のことはない罪人  
 でも召捕る様な應對でございませす、久太、イヤ他でもないが、これは此  
 の方の舍弟であるが何うしても上つて呉れぬ、これなりで歸ると申  
 して居るが、兎も角も門を閉めて了へ、決して出さな」と奉行より  
 の指揮、何事かは分りませんが「心得ました」と其のまま手先の者  
 は表門をヒヤヤと閉めて了ひました、困つたのは大高でございませ  
 す、源吾、兄上、それでは甚だ私が困ります、困つたのは大高でございませ  
 ぬ、角も中村氏にも氣急

大 高 源 吾

れば宜い、長く留めやうといふのではない、はんの食事だけだから何うぞ奥へ通つて呉れ」さア斯うなると大高源吾も困つて了ひました。一旦中村勘助に草鞋は脱がぬといふ約束をいたしたのでございませすから源吾何うしたものであらう、なア中村氏」勘助も意地わるくヤロリと大高を睨め付けました。心のうちで考へましたのは、これだから器量人の側へ寄るなど云つてゐるのに、出て来たから此様なことになつて了つた、まさか斯ういはれて見るといふと上らぬといふ譯にもなるまいと思ひましたから勘助兎も角も何處で盗食をするのも同じことではござらぬか、折角この様に仰せられるものを手前も振切つて行かうといふ譯にもなるまい久太、それ御覽、中村氏とやらも彼ア仰せられるではないか、アア、兎も角も上れ」いふうちに洗足水を持つて参りました。今は據るなく足を洗ひまして、やがてのことに奥へ通るといふことに相成りました。まづ其の處へお茶を出し茶菓子を出し丁寧に款待に及びます。大高源吾はモヤ／＼しながから、心のうちには大高に中村勘助に何とも申し譯がないと心得て居ります。そこへ水沼の奥方まつねと仰しやるのが其處へお

大 高 源 吾

出ましになりまして、まづ誠にお久しうお目に懸りませんでございませした。貴郎も御機嫌よろしくお暮しに相成りますか。源吾「これは然るに主家の不祥は身の不祥と相成つて遂に浪々の後は、彼方此方と流浪ひまして誠に御無沙汰勝ちになつて居りました。今日は久々お伺ひ申した様な譯合でございませすまづ、どうも貴郎ようおいで下し置かれました。かね、長人どもお噂をいたして居りましたのでございませす。どうかア御緩容御逗留遊ばして下さいませす様、源吾なれば然ういふ其の譯には参りませんで、至急に江戸まで参らんければ兄上の様に仰しやるものですから、それゆゑ一寸通りはいたしませした。併し姉上殿に貴女も御壯健で結構でございませす。私少しも思感がありまして江戸表へ参ります。何うか是れでお暇と久太、何を前も引留めやうと云ふので、奥や源吾は大層急いで居る様子だから、お前つて呉れといふのだ、奥や源吾は大層急いで居る様子だから、お前

大 高 源 吾

勝手へ申し付けたる通り、勝部の手意をいたして疾く此れへ持つて参  
 れまう。長まりました。只今その支度に掛つて居ります。久太、決して其  
 の何だぞ女共を拾仕に出すには及ばぬ。お前が直々これへ来てお給  
 仕をする様に、源吾、一寸支度の間だけ待つて呉れる様、さて中村  
 氏とやら、しみみ、貴殿には御挨拶も致しませなんだが、何うも斯  
 様な粗相かしい人間でございませぬ。何分にも源吾のところを宜しく  
 願ひます。勤助、何う仕りました。私ども段々これまでは万事大高氏  
 にお世話、勝部になつて居ります。者でございまして、實、今回は至急の  
 用向あつて参らんければなりません。さもなくば後容いたしても宜  
 いのでございませぬ。誠に何うも急しなく申し上げまして、  
 久太、イヤ何う仕りました。ア、何より遠者なのが結構である……  
 まだ御膳は出来ぬか、早く持つて来ぬか、立つたり居たりいたして  
 居ります。心置さなく、先づこれならば何事もなく、聞いて呉れなけ  
 れば安心と大高は心得て居ります。うち、漸う其れへお膳が二人  
 前出ました。奥方はお櫃とお盆を持つて其れへお座りになりました。  
 まう、誠に何うもお待遠さまでございませぬ。何うぞ御粗末でござい

大 高 源 吾

ますが、お召喚りを願ひたうございませぬ。久太、ア源吾、急ぐとある  
 なれば、お召喚りを願ひたうございませぬ。久太、ア源吾、急ぐとある  
 せうぞ心置さなく、先づこれならば何事もなく、聞いて呉れなけ  
 沼の願ひは是れより他に無いのだ。ア、目出度い、何うぞ中村  
 氏、其許も心置さなく、召喚つて御出立を願ひたい。勤助、いろく、お手  
 敷をかけたして有難うございませぬ。それでは折角の思召頂戴仕りま  
 す。と、扱て、兩人の者は、勝部の前に座つて、ヒョイツと目を注  
 驚きました。伯龍、源吾は平生此の様な矢物を付ひたつて何とも思  
 せん、大變に是れは旨い矢物だといつて喜んで喫べませぬが、源吾  
 時分の武士は非常に、豚つた魚でございませぬ。何かといふと、源吾  
 切りで、それが矢物に付いてございませぬ。それから一寸菓子椀にか  
 奠が付いてございませぬ。向ふ付けもありませぬ。第一、源吾  
 の矢物といふと、武士たるものは餘はせぬ。これに不延喜に心得ます  
 一説に之れを鯛とも申して、ア、江戸では之れを握鮓にでも致  
 します。坊主だまして、還俗さして、鱈魚のすしでも喫はせたい。と  
 いふ様なことを都々逸にも賭つてございませぬ。随分旨い魚でござ

大 高 源 吾

なすつた、貴殿が心得のないか方なら兎も角も、これ所謂武士たるべき者が切腹をするときに用ひる腹切魚でござりませう、私は斯様な炙物で何として食事が頂けませう、今回江戸表へ下向いたしまするといふのも、何時までも吾々浪人をいたして人の厄介になつて居りますの詰りません、でア漸うのことに傳手を求めまして主取りをいたしませうといふ決心に及んだので、そこで中村氏と兩人彼の他へ参りまして、武家奉公をする者へでござります、折角の貴兄延喜の悪い腹を切るに用ひる様な魚で喫へますか、折角の思召ゆゑ頂戴は致すが、何うか此の炙物だけは取換へを願ひたい、久太、オイ源吾、お前は何か此の炙物を不延喜といふか、何がために是れで食事をするか、出ない、お前は非常に急いで居るから私は何も云はぬ、中村氏とても胸中に覺悟があるであらう、今世上に

大 高 源 吾

います、武家は何で縁ふかと申しますと、一名これを腹切魚と稱へまして、武士たるものが愈上切腹せんければならぬといふ其の腹を切らうといふときに、その腦部の炙物に付きましますのが此の腹切魚即ち鯨魚でござります、心掛のない者なれば、つひムンヤク食つて了ふでもござりませうが、大高中村の二人は互に顔を見合せまして大いに驚きました、勘助、大高源吾、ア勘助、これは腹切魚ではないか、源吾、ア、左様、勘助、左様ではないぞ、武士たるものが切腹を仕やうといふときに用ひる魚ではないか、何がために斯様な炙物が出たのであらう」と非常に迷惑に居ります、すると大高でござります、源吾、兄上、せうも誠に迷惑に居ります、すると大高でござります、ぬは私が勝手にありませうが、この炙物は鯨魚でござりますね、久太、左様、如何にも推量の通り腹切魚だ、わざく、お前が來ると直に津の市中を駆け廻らして、ア漸う取寄せた様なことである、水沼久太夫が心を籠めたる炙物だ、これは一目出度いことではない、何にも云はないで黙つて是れで御用所にも心置きなく食事をしたし出立いたして呉れられる様、源吾、何がために兄上斯様な魚を炙物にお付け

大 高 源 吾

にても必らず口外をするなどいふ、  
もあらうと略は推量いたすが、何もお手前  
ない、遺り損へば吉良の屋敷で討死をする御身、  
く主君の仇討ちをいたして吉良の首を擧げるときは、  
で、腹を切らんければならない、  
其れなるどころの腹切魚、この上もな  
叶うて目出度いところの馳走ではないか、  
ぬどは、何事だ、黙つて目出度く祝うて食事を  
この上水沼久太夫申すことは、  
は、只だ、然と酒の酔ひの醒りたるが如く、  
扱かれまして、流石の中村勘助も實に敬服の外は、  
万三千石の家中に四十や五十の忠臣の不在は、  
塞まで存じて居られます、  
まして、陣文いたしたる其の捉には、  
の他へは、決して他言はせぬといふことを誓うて  
すから、今更御推量の通り夫れでは、  
誠に千万忝けない、この矢物で

大 高 源 吾

高利の金を貸し與へ、自身は好い年をいたして遊女賣女に心を奪は  
れ、あれでも赤穂の其の以前は家老を勤めたる武士か、犬猫にも劣  
つたる不忠武士である、  
この津の藤堂家においても、  
ある、だが餘人は兎も角も此の久太夫は、  
老、大石内蔵之助殿の胸中、  
て今日まで、モウ今日は御身が来るか源吾が立寄るかど、  
いたして夫れのみを待つて居つたのである、  
が乗り込んで参つて、玄關前より疎々いたして出立いたさうといふ  
のは、いよ、大石氏の手配りが定まつて、  
といふのは、定めて仇を討たうといふ決心の上であらう、  
尾よく行つて其の後、公儀へ引渡されて、お身達は必らず切腹を  
仕なければならぬ身の上ではないか、  
ては吉良邸において討死をせんければならぬ、  
淺野の家の中に、四十や五十の忠義の武士が無いは云はぬ、  
大石氏の計らひを以て、  
縦令親兄弟は申すまでもない、  
今更御推量の通り夫れでは、  
誠に千万忝けない、この矢物で

有難く頂戴するとも云へません、よつて大高の隣席に坐つて居りま  
 した中村勘助は、源吾の膝をグイッと突きまして、何うするかと云  
 はぬばかりに睨み付けて居ります、困つたのは大高源吾でござい  
 ます、源吾兄上、それは貴兄の御鑑定大違ひ、成るはと彼の昨年城明  
 け渡しし砌は、私もわざと赤穂へ参つて居りました、如何にも意  
 氣地なしに城を明け渡すは残念だ、幸と城受取りの諸候を引受け城  
 を枕に討死をして相果てやうといふ評定もあつたのでございませ  
 れども、つひ其れも小田原評定となつて了ひ、その様な大膽なこと  
 をして、僅かな家中で公儀の御役人を引受けたところが仕方がない  
 といふところから、遂に城も意氣地なく明け渡して、それから後  
 いふものは皆思ひに散々となつて了つたので、そこで大石  
 どのも矢張り其の通りで、自分勝手なことをして自己の取り込  
 けの物は取り込んで置いて、生涯何でも京都の近邊に住居をする  
 云つて居ります、私も浪人の後は大石殿の許へ行つたこともなし  
 中村氏と夫りやア寄ると願ふと其の話も致したこともありません  
 どの、何分相手は高家の吉良といへど、十五万石の上杉といふ後

柄があまりますから、なかく我々が幾ら何の様に氣張つたところ  
 及ばない、そんな危いことを仕やうよりは、二君に任へて身の納ま  
 りを若けるが宜からうといふので、貴兄の前です決して私は出世を  
 ひませせん、今度奉公口があつて江戸へ参るんですが、附はゞ出世を  
 せねばならぬ身体でございます、それに貴兄この様な魚で食事が出  
 来るか出来ぬかお考へを願ひたい、後生ですから何うか矢物だけは  
 お取換へ下さる様、さあらば有難く頂戴いたします、久太、何といふ、  
 然らば水沼久太夫が是れはとまで只だ何事も尋ねずして心を籠めて  
 出したる此の矢物を喫へぬといふか、源吾それは貴兄思感が違つて居  
 りますから頂けませぬ、暫くの間源吾の顔を眺めて居りましたが、  
 何思ひけんズツと久太夫お起揚りになつて、やがて二人の前に据ゑ  
 たる膳部を持つて縁側の端へお出ましに相成るよと見わたるが、庭  
 の履脱石を目懸け二つの膳を發矢とばかりに投げ付けました、矢物  
 は向ふへ飛んで了ふ、皿は破れる、柄は轉がるといふ騒ぎでござい  
 ます、兩人も呆氣に取られました、涙に暮れて大高と義の兄弟分の仲

大 高 源 吾

を絶つといふ、さアこれからが大高の云ふに云はれぬ苦心の一段、一寸一息。

第 二 回

扱ても水沼大高は其の身の心に引比べまして、豈夫大高に限つて斯かるも水沼大高の不忠の武士ではないといふことを十分に心に信じてたして居りました、ところが園ら才彼れは二君に仕へんと、中村と兩人にて吾妻への下向は、其の主取りのためといふことを承はると等しく、忽ち怒つて膳部を庭前へ投げ付けました、其の方は見下げ果てたりに大高を睨み付けまして久太さてく、其の方は見下げ果てたりこの本の奴である、よし吾等が見込違ひにて、大石をはじめ茲に主君の本懐を達するといふ者一人も無きにもせよ、何で其の方だけなりとも其の志を立て、敵はぬまでも吉良家へ亂入して潔よく討死をせざるや大休汝の是れまでの氣衆にも似合はず、吾等ととき者と同様に二君に仕へるなと、は言語同断の奴だ、同じく二君に仕へても此の水沼久太夫などは、敢て主家が翻絶いたしたの、無念を呑んで

大 高 源 吾

お果てに相成つたのと云ふ様なことではない、畢竟する時の場合によつて、われ譏者のために備前家を浪人いたしたることにて據るなき次第である、然れば汝と我とは其の境界が天地の相違、此の度其の方の來るを指屈り數へて相待つて居つたことであるに、今の一言を聞いて案外の思ひをなした、左様なる不埒の者は最早や兄弟の縁も是れかぎり、この後われを義兄と思ふな、われ亦汝の様な不忠武士を決して合弟とは思はぬ、何時なりとも早々立去れ、最早や見てもなかく、汚らはしい」と兩眼に涙を浮べまして疊觸りも荒々しく遂に其の場を立去つて了ひましたることでございませぬ、側に居りました奥方は、如何にも氣の毒で申し様がございませぬ、漸う兩人の者を執成しましたして、まづ誠に大高様常々其人の氣質は貴郎も御存じでございませう、折角久々にておいで遊ばしたのを、飛んでもないことに相成りました、お腹も立ちませうが何うぞ御勘辨を願ひます根が一徹でございませうから遂に彼の様なことを申されたのでございませうが、併しモウ餘はせお刻限も延びてございませぬ、早々膳部を取戻へまして御腹を差上げることにございませぬ、何うか暫時お待

大 高 源 吾

ち遊ばして下し置かれます様」そのまゝ是れもアヒと起つて次の室へ下つて了ひました。誠に斯うなると跡は手持無沙汰でございまして、實に大高源吾も只だ呆然といたして居ります。大高源吾を斜視す、折々は中村勘助の顔を眺めます。勘助は只々大高源吾を斜視に掛けて睨め付けまして、これだから利口な人の側へ立寄るなど云つて居るのだ、わが言葉を用ひずいたしてゐる。乗り込んで来るから新様なことになつた。云はぬばかりに、恐い顔をして睨み付けますから、流石の源吾も起つても居ても居られませんが、慨然といたして居ります。と居るへ暫く経つて當家の家來、膳部を一人前災物な立派に添へまして持ち運んで参りました。家來「エ、失禮ながら貴殿は中村勘助様と仰せられますか。勘助「ハイ左様でござる。家來「只今主人久太夫存外なる無禮を仕りました。誠に相済みません。主人の申し付けでござりました。どうか御容赦に預かりたく申し相済みせん。貴殿には御飯を差上げます。非常にお待たせ申し相済みせん。主人の申し付けでござります。尤も大高様には決して御飯は上げないでござります。何うぞ中村様だけお召上りを願ひた

大 高 源 吾

うとさります。と勘助の前へ向けて膳部を差出ししました。さしもの大高もホロ／＼泣き出しました。随分酷いことをするものだ。此方から頼みも任ないものを、無理から上つて飯を喫つて行けど云つて、今頃まで待たして置いて、我れには飯を喫ばさぬとは随分酷い取扱ひである。憾めしさに膳部を眺めて居ります。此方は中村勘助は「それは誠に結構でござります。モウ大分腹も飢つて居ります。傍にて先程よりの御言葉を開いて居れば、中村勘助も不忠武士の仲間入りの一人でござります。誠にはや御親切に仰せ下されませう。何分先きを急ぐことでござります。先きはとかな然差俯向いて居りました。が、今中村の言葉の時機として源吾大きにお邪魔をいたしました。何うか宜しく御主人へお傳へを願ひます。お暇を仕ります。と漸う兩人は坐を起つて玄關前まで出掛けて参りました。が、誰れ一人として見送る者もござりません。そのまゝ悄然と草鞋なぞを穿きま



が 勸助、左様、源吾、それは、ア切れと仰せあれば、何も晩かれ早かれ何  
 れ切らうと覺悟を定めて居るから………けれども、何うか、ア目的を達  
 してから後まで延ばして頂く譯にはなるまいか、勸助、馬鹿なことを云  
 はつしやい、目的を達してから後は誰れしも當然だ、けれども、手  
 前が是れなりで立去つて了ふことに相成ると、飽くまでも水沼氏に  
 胸中を悟られることになる、よつてお手前、犬武士、猫武士と云つて彼  
 れだけの悪口を爲しやつたんだから、その犬の本性を現はして來  
 たまへ、源吾、何と仰しやる、犬の本性を現はせよとは、勸助、ア飽くまで  
 もお手前は畜生の様な了簡に相成つて、大高といへる奴は犬の様な  
 根性の奴だ、實に見下り果てたる奴である、水沼氏に對して愛想な  
 を、かきさせんければならないのだ、全体、貴殿がお話をなすつた通  
 義の爲めに兄弟の約を結んで、殊に水沼氏が浪々のうちに三河町の  
 住居の所へ参つて、貴殿十三兩二分とか金を與へたとか云つたで  
 はないか、源吾、それは實際でござる、勸助、して其の後に右の金を取  
 はずつたか、源吾、元談、仰しやつては困る、賈掛けの代金でも取るので  
 はあるまいし、素より我がためには義理の兄と思ふから、向ふが今

して飛び出しましたが、漸うのことに津の町端の處まで遡つて参り  
 ますと、一寸城下と距れたる處でございます、後前を見廻して、勸  
 助は立止まり、勸助、大高、何故お手前は拙者の云ふことを聞かぬ、あ  
 れだから最初から拙者が申して居つたではないか、必らず本望達す  
 るまでは利口な人の傍へは立寄るなどいふことを、大夫から彼れは  
 せまで云ひ聞けられて居るのではないか、だからお止しなさいと云  
 つてるのに、それにお手前は庭から挨拶をいたして決して上らない  
 と、無理から参つて今日の彼の始末は何だ、實に水沼といふ人は恐  
 ろしい御仁だ、大石氏の胸中を十分には知り抜いて、殊に此の度乗り  
 込んで行けば、モウ再び會ふことは出来ないから、それで別れを告げ  
 に來たのであらうの、或は五万三千石の家中のうちには四十や五十  
 の忠義の武士はあるであらうのと、吾々黨中の人数の數まで知つて  
 居るではないか、何うする積りだ、全休、源吾、イヤ、モウ、誠に貴郎に然ら  
 云はれて拙者も何とも申し譯がない、勸助、如何にも申し譯があるまい  
 よつて此の處に、おいて一同の方々へ申譯のため腹を切らつしやい、  
 源吾、エ、イヤ、何と仰しやる、勸助、腹を切れと云ふんだ、源吾、あの拙者

あれだけ立派になつて居ても、また先方も夫れを返さうとも仕ない  
此方も素より左様な物を申し受ける考へはないのだ。勘助、そこだ、こ  
ゝを一つお手前が水沼氏に愛想を盡かさせやうと思へば、今から一  
應引還した上で、その十三兩二分の金を取つて來さつしやい、兄ど  
思ふな兄弟の縁も是れ限りだと云つて、先方がお手前に愛想を盡か  
した、といふのも是れだけに云つたら、實は兄上貴兄の御推量の通  
りど、その本心を明かすであらうといふ所存だから、あれだけのこ  
とを仰しやつたのだ、そこを一つお手前が裏をかいて、只今兄上に  
は最早や兄弟でない、全の他人と仰しやつたから、先年貴兄が御浪  
々の砌に金子十三兩二分といふもの御用立申ししたが、何れも全の他人  
となつたお方に貸し與へて置く因縁はないから、此の度江戸表へ參  
る道中の入費にも致したい、是非とも其の金子をお返し下さいと云  
つて、飽くまでもお手前が發理も人情も辨へぬ者の様に見せかけん  
ければならない、腹を切るのが厭やなら、取つて還さつしやい、大  
高源吾は困りました、源吾、餘り夫れは中村氏ひさいではないか、勘助、そ  
のくらゐ甚くせねば可かぬのだ、そこで向ふが呆れ返つて了つて、

いよ、被奴は畜生武士である、驚いて其の金子を返すであらう、  
返したら、都合其餘分に二兩でも三兩でも利息を取つて來さつしや  
い、源吾、なに尙だ其の上の利息まで、勘助、左様だ、他人の金子をば數年  
の間に無利に使ひなされる道理はあるまい、利分の處を勘定すれば餘は  
せになるけれど、三兩お附けなさいと、そこまで還つて來たまへ、別段利  
子として、三兩お附けなさいと、その間に我れは彼の茶店で飯を喫  
モウ何と云はれても仕方がない、それぢやア、何うか暫くお待ち願  
ひたい、勘助、早く行つて來たまへ、その間に飯も碌々喫ふことは出來  
つて待つて居るから、源吾、オヤ、大變だ、飯も碌々喫ふことは出來  
ないか、と、大高は漸うのことに後へ取つて還して參りました、  
と、御門を這入りまして、立關前へ掛りました、源吾、お願ひ申す、と、案  
内を乞ひますと、執次が一人を呼んで、執次「これは何か御用で  
ございますか、源吾、一寸御家内が居られるなら、是れへお呼び下され、  
大高源吾モウ少し申し残したるものとござるから、執次「左様で、暫く  
何うかお待ち願ひます、類りに與方は、其久太夫殿を執成しをいたして居られま

うも其の十三兩二分といふお金子をばお貸し申して置くといふ譯に  
 もならない様に思はれます、何うか其金をたつた今お返しを願ひた  
 い、道中の入費万端に使ひたく、早速お返金を願ひたい、奥方も之  
 れを聞いて呆れてお了ひなすつて、大高の頭をつくく、隙めて居り  
 ましたがおまつ、それでは何でございませうか、其のどきの金子を御返  
 いたしましたれば宜いのでございませうか、源吾左様、實は受取りに参  
 つたのでまつ、委細承知いたしました、暫時何うぞお待ちを願ひます、  
 奥へ参りますと久太夫は待ちかねて居られました、久太何ういたし  
 た、詫びて居るか、まつ、なかく、貴郎大遠ひでございませう、貴郎の御推  
 量、どは天地の相違、妻も餘りのことに呆れ返りました、他でもござ  
 いませんが、貴郎が次前浪々の砌に、神田三河町の裏長屋においで遊  
 ばして御病氣でございませう、大高様は色々御親切にお世話  
 を下さいます、此の度は國許へ主用あつて發足するから、何分お  
 側に居つて介抱することが出来ないと仰しやつて、十三兩二分とい  
 ふお金子をば御用立つて下さいませう、それが何うしたといふ  
 久太、それはある、それは乃公も存じて居る、それが何うしたといふ

する折しもまつ、貴郎、源吾殿が参つたさうでございませう、久太さうで  
 むらう、彼奴も彼れだけに云はれたら本心を明かしに参つたのであ  
 らう、兄上御推量の通りでございませう、行つて會つて遣らつしやい、  
 云つて来たのであらう、行つて會つて遣らつしやい、そこで奥方は  
 早速支關へ出掛けて参りました、まつ、先きは甚だ失禮をいたし  
 ました、貴郎何か御用でございませうか、源吾されば、ア、他でもござ  
 らぬが、私も兄弟と思へばこそ久々お伺ひ申したのであります、だ  
 が貴女も先きは聞いて居らつしやつた通り、汝の様な奴は兄弟の  
 縁を切るも仰しやつて、以後は兄と思ふな乃公も弟とは思はぬと、  
 云はれて見ればモウ是非に及ばぬ全の他人だ、その全の他人に些少  
 たりとも金子をお貸し申して置くといふ譯にはなりません、貴女も  
 定めてお覺わがございませう、先年御浪々の砌に神田三河町の裏家  
 においでなすつた節、拙者から十三兩二分といふお金子を御用立つ  
 たことがありませう、まつ、ハイ左様でございませう、あの節は誠に貴  
 郎の御親切、夫婦の者は厚く受けて今も忘れは致さぬことでござい  
 ます、源吾「ア、そこだて、今日かうして至の他人となつて見ると、何

大 高 源 吾

のだ まつ「全の他人となつた上は、他人の御當家へ向けて十三兩二分  
といふ金子を貸して置く理由がないから、それを只今返せと仰しや  
います 久太「何そのときの金子を返せ」目を圓くいたして驚きました  
が久太「ア、さて」沙汰の限りだな、彼奴は愈よ畜生の本性を現は  
したのか、早々返して還らつしやい、かれが面へ投き付けて遣れ、  
ア、かればかりは見損うた」と益す嘆息の様子でございます、早速  
奥方は十三兩二分といふ金子を持つて玄關へ出掛けて参りましたが  
まつ「大きに永々御拜借いたして置きました有難うございます、左様  
なれば是れに持参をいたしました、御検めの上お受取りを願ひます  
源吾「知れたことを仰しやい、貸した物を取るのに誰れに遠慮があり  
ますか、ア、これは何ですか十三兩二分ですなまつ「左様でございま  
す 源吾「ではそれだけですかまつ「あの尙だ外にお借り申したことがござ  
いますか 源吾「元金は成るほど是れだけお貸し申したのだ、モウ兄弟  
でも何でも無い全の他人でせう、その他人の金子を數年來貴家の方  
でお使ひなすつて、少しも利分を付けずに返すとは何ういふもので  
せう、利分の勘定をいたすと餘はどになりませんが、それは勘定が面

大 高 源 吾

倒奥うござるから三兩に負けて置きます、別段利子を三兩下さい、  
まつ「ハイ、あの利息でございますか 源吾「左様だ、全の他人に無利息  
で金子を貸し與へる馬鹿もございませんから」奥方はますく「呆れ  
てお了ひなすつて奥へお遣入りになりましたが久太「何うした、野郎  
は歸つたかまつ「貴郎眞個にア呆れて了ひました、大高殿は新様々  
々に申して居られます 久太「何だ尙だ其の上利息を遣せ、借いこと  
を申す奴だ、持つて行つて遣れ、白痴漢奴」と頼に青筋を立つて立  
腹でございます、漸う三兩の金子を其の處へ持つて出ましてまつ「大  
きに何うも有難うございます」大高は漸う其の金子を引捨るが如く  
取りまして、アイツと物をも云はず門前へ出ましたが、五六間歩み  
ますると後方を振り顧り、幸ひ往來に人もなし、思はず識らすも兩眼  
に涙を浮べ「兄上、ア、この源吾を薄情な奴であるとお怒りもござ  
いませうが、平にお免しを願ひたうございます、今私の胸中を申上  
げたいのは山々であります、吾々黨中一同が神文の表にある通  
り、決して何の様なことがあるが、吾々黨中一同が神文の表にある通  
いふ其の掟を破る譯にも相成らず、心にもあらざる此の様な薄情な

大 高 源 吾

ることを申し、定めてお怒りもございませうが、乾度冥土より其のお詫言は仕り出すと少時の間は憫然いたして居りましたか、かくては果てしと其のまゝ道を急いで段々彼の輝端の茶店まで這つて参りました勤助何うした源吾中村、本當に拙者物心を覺いてより今日の様な辛いことではない、御覽下され十三兩二分、おまけに三兩別段に利息を取つて来ました勤助、それ程で宜しい、辛い思ひをし、たことはないと云ふが、貴殿の心から勝手にするんだ、ちやア食事仕たまへ、ア十六兩二分といふ不意に金子が遣入つたのだから、何處かで一杯奮發りたまへ源吾冗談いつちやア可かぬぞ、ア、大變なことに相成つた」と實に極り悪い思ひをいたして、源吾は手早く食事を了りました、そこで兩人は當所を跡になして、日數重ねて漸う江戸表へ乗り込んで参りました、さて先づ其の當座は八丁堀の岡崎町の裏家を一軒借りまして、こゝに兩人の者は住居となし、そこで吉良家の様子を探ふといふことに相成りましたが、大高は只々水沼氏に對して済まぬことを仕た、遂に元祿十五年の十二月十四て居りましたることでございませうが、遂に元祿十五年の十二月十四

大 高 源 吾

日の夜討入りをして、首尾よくも本懐を達したる後、高輪泉岳寺まで引揚げて参りました、吉良殿の首級を主君の懸前に供奉奉り、早急國許の御家内或は廣島の御合第大學様へ急使を出す御石は早急國許の御家内或は廣島の御合第大學様へ急使を出す御大高は太夫内蔵之助の片傍へ罷り出でまして、初りて此のとき此の水沼に對しての事柄を打明かしました源吾そのお手紙をお下しにいついて、私も願ひがございませう、實本年の春出立の際に斯様々々かやうの次第でございませう、中村に云はれて據るなく十六兩二分といふ金子を受取りました、そのときの私の心のうちの苦しさを御推量をお願いしたい、もはや仇討ちも済みましたから、切めて能狀なりとも出したいと思ひませうが、如何なものございませうか、大高の言葉も初めて聞いて大石は實に驚きました、成るはと神文の面に記した内蔵「それは怪しからぬことではないか、成るはと神文の面に記した通り、然中の他は他言は無用とはありといへど、それは立派なるところの御仁なれば、何故か手前は其のとき本心を明かして、久太夫殿に安心をおさせにならなかつた、それは人と場合に上りませう

大 高 源 吾

幸も擲者は左様なことは知らなかつた、然らば直様只今から別飛脚  
 をお出しなさい、能狀に右の金子を添へて、貴郎の心に思ふだけの  
 ことを云つてお遣りなさい、源吾「ア、有難うございませう」と大きに悦  
 びました、そこで早く一通の書面を認め、別段に十六兩二分といふ  
 金子を添へましたることでございまして、直に飛脚を一人雇ひまし  
 て、泉岳寺より能々伊勢の津の町奉行水沼久太夫の許へ此の書面を  
 出したしたのは、藤堂家の町奉行が一番早うございまして聞かま  
 したのには、御覽に相成りますと、さて大高が呉々々の説状、殊に十  
 右の手紙を御覽に相成りますと、さて大高が呉々々の説状、殊に十  
 六兩二分といふ金子が添へてございませう、手紙を見ると等しく鷹を  
 断つと思ひをなして久太「さてこそ我が推量の通り、大高汝は左様な  
 る丁簡であつたか、素より然うとは心得たが、餘りといへば薄情の  
 致し方と存じ、今日まで汝を恨み居つたことである、實に忠臣義  
 士と末世末代に至るまで能くも名譽を殘して呉れた、それこそ我  
 が義弟である、必らず潔く公儀の御法に従ひ、切腹いたして相果  
 てらるべし、われ生涯汝の遺跡を吊祭に及ばんと漸うのことに委

大 高 源 吾

しきところの書面を認め、これをば送り届けるといふことに  
 相成りました、そこで右の大高の説状でございませう、これは立派  
 な掛軸にいたしました、さて水沼は、大高源吾の亡靈を吊祭に及  
 されました、さて水沼は、大高源吾の亡靈を吊祭に及  
 いふ、元は至の他人といへば、眞實の兄弟にも優る、互に氣の投合ひ  
 たるどころと云ふものは、實に格別なものでございまして、これは伊  
 勢の津の町奉行水沼の家に残りし大高の説状と申して、只今もちま  
 して矢張り依然とこの人の家系は伊勢に傳つてあるとのことでござ  
 います、さてお話頭本文に戻りまして、いよ、大高子葉江戸へ下  
 向の後、吉良の屋敷を窺ふといふ、これより彼の有名なる大高子葉  
 寶井其角の出會といふ講談に引移ります、一息御免を蒙りまし  
 て次回に。

第 三 回

さて前回は伺ひました、大高、中村の兩名は恙なく江戸表へ到着の  
 後、豫て幾獄一統の面々は、何れも吉良家の様子を程々様々に姿を



大 高 源 吾

に呼び廻つて居ります。「今大高の住居を致して居ります其の長  
 屋内へも「竹や」云と云ひながら這入つて参りました。不圖思  
 ひ付いたるものと見ゆまして、豫て今日の儀式に用ひる煤拂の竹で  
 ございますか、必ず吉良の屋敷の周囲を廻つたら家中町の者が買  
 つて呉れるであらう、率此の竹を購め一つ賣り歩かうといふので  
 そとで早速竹屋を呼び止めまして源吾ア、全体汝の持つて居る竹は  
 何本程ある竹屋旦那、百本はございます、お購めなれば何うぞ早  
 くお購めを願ひます、遅うなるも最う他の者が廻つて了ひますから  
 源吾「それでは其れだけ残らず買はう竹屋エ、ッ……」竹買は大きに  
 驚きました竹屋「へエー何でございますか、其様に澤山お購めになり  
 まして何うなさいます源吾「何でも宜い、乃公に賣つて呉れ竹屋「それ  
 は何うも有難うございます、残らずお購め下さいますなら其の割方  
 を以てお負け申しませう」漸う相談を取定めまして、百本ばかりの  
 竹を買ひました源吾「よ、竹屋、序に汝の着て居る其の着物も賣つて  
 呉れぬか竹屋「冗談ぢやアございませぬ、此様な汚れ垢付いた繕ぎ  
 になつた物をお購めなされて何になさいます源吾「何でも宜い、

大 高 源 吾

何うか其れを賣つて呉れ、その代りに汝に此の着物を通るから」と  
 自分の着て居る衣類を脱いで遣りました、竹買は非常に驚きました  
 竹屋「それは私の方が餘程得でございます、此様な結構な帯まで頂  
 まして……源吾「ア何でも宜いから持つて行け」當人の三尺帯ボ  
 く、に相成つた筒袖衣を取り、自分の着類と取替へることになり  
 ました、そこ、金子を興へまして竹屋を歸し、直に其の身は  
 身支度を致しまして、古い手拭で頭をグルグルと巻きまして、まづ  
 右のボロ、いたした筒袖衣を着まして三尺帯をグイと締め、尻を  
 高く端折りまして、一枚の筧にクルクルと巻いてございする  
 竹を担いで飛び出して、了ひました、中村勘助は吹出して笑ひました  
 大高は稀代なことを致す、大方吉良の邸内の様子を見届けやうとい  
 ふのであらう、盲目に行けば宜いが、と思つて居ります、此方は何う  
 やら斯うやら八丁廻を彼になして、右の竹を引擔いで出たことは出  
 ましたもの、さて此の賢達といふ奴でございするが、何でもな  
 いやうに思ひますもの、何うも出ないものでございまして「竹や  
 ……」と云ひかけて己れの氣が谷めるものですから四邊を振向いて



大 高 源 吾

見て、腋下から冷汗を流し、「何うも旨く行かぬものだな」と嘆息  
 いたしました。が、思ひ切つて人の居ない所へ参りますと「竹や」  
 竹やア、〇「オヤ一寸見な、あの竹屋は大變に變なことを云つて居や  
 アがるせ、妙な賣解ぢやアないか」往來の者は立ち止まつて見て居  
 るやうな次第でございませぬ。何だつて此様に旨く賣解が出ないので  
 あらう」と當惑ながらも稽古しながら本所の松坂町へ遣つて参りま  
 した。また朝未明のことでございませぬ。さて吉良の屋敷の傍へ  
 來ますると、茲を一生懸命と思ひ切つて「竹や」さて吉良の屋敷の傍へ  
 つア旨いぞ……竹や、竹やア、頻りに呼ばりながら門前を通  
 りかよりました。が、門内から呼び込められ、呉れませぬ、グルリと廻つ  
 て裏門の方へ來ました。可笑しく「竹や」と呼ばりながら門前を通  
 まするが、更に買つて呉れる様子もございませぬ、丁度お屋敷の周  
 圍を五六度といふもの廻りました。が、誰れ一人として竹屋といつて  
 呼び込む者がございませぬ。「これは拙者の見込が違つた、一軒ぐら  
 るは何とか云つて呼び込ませぬ。これは拙者の見込が違つた、一軒ぐら  
 へて居りました。が「オヤ、成程、此的ア拙者の失策、考へて見る

大 高 源 吾

と昨年の殿中の刃傷、あの騒動一件に付いては吉良公は別段にお答  
 めもなく、はんのお屋敷替へといふことに相成つただけで、その以  
 前は呉服橋内の所に吉良の屋敷は在つたのだ、はんのお答めの代り  
 に松坂町へ屋敷替へに成つたのである、轉宅なせをする、其の時  
 十分に掃除を仕ておいて、それから二年は別段大掃除といふ  
 ものを仕ない、大方夫等のところから本年は別段に煤拂といふこと  
 を仕ないものを見ゆる、此奴ア飛んでもない失策を致した」と今更  
 考へて見ると馬鹿々々しくつて仕方がございませぬ、と云つて豈未  
 之れを打棄つて了ふといふ譯にもならず、今は呆然と致して「竹や  
 竹やア」と呼ばりながら兩國の方へ廻つて参りますと、  
 呼ばなくつても宜い所から生憎呼び込めぬ奴がおります。〇「オヤ竹屋  
 一寸お待ち」オヤ、厄介な所から呼び込みやアがつたな源吾、ハイ  
 竹の御用でございませぬか、お購めのほせを願ひます、町人は驚き  
 ましたな。〇「恐ろしい難しい竹屋さんだ、汝は一本茂らた源吾」  
 左様でございませぬ、何うか然るべきやうに然う切口上で云はれると甚  
 す。〇「オヤ元談ぢやアね、汝のやうに然う切口上で云はれると甚

大 高 源 吾

だ困る、全体一本幾らだと云ふんだ源吾「左様でございます、何卒その割合を以てお  
 めまして代價は是れく、でございますから、何卒その割合を以てお  
 購めのほを願ひます。〇條計なことを云ひなされるな、ア此の位  
 な竹なら一本十二文出したら買へる源吾「然らば其れで結構でござい  
 ます、事そのこと百本お購めのはせを願ふといふ譯にはなりません  
 いか。〇この竹屋は人を馬鹿にして居る、煤竹の終物を澤山買つて  
 何うするんだ、冗談云はないで早うお歸り。大高も心中困つて了ひ  
 ました、商賣といふものは随分面倒臭いものである、と思ひながら  
 漸うのこと一本の竹を商ひまして、さてアアと呼びよつて遣つて來  
 今兩國橋を渡らうとして、竹やアアと呼びよつて遣つて來  
 ますると、向ふから誰此の目の傘を翳しまして、上に被布のやうな  
 ものを着用なし、頭巾を目深に被り、裾を端折り、高足を穿きまし  
 て、尤も絹の股引を穿いて居りまするが、一寸上品な身装を致した  
 一人、橋を此方へ追つて参りましたは、是れ別人ならず其の頃はひ  
 江戸は茅場町に住居を致した、彼の有名なる俳人實井其角でござい  
 ます、流石の大高もハツと驚きました、オヤアア拍子の悪い時に飛

大 高 源 吾

んでもない人に出會つたものだ、何うぞ見付からぬやうに仕たいも  
 のと、顔を横へ反向けまして脇の方を渡つて行かうと致しました、  
 其角は目早く之れを見附けまして、其角「オヤアア、其所へお出でになる  
 は子葉子ではないか、オ、子葉子、子葉と譯を掛けられて見ると其  
 の儘行き過ぎるといふ譯にもなりません、操るなく振願りまして、  
 源吾「これは茅場町の宗匠でございますか、誠に面目次第もなき有様  
 でございます、其角「全体貴方は何うなすつたのだ、何といふお姿をし  
 て居らつしやる、して貴方は何ですか此の江戸表に在でなされるの  
 か、源吾「誠に面目もない有様でございまして、お家の不祥が身の不祥  
 となつて、今では斯く零落れましてございまして、お家の不祥が身の不祥  
 んことではございせんか、失禮なことを申すやうではございませ  
 が、其の様な淺間しい物を賣り歩かないからつて、貴方のことなら  
 何うでも一人位の活計家業の出来ないこともありません、毎々我  
 々連中もお噂を致して居つたのだ、一應位はお訪ね下さるが然り  
 ございませう、それとも世話はすまいと此の其角をお見限りでござ  
 いませうか、源吾「イヤなか、左様な譯ではないのでございませう、實の

大 高 源 吾

ところろは今日の活計にさへ困りまして、マア今では斯様な有様に相成りまして、其角餘り何うもお身が甚いではないか、まづ何は兎もあれ往來で立話も成り兼ねる、一寸何うかお付合ひ下さい、何處か一杯久々に傾け、其の上また御相談も仕りませう、源吾御親切は有難うございませうが、お身かけの通り斯様な物を商うて居ります折柄でございませう、何れ其の内にお伺ひを仕りますから……其角マアお待ちなさい、何も其様に云ふにも及ばぬではございませぬか、マア兎も角も一寸お付合ひ下さい、無理に大高を引止めまして、さ大高を伴つて選つて参りました、丁度この邊に只ある小門構への會席の料亭がありますから、是れ幸ひと思ひましたか、其角何うか當家へお遣入りを願ひたい、と先に立つて寶井其角は遣入つて了ひました、マア斯うなつて見ると体裁の悪いことではございませうが、這入らないといふ譯にもなりません、後に續いてスツと遣入つて参りました、女中「これは入らつしやいませ、何うぞお通りを願ひます」と、玄關前に女中が出迎へ早速其角を奥へ案内を仕やうと致しませう、と後に續いて軒下に右の竹をば掛て倚けまして、手拭で頭を包んだ妻

大 高 源 吾

しい竹屋が遣入つて参りました、女中「オヤ竹屋さん、妾の方では別段に用事はございませぬ上、其角コレ、彼れは何も改の方へ商ひに來たのではない、私の友人だから一緒に案内をして下さい、女中「へー、且那、貴方のお伴れ様でございませうか、何うも變な伴れもあるものと思ひ、呆れ返つて了ひました、早々兩人を玄關から通し、小精麗とした座敷へ案内を仕ます、其角さて子葉子、其の後は貴方のお噂をして居りましたが、今は全体何處にお住居をして在らつしやる、源吾「へー、實は八丁堀の岡崎町の邊に浪宅を構へまして、マア漸々のことに彼の様な詰らぬところの商賣を致して居ります、やうな次第、其角「八丁堀といへば何れも其様に私の宅とは距れて居るではなし、一應位はお訪ね下さつても宜さうなものであります、源吾「誠に何うも何と云はれませう、仕方がございませぬ、お見かけの通り其の日、の活計にさへ追はれるやうな次第でございませぬ、其角「それなれば何と云ふ私もお相談をするではございませぬか、マア何は然れ久々のことでございませう、やがてそこへに脱物を致しまして、程なく持つんで参りました、やがてそこへに脱物を致しまして、程なく持つ

大 高 源 吾

て参り申すると其角「用事があれば手を拍すから、何うか汝は彼方へ行つて居つて貰ひたい」と女中を起たせて了ひ、其角は盃を捧げまゝの許へお出で下すつたら、何處へか貴方が御奉公に住み込みたいと思召すなら、其の口もありませうし、また浪人で生涯を氣樂に終らうといふお積りであれば、貴方はお出来なさりやア屹度宗匠で活計が立ちませうと思ひます、何と然うなされては何うです、源吾「誠に御親切は有難うございます、私も今では貧乏盡に惹けて了ひまし

て浪人いたせし其の當座は少しは貯へもありました、其れも盛果て了ひ、今では斯様な次第に相成つて居ります、斯うやつて零落れたるところの姿を見附けられたることとございませう、最う決して耻とは思ひません、お言葉に甘へるやうではございませう、屹度それでは一兩日中にお伺ひ申しませう、何分何うか宜しくお世話を願ひたい、其角「イヤ承知仕りました、如何やうとも致しますから

大 高 源 吾

何うかお出で下さい、併し久々にてお目に懸かりましたのですから何うです一寸何か遣りませうか、云ひながら懐中から紙入を取出しまして、白紙を出し、腰なる矢立を抜き取つて、暫し其角は考へて居りました、**「ッ」**と認めまして、其角「何うです子葉子、一寸是れに何か付句を願ひたいもので、彼れの前へ差出しました、源吾「誠に是れは宗匠、私も去年來スツカ、斯の道を忘れて了ひました、逆も貴方の御句に付句などとは思ひも寄らぬことにて、マア其の儀は平に御免を蒙りませう、其角「其様なことを云はないで、何でも宜しいから認めを願ひたい、何うです一寸斯う遣りました、御覧下さい」**「然理に勤めますから源吾は纏て手に取つて見ると、花も實も斯うなるものか冬木立」**とあります、源吾「ヤッ恐れ入りました、逆も付句といふやうなことは難しうございませう、併し御免蒙りまして出来るか出来ぬか遣つて見ませう」と暫し考へて居りました、やがて其の句に付けまして**「ッ」**と一句認めました、源吾「誠に愧しうございませうが御覽を願ひたい、其角は手に取つて見ると、**「鐵も凍れる別れ路の霜」**其角「成程、随分面白うございませう、最う一句願ひ

大 高 源 吾

ませう 源吾「何うも恐れ入りました、今日は此の邊のところを御免を、  
 ……其角「イヤ然うでない」再び筆を取つて書きましたのは、彼の世  
 に名高きところの句でございまして「歳の瀬や水の流れと人の身は」  
 斯く認めまして子葉の前へ差出しました、是れは零落れたる此の大  
 高源吾の今の身の上を思ひ遣りまして認めましたものでございませ  
 此の其角は源吾が今日の活計に追はれ、斯様な際物資を致して居る  
 と斯う考へましたので、併し此方は既に明晩は吉其の屋敷へ歸入い  
 たして本懐を達せんければならないといふ、それに付いて畢竟する  
 今日吉其の邸内へ這入つて屋敷の様を見やうと思つたればこそ、  
 も厭はず新様な姿になつて出掛けただけでございませ、だから眞に貧  
 乏いたして居るの、生計に苦勞をして居るといふやうなことはない  
 のですから、大高に取つて見ると心の中では可笑しくつてなりませ  
 ん、併し無頼着な人でございませ、やがて筆を借りまして畏り  
 ず懸せすヤラ〜と認しましてございませ、源吾「認にお愧しうござい  
 ませ」寶井は手に取つて見ると「明日待たるゝ其の寶船」と認して  
 ございませ、其角「成程……」少し斯う負け惜みなどころもあると、其

大 高 源 吾

の句の意味が知れさせんから本人は斯様に心得まして其角「ヤッ何う  
 も能く出来ました、ア、併し今日は貴方も御商法中でございませ、か  
 ら是れでお別れを仕ませ、屹度お待ち受け申して居りますから、  
 一兩日の内にはお訪ねを願ひたい、源吾「如何にも承知いたしました、  
 では屹度何ふことに致しませう、大高に御馳走に預りました、其角「最  
 うお歸りか、源吾「お暇を頂戴します」と其の場を既に起たんと仕ませ  
 と其角「アイヤ一寸お待ち下さい」少し横を向きまして紙入から些か  
 の金子を取出し紙に包み其角「ア、大高氏、甚だ失禮ではございませ  
 るが、ほんの少々持合せただけ、お引止め申して相済みませんでし  
 たが、何うぞ之れを……」源吾「宗匠、その邊の御心配なれば御無用は  
 願ひませ、其角「イヤ〜」然うではない、ほんの私の寸志でございませ  
 源吾「でございませ、イヤ折角の思召でございませ、其れでは  
 有難く頂戴仕ります」其角は屹と其の身装を見て居りましたが、自  
 分の着て居ります被布を脱ぎまして、其の下に黒縮緬の縮入羽織  
 を着て居りましたが、やがて其れを脱ぎまして早く袖褶みに致し  
 其角「大高氏、甚だ失禮ではございませ、之れを其許に進上いた

しませう、寒い砌りでございますから、何うか平生着にでも遊ばす  
 やう願ひます。源吾「これは何うも宗匠濟みませんでございます、折角  
 の思召左様なれば遠慮なく頂戴仕りまする」擴げて見まして、源吾「ハ  
 、ア是れは結構なお羽織でございます」と云ひながら、何うするか  
 と見て居りますと、寶井其角は驚きましたな、随分大高といへる  
 したのでございます、寶井其角は驚きましたな、随分大高といへる  
 仁は無頓着な仁だ、自分は何しろ苦勞して居りますから、ア今  
 の斯ういふ身の上であるから、其れとはなく此の羽織を一枚遣はし  
 たら、之れを一寸質屋へでも持つて行つて入れ替へてもして、そこ  
 で自分の若類などを取出して了つて、此方の許へ来るであらう、と  
 斯ういふ積りで思ひ切つて遣はしましたのでございます、此方は頭  
 で其様な苦勞をして居ない人物ですから、別段黒縮縮の紋附の羽織  
 だからといつて、之れを以て何う斯うといふ考へはありせん、殊  
 に其の身は今日間者のために彼のやうな物を賣り歩いて居ることを  
 コロコロと失念いたして、ボロ／＼いたした筒袖衣の上から其の羽織  
 を來ましたのでございます。源吾「何うですな、宗匠、能く似合ひますか」

寶井其角は果れて了ひました。源吾「ヤッ、何うも行も或も能く合ひ  
 まして結構な賜物、ちやア遠慮なく頂戴いたして置させう、左様  
 なれば御免を……」と其のまゝ脱ぎも仕ないで出掛ける様子でござ  
 いますから、オヤ／＼と大變なことをする男もあるものだと思れ返つ  
 て居ります、やがて立關先へ遣つて來ると、隅つこに脱ぎ捨て、  
 とさいたした草鞋を穿いて、其れ儘忽卒に表へ出まして、クル／＼  
 と手拭で頭を包み、軒下に樹懸けてございました。竹を引掛いで、  
 變な竹賣が遣つて來やアがつたぞ、煤竹を商つて居る者が黒縮縮の  
 紋付の羽織を着て居やアがる、全体彼れは何だらう、△然うですな  
 ね、大方お大名の若様でも零落れて、其れが竹賣りにでもなつたの  
 だらう、○「サア然うかも知れぬ、併し稀代な竹屋もあるものぢやア  
 ないか」大抵の者は振願つて見て驚いて居ります、大高は一向其  
 様なことに氣も留めません、早速自分の隠家へ歸つて参りました  
 此方にて流石の寶井も熱々考へました、隨分世事に疎い男である、  
 此方は遣つたものだから若やうと何う仕やうと、其れは向ふの勝手

て通ひませせん、そこで之れを肉風呂と稱へまして、斯ういふ若い勢  
 力の十分満ちて居ります。婦人をば、御自身の御寮所へ向けて此の  
 兩人を寝かしめます、そこでア十分お床が温もつたところ、其の女  
 を去らしめ、其の跡へ這入つてお寝みになると、誠に何うも炬燵な  
 せよは遠ひまして逆上るといふ憂ひもなく、宜い心持なものでさう  
 でございます、何うも大名なせが年を老ると、肉風呂なせよ申して  
 世間は手許でお召使ひになり、この松浦の御隠居などは斯ういふ都合に炬燵代りに遊  
 ばしたものと見ゆます、この松浦の御隠居などは斯ういふ都合に炬燵代りに遊  
 に婦人をお置きになりまして、何かと御用をお爲せに相成ること、  
 ございます、今日しも御隠居は朝から頻りに庭前の雪景色を御  
 覧に相成つて、茶を點てさせて召喚りなせして居らつしやる、然る  
 に取次ぎの者一人罷出でまして取次「ハッ申上げます、意真「何ぢや、取次「  
 エ、只今其角が参りましてございます、意真「オ、宗匠「が参つたか、若  
 し、程なく其所へ通せ、取次「ハッ」と答へて、總て取次は起つて行きまし  
 た、程なく其所へ出掛け、参りました其角は、遙かに下つて兩手を  
 支へました、意真「オ、宗匠「ハッ、ア寒い折柄ぢや、オッ、此方

であるけれど、あの姿をして居る上へ黒箱緞の紋附の羽織を着る  
 とは随分妙なことをする仁もあるもの……アッ、ア失策だ、彼様  
 な物を着て歩いて居るうちに、若し松浦の御家來にでも見附かるや  
 うなことに相成ると大變だ、ウツカリ拜領の御紋附を彼れに與へた  
 が、これ後日彼れ是れあつてはならぬ、一應お届けを致して置か  
 う、と斯く思ひ付きましたから、そこで早速當家の拂ひを致しまし  
 て、やがて被布を着用いたし、其の料亭を出でます、豫て其角は  
 本所にあります、松浦侯のお屋敷へ出入を致して居ります、豫て其角は  
 眞軒と仰しやつて御隠居の身の上でありすが、専ら風流の道をお  
 學びに相成りまして、至つて其角は御意に通りでございます、最  
 此の御隠居は七十に手も届かうといふお仁でございます、御壯健な  
 こと、でございまして、お手許には十六七歳のアッ、ア太つたところ  
 のお傳婢が二人といふもの附き切つて居ります、色怖の道は迅に捨  
 て、お了ひ遊ばして、別段に左様な氣振はございせんが、何うも  
 此のお年を召して居られますので、寒い時分にお寝みになります、  
 時に炬燵へ這入つた時は心持が宜しいが、夜中になると何うも逆上

へお通入りなさい其角何うも有難うございませす、御隠居様には御壯健の体を拜しまして誠に有難き仕合にございませす、意真「御身も無事で結構ぢや、何うも今日は汝の世界ぢやな、雪月花の三景を榮むうちにも、先づ雪景を以て最上とする、庭前の景色は何うぢや、其角誠に結構でございませす、意真「今日は何うぞ緩容遊んで行つて呉れ、其角有難うございませす、エ、早速ながら御前に申譯のないことが出来ました、それ故にお断りかた、伺つたやうな次第でございませす、意真「ハ、ア申譯がないと云つて、何うかしたのか、其角「ハ、實は御前より過日拜領いたしました、御紋付の羽織でございませす、意真「ハ、ア、其れが何うした、其角「今日は妙な寒さの折柄でございませす、この被布の下に着用いたしまして、丁度兩國橋へ掛かつて参りました、すると圓らす私の友人に出會ひました、其れが箕しいところの身装を致して、零落れたも、際物賣を致して居りました、餘りのことでございませすから、其の者を呼び止めまして、一寸其の近邊の席貸しへ通入りました、段々身の上を聞いて見ましたところ、今日の活計にも追はれるといふやうな次第でございませす、餘りのことに見るに見兼ね

ねましたので、御前から拜領いたした御紋附をウカと其の者に遣しましたやうな次第でございませす、若し當お屋敷の方々が御覽にでもなりまして、御谷めを察ります時は甚だ恐縮の至りでございませす、何を申しまして、今日の態を實に見るに見兼ねまして遣はしましたやうな次第でございませす、何うが其の邊のところは悪からず思召のはきをお願ひ申したいと心得まして、斯くお目通りを願ひましたやうな次第でございませす、意真「ハ、ハ、何も其様なことを断るには及ばぬではないか、汝に乃公から進上したものだから、汝が其れを若やうと又他の者に遣らうと、それは汝の勝手である、何も別段に其のやうなことを届けに参るにも及ばぬ、併し汝の友人とあれば何れ風流の道を専らと遣る者であらう、其角「左様でございませす、定めて御存知であらうと心得ませす、淺野家の浪人でございませす、大高源吾といへる者に遣はしましたのでございませす、意真「大高源吾……ハ、ウそれは何か、若年ながらも餘程出来るといふことを聞いたこともありません、其角「左様でございませす、風流の道は中々辨へたものでございませす、併し名を子葉と申します、仁でございませす、意真「然う、碓かに然





大 高 源 吾

意味を何う取つたな其角「へエ」御意にございます。昨年まで彼れは浅  
 野家の近習役を勤めまして、随分立派な男でございましたが、僅か  
 一年経つか経たざる其のうちに、如何に零落れたとは云ひながら、  
 あのやうな時の物の商賣を致して居りまする、餘り零落れやうが甚  
 いと思ひまして、そこで「ア」私に彼の身の程を思ひまして、「歳  
 の瀬や水の流れど人の身は」と大高源吾のことを思つて認めましたの  
 でございます、成程拙者の今日身の案として呉れるが、人間といふも  
 と見れば、成程拙者の今日身の案として呉れるが、人間といふも  
 のは然う捨てたものではない、ア其のうち七轉八起といふこと  
 がある、今は斯うやつて貧乏の底に陥つて今日の活計にも追はれて  
 居るが、また「春にもなれば此方も少しは運の向いて來ることが  
 ある、といふ意味で、「明日待たるゝ其の寶船」といふのは、好き夢  
 でも見て十分に今に出世をする心中である、ア行く先を見て居て  
 呉れよといふ意味で、私も少しは剛みになつた、そこで安心して  
 別れたやうな譯合でございます、宗匠成程、宗匠汝は既に先年僅か十  
 七文字を以て阿田川にて雨乞ひをなし、なか／＼茅場町の其角は

大 高 源 吾

い、江戸で當時俳人にては一といつて二と下らぬと、他人も稱め汝  
 も此の道には出抜けた人のやうに心得て居る、が武士の了簡といふ  
 ものは知るまい、今日は何日だと思ふ其角「へエ」意真「今日は十三日  
 だな其角「へエ」意真「明日は十四日だ」「明日待たるゝ其の寶船」ア「斯  
 うなくては何は叶はぬ、大高源吾は忠義なものであるな其角「へエ」意真「  
 へエ」ぢやアない、宗匠篤と考へて見よ、竹賣を致して居るとは感  
 心ぢや、如何にも大高源吾は忠義な者であるをよ」と膝をボツと叩  
 打ち遊ばして御恩居は御威心でございませしが、流石の茅場町の資  
 井其角も催怒と致しました、乃公も當時この江戸表で俳道では人の  
 知つたる者である、其れが此の句の意を取違へたと云はれては残念  
 と、早速御恩居からお暇を頂いて、さて愈上此の句の意を種々に苦  
 心を致して、漸うのことに其の夜に至つて悟るといふことに相成つ  
 て、時入りの問答に圖らず吉良家の門前に於て別れを告げやうとい  
 ふ、大高源吾、資井其角の訣別といふお話でございます、一寸一寸思  
 入れまして次回に。

大 高 源 吾

されば「過ぎたるは過ぎ及ばざるがごとし」とか申して、  
 くることもありまする道理、實に元祿年間、寶井其角といへる仁は  
 なかしく、以て俳諧の道には有名なる御仁でございまして、  
 日松の御恩居に一本遣られたので、先年隅田川に於て雨乞を致し  
 僅か十七文字で雨を降らした、尤も昔時は此の早廻の時に和歌を以て天に願ひ雨  
 説いたしました、尤も昔時は此の早廻の時に和歌を以て天に願ひ雨  
 を降らしたなと、いふことが度々ございまして、「道理や日の本なれ  
 小町の雨乞なと、は有名なるものでございまして、  
 一首を小町が詠じたりとては又天が下とは」といふ僅か三十一文字の  
 が降り出したといふやうなことを云ひ傳へてございするが、  
 する當今にして見ますれば、天文博士はなくとも測候所といふも  
 がありまして、大抵その天候の様子を見ますれば、いづれの日か  
 に風が新う變つて來て、折候は變候したら雨になるとか、  
 或は風が新う變つて來て、折候は變候したら雨になるとか、

第 四 回

大 高 源 吾

になるかといふやうなことが、十中の八九までは合ふものでござ  
 います、昔時の雨を降らしたといふのは、アア雨は其の時が來つ  
 たのでございす、或る一年江戸表に於て、大層旱魃が致しました、  
 踏方で雨乞を致したり、色々なことを致しました、  
 つたか一向雨が降らなかつたのでございす、その時茅場町の其角  
 と云へる者は、隅田川にて雨乞を遣らうといふので、心を籠めて一  
 首を認めて之れを天に捧げ祈り始めました、  
 が感應しまして、たるにや俄かに夕立が致しました、  
 句は皆御存知の「夕立や田をみめぐりの陣ならば」  
 を以て雨を降らしたと云ひ傳へてありす、  
 ると左様なことは餘り受け取れぬやうに心得ます、  
 句俳諧の道に名を揚げたといふので、畢竟する本人を願めるために  
 云ひ傳へたものでございませうか、  
 さいました、この仁が天狗の鼻を拗折られたといふ話、  
 すが、序でありませすから、何ひます、  
 裏に於て折の道では、寶井其角よりアア上越す者はない、  
 大した者で

大 高 源 吾

あるといふので、自己も當時風流の道では日本第一であると思心  
 致して居りましたることでございませす、然るに此の仁が或る時花會  
 を致さんと、兩國の万八に於きまして自分の主となつて會を催しま  
 した、まづ貴賤老若の差別なく、總体風流の道を専らと致す者の許  
 へ招待状を發ししましたることでございませす、そこで其の當日に相成  
 りますると、樂まつて來ました者は夥しいことでございませす、吾  
 れもく、と刻限違へず出席いたしました、万八の玄關先には机を据  
 るまして、寶井其角の弟子の輩が何れも來客に膳札といふものを出  
 しまして、何うぞお二階へお上りを願ひませす」とある、皆々空手で  
 來る者はございませせん、多少どもに祝儀を包んで参りますること  
 ございませすから、其れをば受取りまして一々膳札を渡しませす、そ  
 で其の日に集まりましたる者は凡そ三四百名といふもの集まつたの  
 ると、オツと斯う表から這入つて参りましたのは誠に如何しいとこ  
 ろの一人の老爺でございませす、何のことはない乞食坊主といふやう  
 な風体を致し、汚れ垢付いたるところの木綿の衣類を着まして、腰

大 高 源 吾

衣を纏ひ、頸には頭陀の袋を懸けまして、網代の笠には藜の杖、腰  
 が曲つて居りまする詰らぬ梅干老爺でございませす、オツと玄關先へ  
 進つて参りますると、寶井の弟子共は「オイ、汝達の這入る所で  
 はない、出ないよ、サッ行け」乞食と間違へたのでございませすから  
 新様な粗朧な言葉を選つて居ります、彼の老爺は少しも恐れず被つ  
 た笠を脱りまして老爺「エ、私は決して乞食ではございませせん、伊賀  
 國の片田舎に住居を致しまする田舎者でございませす、承はりますれ  
 ば今日御當所に於て御有名なる寶井生先の結構なる花會をお催し  
 に相成るといふことでございませす、私は斯かるところの見る影もな  
 い者でございませす、少しは風流の道を嗜んで居る者でございませ  
 國許への土産話に致したいと心得ませす、その花會の席上を一應拜  
 見いたしたく罷り出でましてございませす、誠に是れはお粗末なるこ  
 とで甚だお耻しいことでございませす、ほんの心ばかりの祝儀の印  
 でございませす、何うぞお納り下されませす、と小さな小玉を一個  
 入れました紙包みを差出しました、別段に名前も何も書いてはござ  
 いませせん、其れを机の上に置きませしたから、互に弟子共は顔を見合

はノコ、二階へ上つて参りました。尤も前に皆様御注意をして下  
 されと報したことでございませうが、この老人は別段に二階へ上ら  
 ともせず、段梯子を上へ上つた所へ半身を懸し、手摺に倚掛  
 かつて、廣座敷を見ておれば、大勢の來客は、ムツと腰を前へ引き付  
 けまして、何れも今日を曠と若飾つて、皆々其所に居流れて居ります  
 時々には、柳橋の藝妓或は仲居等がお酌を致して、頻りに客を愛應して  
 居ります。座敷の真中には一寸講談師がお饒舌を致します。高座  
 のやうな物を据ゑ、その上に二脚の机が据ゑてございませう、  
 その机の上には、式紙短冊或は扇子半紙の類を置きまして、脇の硯箱に  
 は筆壘が添はり、題が出ると隨つて此座へ登つて即吟を遣る者もあ  
 り、また二人是れへ出まして付合を致します。若くは彼の老爺は、  
 常に盛んで居ります。有様を見たり、何れも面々大いに酒も廻つて参り  
 て、其の盛んなる有様を見たり、何れも面々大いに酒も廻つて参り  
 ひで、ありました。が、何れも面々大いに酒も廻つて参りまして、彼  
 方此方で四方山の談話を致して、榮み合つて居ります。うちには、  
 其角でございませうが、頭は宛ながら、菘菜魚のやうにヒカク、  
 光井

せて、大變な奴が遣つて來やアがつた。今日は思ひました。が、たどへ  
 かる如何しい身裁をして居りませう。今日、上下賤の差別なく、  
 すべて風流の道を嗜む者は、皆参つて居ります。汝は、此様な汚ない身  
 裁をして來た者は、一も人もございませんから、汝は、其のやうな穢し  
 い身裁だから、折角ぢやが、斷るといふ譯にもなりません、  
 に、顔を見合せ、折角ぢやが、斷るといふ譯にもなりません、  
 を好むのか、席上へ出掛けて來て、腰部の一つも、紙入財布などを、  
 な物を持つて來やアがつたのか、但しは、又他人の紙入財布などを、  
 ふものか、何だか譯の分つたものぢやアない、御銘々に、懐中物に氣  
 をお付けなさいと云つて置きなさいと小聲で云ひながら、  
 ア、何うかお二階へお上りなすつて、と腰札を前へ差出しますと、老爺  
 減相な、なか、新様な物を頂きます。と腰札を前へ差出しますと、老爺  
 は、んの隅つこの方でも宜しうございませう、皆様方が即吟などをお遣  
 りなされるのを聞かして、頂くのが、樂みでございませう、  
 され、まするやう、草鞋の紐を解いて、腰の埃を拂ひ、杖と笠を片傍  
 に置いて、頭に懸けたる頭陀袋を外つて、腰の埃を拂ひ、杖と笠を片傍  
 せて、大變な奴が遣つて來やアがつた。今日は思ひました。が、たどへ  
 かる如何しい身裁をして居りませう。今日、上下賤の差別なく、  
 すべて風流の道を嗜む者は、皆参つて居ります。汝は、此様な汚ない身  
 裁をして來た者は、一も人もございませんから、汝は、其のやうな穢し  
 い身裁だから、折角ぢやが、斷るといふ譯にもなりません、  
 に、顔を見合せ、折角ぢやが、斷るといふ譯にもなりません、  
 を好むのか、席上へ出掛けて來て、腰部の一つも、紙入財布などを、  
 な物を持つて來やアがつたのか、但しは、又他人の紙入財布などを、  
 ふものか、何だか譯の分つたものぢやアない、御銘々に、懐中物に氣  
 をお付けなさいと云つて置きなさいと小聲で云ひながら、  
 ア、何うかお二階へお上りなすつて、と腰札を前へ差出しますと、老爺  
 減相な、なか、新様な物を頂きます。と腰札を前へ差出しますと、老爺  
 は、んの隅つこの方でも宜しうございませう、皆様方が即吟などをお遣  
 りなされるのを聞かして、頂くのが、樂みでございませう、  
 され、まするやう、草鞋の紐を解いて、腰の埃を拂ひ、杖と笠を片傍  
 に置いて、頭に懸けたる頭陀袋を外つて、腰の埃を拂ひ、杖と笠を片傍

大 高 源 吾

れるものではございませぬ、何方でも構ひませぬから一つお題をお  
 出しを願ひたい、そのお題に基きまして一句口吟みたいと心得ます  
 何うぞ何方でも宜しいから願ひます、といつて呼ばつて居ります  
 るが、誰れ一人と致して題を出す者がございませぬ、題を出しまし  
 て即吟でも遣りますと、都合によつては其の場を以て七點を入れん  
 ければなりません、此所が好いとか悪いとか、其の句によつて悪い  
 所を直さんければならぬのです、其角何うでございませぬ、別段に題  
 を下さることも出来ませぬ、ア無くても構ひませぬが、何  
 方か一つ點を打つて頂くお方はございませぬか、〇元談ぢやアござ  
 いませぬせ、僅か一句で雨を降らせやうといふやうな大先生に向つ  
 て、誰れが點の入れ手があるものだ、ア芽場町の宗匠、點を打つ  
 者は恐らくないね、左様、ア無い、有りさうな筈がない、  
 つこの方でガヤ、云つて居ります、其角何方でも宜しい、今日は  
 貞殿の差別はないのでございませぬから、乃公が點を入れて遣らうと  
 いふ、その點者によつて又此方も即吟の遣り方もあります、其方の  
 方は何うですな、然う俯向いて居られましては甚だ困るではござい

大 高 源 吾

して、嬰應によつて自分も餘程酔つたものと見ゆまして、やがて羽  
 織袴の儘、イと高座へ上りました、ウイ、願ひで居りました、連中  
 は「そりや親玉が上つたぞ、之れを聞かう」といふので皆々の願  
 も鎮まつて了ひました、何れも高座の方へ目を注げて居りますと、  
 やがて其角は机の前に座りまして、今日小子が花會を催しましたる  
 て、皆さん方に申上げますが、何分御大勢様のこととござ  
 斯く賑々しくお集り下さいまして、また夫れ、御心配に預りまし  
 て、誠に何うも千萬層なうございませぬ、何分御大勢様のことでござ  
 いますから、一々御禮に廻ります、何分御大勢様のことでござ  
 はとさいませぬが、此の所から御一統様にして御禮を申上げます  
 ることでございませぬ、ア何分我れ、の榮みといふのは是れ風流  
 を専らのもので致します、先程から大分斯う付合即吟なせもありま  
 して、なか、面白く、先程から大分斯う付合即吟なせもありま  
 講も同様でございませぬ、一寸此の所が明きました、今日はア謂は、無  
 らして頂きましたやうなことでございませぬ、何か私にも一首此所で  
 吟でも遣らうと心得ますが、さて是れといふお題がないといふと遣

大 高 源 吾

「せんか、ア、鯉屋の宗匠、何うか貴方一つ點を打つて下さい、鯉屋、何うして、其、平御免を蒙ります、其角、それでは甚だ困るではございませぬか、ア、ちやア嵐雪、貴方何うです、嵐雪、此方も其平です、其角、ちやア法來、何うぞ貴方一つ、去來「吾等も同じや、其角、杉風さんは杉風、ぼつ、其角、ぼつ、とは何のことで、杉風「イヤ同じくのことです、其角、然う云はれると私も甚だ困ります、何うも何方も點を入れるか方がないとして見れば、鏡舌することも出来ませぬ、〇左様、ア止した方が宜しいふやうな勘定です、から止ませう、〇左様、ア止した方が宜しいな、貴方は人に點を打つて遣らんければならない、其の宗匠が點を打つて呉れいと仰しやつたつて、誰れも無い筈です、其角、其所が無禮講ぢやございませぬか、私が一々遣つたのが秀逸の句になるといふではなし、遠慮なく、私、直して頂いてこそ今日の樂みになると、そのではございませぬか、と頻りに云つて居ります、が、誰れ一人として私が點を打たうといふ者がございませぬ、それを最前から段、御子の中央に在つて頭を出して、手摺に倚り掛かゝて居りました例の、田舎者の老翁でございませぬが、何思ひけん、スアと頭を上げまして

大 高 源 吾

老翁、誠に今日の御盛大なるところの此の花會の席で、見る影もない私のやうな田舎者が生意氣なやうではございませぬが、お見渡し申したところ、何方も點を打たうといふお仁がございませぬ、一つ、私が點を打つて上げませう、云ひながら、其所へ遣つて参ります、した、大勢の者は氣が付いて見ると、何のことはない、乞食坊主のや、な、穢い坊主で、殊に腰は屈つて居やうといふ、梅干老翁、〇何だ、彼れは、ハ、ア彼れだな、最前お弟子が懐中物を氣を付けると云つたのは、〇然うよ、〇飛んでもない乞食坊主が上つて來やアがつた、  
「盲蛇物に畏ぢず」とは是等のことであらう、能う彼様は大膽なことを云へたものぢや、皆々は呆れ返つて見て居ります、其角、は之れを呢と眺め、心中大に憤り、返つて見て居ります、如何に物を辨へぬ、田舎者、と云ひながら、乃公を全体何と心得て居る、當時この江戸表に於て一といつて二と下らぬこの其角を捉へて點を入れて遣らうなんて生意氣な老翁が出て來やアがつた、野郎に一つ蒲座の中で赤恥を被かして遣らうと、其角も立腹の餘り、其角「ア、御老人、何かなお前さんが私の句に點を打たうと仰しやるのか、老翁「ハイ、貴殿の差別はな

大 高 源 吾

い、其れが風流だからと仰しやつて居らつしやいましたから、そこで私のやうな田舎者の老爺が一つ點を打つて見やうと思ひますので、其角「左様か、それは何うも有難い、ちやア一首私に此所へ来てりませう、是れに書いて置きますから、何うぞお前さん此所へ来て可かぬ所は直して下さい、老爺「ハイ其の邊は承知を致しましてございませう、何を生意氣なことを吐すと、心の中では憤つて居りますから、少しも考へるの何うのといふことはございせん、眠と老爺の顔を眺めて居りましたが、ヤク／＼と其れへ一句認め、その短冊を机の上に乗せまして其角「サッ何うぞ御遠慮なく是れへお上りなすつて、可かぬ所があつたら直して下さい」と其角は高座を下りました、老爺が何と點を入れるであらうと見て居りますと、「御免なさい」と餘程太儀相に致して先づ其の高座へ上りました、頭陀袋の中から眼鏡を取り出しまして其れを懸けますると、短冊を手に取つて眺めて居りましたが、老爺「ハ、ア成程、ア、流石は當時江戸で一と云つて二と下らぬ寶井寶齋其角先生だけあつて、墨色といひ筆法といひ、中々或心なものでござります、其角「ア、遠慮なしに老人、何うか讀ん

大 高 源 吾

でお呉んなさい、老爺「ハイ、ア、ア、「出過ぎたるはかげに咲いた梅の花」ハ、ア、イヤ即吟は中々天晴なものでござります、其角「イヤ讀めるばかりでは困ります、せ御老人、何うか點を打つて下さい、遠慮なしに」尤もこの句は此の老人を、此様な馬鹿な老爺はない、あの茲な梅干老爺奴がといふ惡口の意味でござります、そこで「出過ぎたる馬鹿げに咲いた梅の花」と違つたのでござります、ア、ア、大抵の者なら斯う書かれたら腹も立ちます、出過ぎやアがる馬鹿な梅干老爺奴がといふのが、此の十七文字に籠つてござります、ところが此の老人は大口開いて、カラ／＼と打笑ひましたから、一座の面々は互に顔と顔とを見合せて、餘程この坊主生意氣な坊主だ、己れが宗匠に教れただけに悪口を書かれて笑つて居るといふのは、と銘々見て居りますと、其角はズツと側へ來まして其角「何うです、ア、秀逸の句にはなりません、老爺「左様ぢやな、能く出来たやうではあるが、何うも是れでは秀逸には行きませぬ、其角「ホウ何處が行きません、遠慮なしに點を打つて下さい、老爺「左様かな、ヤッお望みとあれば點を打つて上げませう、何うか氣の毒だが此の潤點を去つて



大 高 源 吾

貴ひたい、  
 と云ひながら此の短冊を  
 去れ、ハテナ……手に取つて暫らく考へました  
 馬鹿げに咲いた梅の花」といへば、満座の中へ此の老翁が  
 つて、何を梅干老爺奴がと罵つた意味になるのです  
 を去るとなりませうと「出過ぎたるはかげ(業陰)に咲いた梅の花」  
 一寸ばといふのはといふので大變な遠ひになりませう  
 ますると、たよへば手入れをしてないところの庭の植ゑ込みに、  
 もあれば種々様々の樹木がありまして、その梅の枝が一本  
 ふへ出まして、餘り出過ぎて了つたものですから、遂に植  
 りまする植手の葉の蔭の方になつて了つた、それでは宜しく  
 ア、惜しいものだ、ア、出過ぎて了つた、花は葉蔭の所に  
 と新ういふ意味になつて、随分句らしう成つて参ります、  
 咲いたといへば老爺を侮つた意味になりませうが、葉蔭に  
 茅場町の其角が出来ぬ人なら鬼も角も、出過ぎた所の意味  
 此の點をお打ち下さいましたので、漸うソコノ句らしう成つて  
 参りました、失禮ながら定めて斯の道には御有名なる宗匠か  
 御俳名を仰せ聞け下し置かせうなれば有難う存じます老爺ハ、  
 、茅場町の宗匠、名前を問はれて何の某と名乗るはどの者でも  
 りませせん、餘りお前さんの鼻が延び過ぎたから折つて置か  
 しまして、そこで一寸今日はお身の鼻を折つたやうな譯だが、  
 私を思はれぞといふ名の程の者でもございません、伊賀の片  
 に住居を致す田舎者、私は翁巷芭蕉といふ者であります、  
 いたる時はハッとはかりに驚かした、實は其の頃はひ有名  
 先生でございませう、伯龍ア此の仁の句には色々意味の籠  
 ますさうで、ア伯龍ア此の仁の句には色々意味の籠んだ句も  
 ますさうで、ア伯龍ア此の仁の句には色々意味の籠んだ句も  
 ますさうで、ア伯龍ア此の仁の句には色々意味の籠んだ句も

大 高 源 吾

の潤点を去れと云はれたので、暫らく短冊を持つて見て居  
 が、何思ひけん遙か壘二三壘後へ飛び退り其角ア、誠に恐  
 した、成程是れは潤點が一つ多うございませう、實に何うも  
 此の點をお打ち下さいましたので、漸うソコノ句らしう成つて  
 参りました、失禮ながら定めて斯の道には御有名なる宗匠か  
 御俳名を仰せ聞け下し置かせうなれば有難う存じます老爺ハ、  
 、茅場町の宗匠、名前を問はれて何の某と名乗るはどの者でも  
 りませせん、餘りお前さんの鼻が延び過ぎたから折つて置か  
 しまして、そこで一寸今日はお身の鼻を折つたやうな譯だが、  
 私を思はれぞといふ名の程の者でもございません、伊賀の片  
 に住居を致す田舎者、私は翁巷芭蕉といふ者であります、  
 いたる時はハッとはかりに驚かした、實は其の頃はひ有名  
 先生でございませう、伯龍ア此の仁の句には色々意味の籠  
 ますさうで、ア伯龍ア此の仁の句には色々意味の籠んだ句も  
 ますさうで、ア伯龍ア此の仁の句には色々意味の籠んだ句も  
 ますさうで、ア伯龍ア此の仁の句には色々意味の籠んだ句も

大 高 源 吾

意味の籠んだ句ださうでございませぬ、随分其の頃はひこの仁に頼り  
 うといふ者はない位、今芭蕉といふ名前を承はりますると、實に何  
 れも面々はアッとはかりに驚かされた、第一に驚いたのは茅場町  
 の其角、斯かるところの宗匠とは露知らず、誠に粗略な取扱ひを致  
 した、平に御容赦に預りたいといふので段々詫言を致しまして、遂に  
 其の仁の弟子となり、追々修業を致しまして、芭蕉十哲の一人とい  
 ふことに相成りました、遂に満座の中で一本遣られましたやうな次  
 のは茲でございまして、誠に今日松浦の御隠居に句の意味の取りやうが  
 第でございまして、されば今日松浦の御隠居に句の意味の取りやうが  
 間違つたと云はれて、誠に自分も心中口惜しくつて堪りませぬ、左  
 様なれば松浦の御隠居が出来るかと云ひますると、其の身とは較べ  
 ございまして、アア一寸位お遣りなされるけれども、其の道と學んで居  
 るものにはなりません、今さすかは武士で此の風流の道を學んで居  
 る者、ちや、了簡の置き所が違ふと云はれたのが何うも合點が参りませ  
 ん、そこで事に上つたら乃公が取違へて居るのであるまいかと考  
 へまして、暇乞ひを致しますると早くお屋敷の御門を叩きまして、

大 高 源 吾

なる川端へ來つて、傘を片手に持ちながら雪の降るのも厭ひなく、  
 「妙なことを仰しやつたな、今日は十三日、明日は十四日……ハア  
 ナ、明日待たれる、其の寶船、竹や、竹や……」往來の者は腹を潰  
 しました、〇「オイ、何だらう、彼のお醫者見たやうな坊さんは、  
 氣でも狂つたのではあるまいか、  
 居ると見ゆるなア……オイ、  
 處は川ですからね、ウツカリするど川の中へ轉落ちますよ、其  
 、イ何を汝達が知つて、黙つて居れ……今日は十三日、明日は十四  
 日……」  
 通り明後日は十五日、明後日は十六日だ、其角馬鹿なことを云ふな  
 明日待たれる、其の寶船、竹や、竹や……  
 つて行き過ぎて了ひます、中にはまた顔を見知つて居る者もあると  
 見ゆまして、「決して相手になるな、彼れア今江戸で名高き茅場町の  
 寶井先生だ、何か句でも考へて居らつしやるのだ、相手になるな」  
 と知つてる者は其のまゝ行つて了ふ、自分は何う考へても合點が参  
 りませぬ、そこで今日は出入先を二三軒廻つて來やうと思つて出た

大 高 源 吾

のでございませうが、なか／＼何うしてア／＼廻つて歸るといふやうなことは出来ません、松浦の御隠居に云はれたことが氣になつて堪りませんから、考へながらも茅場町の宅へ歸つて参りました其角ア、今歸つたぞ家内「オヤ貴郎、今お歸りでございませうか、大層お早うございませうしたね其角ア、今日は十三日だな家内「ハイ左様でございませう其角明日は十四日だ家内「そりやア仰しやらんでも分つてございませう其角明日待たるゝ其の寶船家内「何がございませう其角「汝の知つたことではない、少し私は考へることにがあるから、與へ誰れも来ないやうにして呉れ」メツと其れなりで與へ這入つて了ひましたやがて机に懸れて坊主頭を撫で廻しながら「アア残念だな、今日は十三日、明日は十四日、是れが分らぬ、明日待たるゝ其の寶船、竹や／＼竹……たけ「ハイお呼び遊ばしてございませうか」と下女は其所へ出掛けて参りました其角「何しに汝は来た、開けてはならぬと云つて置いたではないか下女「でも貴方、竹やといつてお呼び遊ばしたので」お竹といふ下女は飛んでもない氣を廻して、飛んで行つて小言を吃つて、其れ儘逃げ歸りました、跡で一生懸命に「ハナナ何う

大 高 源 吾

も分らぬことであるな、今日は十三日、明日は十四日、竹や／＼竹……家内「こりやお竹、汝何をして居るんだ、彼様に旦那が呼んで在らつしやるではないかたけ「イエ只今参りましたら大層お叱りを蒙つたのです家内「最う一通行つてお在で、襦袢を開けて這入ら、叱られる、家内「何だか合點が参りませう家内「貴方何うか遊ばしたのではございませうか其角「エ、イ、汝の知つたことではない、竹や／＼竹や……」家内「驚いて了ひました、何うやら氣が狂つて居る、事によると可怪しな所へ小便でも仕なすつたに違ひない、氣が餘程逆上て在らつしやるぞ、餘り側へ寄付かぬやうに致して居ります、夕景に相成りますと家内「貴方御飯は如何でございませう其角「其所どころではない、其方へ行け、今日は十三日、明日は十四日……」と其ればかりを云つて唯々一心不乱に考へて居りましたが、最う其のうちには日もメツアリと暮れ渡りました、ア此の位な仁ですから彼れか是れかど色々なことを考へて居りましたが、別に彼れが竹を持つて賣り歩くのが忠義といふ譯でもなければ、何が蒙いのだから、大體今日の日活計にも困る位な人間だ、乃公が遣つた羽織を愛んで了つて

大 高 源 吾

だて、今日十三日、明日は十四日、ハ、アして見ると十四日は  
 浪野様の切腹なすつた日か……、一近頃噂を聞くに、何でも赤穂  
 の浪人が、主人の仇とする吉良上野といへる仁が未だに存命して居  
 るから、何れでも彼でも其の者を討取つて主人の無念を晴らさうとい  
 ふので附け狙うて居るけれども、相手は何分高家衆の一人、四位の  
 少将の位に叙つた仁、搦て加へて十五万石の出羽米澤上杉侯といふ  
 後橋があるから、なか／＼赤穂の浪人が幾ら急つたところでも討つと  
 いふ譯には相成らぬといふ次第も聞いて居る、赤穂の浪人が様々に  
 姿を變へて吉良の屋敷を附け狙ふ……、ハ、一是れア事によると大高  
 源吾殿も其の一人ではあるまいか、月こそ異れ明日は十四日、明日  
 待たる乃其の寶船……成程、流石は松浦老侯、武士の胸を知らぬと  
 仰しやつたが、事によると明日の晩、大高氏の云はるゝ通り其の寶船  
 同し十四日の主命、吉良の屋敷へ亂入なし、仇を討たうとい  
 ふ其の前日のゆゑ、態と彼のやうな身装をして吉良家の様子を探ひな  
 すつたものか、一年の瀬や水の流れと人の身は、明日待たると其の寶  
 船オ、然うだ、遠ひないよ、其れに相違ないぞ、エ、十情な

大 高 源 吾

中にでも致して歸れば少しは人間らしい所もあるが、彼のボロ／＼  
 いたした筒袖の上から彼れを着て、竹を擔げて歩くといふやうな、  
 些と大高は老碌をして居るやうに心得て居るに、其れを天晴なる忠  
 臣ちやと仰しやつたのが何うも合點が行かねなア、是れア此方だ  
 けではない、松浦の御隠居も取りやうが間違つて居る、然うでなけ  
 れば何うも是れしきのことか忠義だといふことのあるさうな筈がな  
 い、何うか斯うかど頻りに疑も遣らず、唯々机に倚掛かつて考へて  
 居りませううちに、最う御家内も奉公人も堪り兼ねましたか、皆々臥  
 床へ這入つて寝て了ひました、丁度夜半過ぎの頃はひッ／＼仕な  
 べら自分は今も考へて居りましたが、「さて大高といへる者は彼れは  
 浪野内匠頭様の近習で、それでお屋敷へ此方が上つたこともあ  
 る、致し、折々はまた鐵砲洲のお屋敷へ此方が上つたこともあ  
 ると、忽ちの間に其の家は絶れ、その日のうちに腹を切るといふや  
 うなことになつた、そこで大高氏も浪入をしたんだが、オ、確か彼  
 れは去年の三月……、然う、十四日だつけなア……、オヤツ、ハ、ア

第 五 回

また花々しく本望をお達しなされたら、一句を浮んで進上いたしました。是れは好い所へ気が付いた、然う気が付いて見ると、實に其の晩は嬉しくつて、マンヤもする、其の目算を致し、遂に一夜を明かしました。明くれば何日なりけん十二月の十四日の早天、左様なことを知らず致して、鯉屋、嵐雪、杉風の三名が、今日の雪天を幸ひに、茅場町の宗匠を引出して向島邊へ出掛けて行つて、雪景色を見て楽しんで出掛けて参りました。其の三名を捉まへ、いよく寶井其角が越前侯の附家老のお屋敷に於きまして、大高源吾と二度の出會ひといふお話に引移ります。が、次回のお楽しみと致して一寸息。

さて其の翌日のこととございまして、今朝は雪も漸く降歇みました。たることでありまして、朝のうちは少くや靄が降つて居りました。全く午刻頃はひより晴間と相成りました。晴天といふ譯ではござい

いことを致した、左様なことを知らずして、金子を遣はしたり、羽織を脱いで與へたりしたが、大高氏は心の中でお笑ひなすた。であらう、御自身は眞實貧乏して在らつしやらぬから其れは何でもない、彼の羽織を其の坊で召してお歸りなすつたのだ。是れは飛んでもないことを致したぞ、待て、何うぞ致して今一應大高氏に面會いたし、其のお説言を致したいものだ。丁度宜いことがある、此の間から鯉屋の宗匠が、何でも彼でも乃公の出入り先の屋敷で、越前侯の附家老本孫三郎様のお屋敷へ何うぞ行つて呉れいと云つて、何處も頼まれて居るんだが、乃公も出入り先が澤山あり、家老位の屋敷は面倒臭いと思つて、是れまでは一過も行かなかつた。が、彼の屋敷の丁度隣りには吉良の屋敷に相違ない、是れア明日は、此方から頼んで鯉屋に案内をさせ、兎も角も本多侯のお屋敷へ参つて、そこで夕景まで付合の一日の晩大高氏も吉良の屋敷へ出向ふで泊るとする、それで愈上明日の晩大高氏も吉良の屋敷へ出向ふといふやうなことになるやも計りがたい、且はお詫を致したいもの、何でも今生の別を告げ、且はお詫を致したいもの、

大 高 源 吾

ませんが、盛天ながら雪は穩歌みましたることとございます、され  
 ば世間は一面の銀世界と相成りまして、風流人なせよいふものは折  
 ういふ所を至極好みまするもので、その頃ほひ風流を専らと致しまして  
 かねて出掛けます中にも、その頃ほひ風流を専らと致しまして  
 實井其角とは無二の交際を致しました、彼の鯉屋或は嵐雪、杉風の  
 三名の者は、其の頃名代の宗匠でございました、此の三名が打揃  
 つて向島へでも出掛け、何か付合でもして楽しんで行かうといふので、さ  
 ら、率と茅場町へ行つて、資井宗匠と同道して行かうといふので、さ  
 て三人の者は打揃つて、宗匠はお宅かな、家内は之れを見まして「オヤ何  
 鯉屋、ハイ今日は、宗匠はお宅かな、家内は之れを見まして「オヤ何  
 方かと思つたら、皆様方お揃ひで能く入らつしやいました、  
 うぞお上り下さいまするやう鯉屋ア、今日は宗匠はお宅ですか家内  
 ハイ、宅に居りますでございます鯉屋、それは結構、一寸吾々の参つ  
 たことを取次いで頂きたい、家内は少し迷想相な顔を致しまして、  
 家内、誠に何うも新様なことと申上げましては如何な様ではございま  
 するが、老の宗匠は少々發狂でも致したものと見られて、何うも様子

大 高 源 吾

が、後でございます鯉屋、ア宗匠が發狂なすつた、何時家内實は昨日  
 午後から出まして夕景小前に歸つて参り、それから後にはサッパリ様  
 子が變つて参りました、頻りに何だか竹やぐと云つて、狐か狸で  
 も恐いたやうな盤柳式でございます、今日は十三日、明日は十四日  
 と云つて、そればかりを申して居られます、昨晩などは貴方少しも  
 寝ないのございまして、漸う夜明け前から床に就きまして未だ寝  
 んで居ります、報して宜くは報せも致しませうが、何うも様子  
 が變でございますから、妾も心配を致して居りますので、鯉屋、ア  
 が變でございますから、妾も心配を致して居りますので、鯉屋、ア  
 其れは何うも御心配だ、何は兎もあれ吾々三名が参つたことを一  
 寸報して貰ひたい、そこで家内は様子如何であらうと其角の寢て  
 居ります、居室へ遣つて参ります、頻りに肩を搦いて、お起さなすつて  
 居ります、側へ進み寄り、家内アノ先生、もし貴方、お起さなすつて  
 呼び起されて、其角は不圖目を覺しました、杉風さんのか三方が  
 家内アノ只今鯉屋さんと、嵐雪さんと、杉風さんのか三方がお出で  
 になりまして、何うか此方へ通して呉れ、床も片附けて呉れ、早速其角  
 所へ来た、何うか此方へ通して呉れ、床も片附けて呉れ、早速其角

出で入先で、文嶺公と仰しやつて中々か出来なさいますよ、彼れは私の  
 の本多様のお屋敷へ今から伴つて行つて貰ふことは出来まいか、鯉屋  
 道して呉れいと願されて居るんだが、お前は些ども行つて呉れない  
 ぢやないか、ア夫れは何時でも行ける、今日の此の雪景は近年に  
 珍らしいんだから、消けて了つたら何の楽しみもない、それより何  
 うです、向島へ行つて眺望の好い所で一會催さうではないか、其角「其  
 様なことは何うでも宜い、是非此方は本多の屋敷へ行きたいのだ、  
 それも今日に限るんだ、鯉屋「ハ、ア何故、其角「何故つて今日は十三日だ  
 らう、明日は十四日……、鯉屋「オイ、鼠雪、是れだな、御家内が大層  
 心配して居られたのは……、宗匠「今日は十四日ですよ、其角「ハ、ハ、  
 貴公達が何れも知つたことぢやない、明日待たると其の資船、竹やぐ  
 竹やぐ……、三人は呆れ返つて顔を見合せました、鯉屋「ハ、ア之れを  
 御家内は御心配だ……、宗匠「貴公氣を鎮めんと可きませんよ、何  
 處か悪い所へでも小便を仕て、それから此様に成つたのでせう、其角「

は起さまして手水を送ひ、身支度を致して居ります、其角「ハ、ハ、  
 の者は奥へ通り待つて居りませぬ、程なく其所へ出掛けて参りま  
 した、其角「これは、御一同お揃ひで能く入らつしやつたな、鯉屋「宗匠  
 何うも今日は楽しみな、天気がはありませんか、昨日までは降り積  
 きでありました、が、裸虫の洗濯でも云つて、朝からカッとお天気  
 になつて、それが爲に雪消でも雨垂が落ちるやうなれば少しも  
 も楽しみはないが、漸う歌ひは歌んだが空は曇つて居るし、少しも  
 雪は消けて居ない、ア近年珍らしい雪景ではありませんか、それ  
 で吾々は今日は一、向島へでも出掛けて、この雪を題に一會催さ  
 うと思つて参つたが、何うですな、お出掛けなすつては如何で、其角「成程  
 其れは至極面白い、併しア實は今朝は早く起きやうと思つて居り  
 ましたので、最う何時でも鯉屋「サア、最う午刻過ぎですよ、其角「成程、  
 ぢやア一つ向島の雪見は止しとね、貴公達に折入つてお願ひがある  
 んだが、何うか鯉屋さん、お前の松阪町に越前侯の附家老で本多孫三  
 とを聞いて居るが、あの本所の松阪町に越前侯の附家老で本多孫三





大 高 源 吾

誠に鯉屋は氣を揉みまして、何故其角は此様なでござらう、此様な  
 なら伴れて來なかつた方が宜かつたのだ、御前の御機嫌を損ねば仕  
 まいか、と其れのみ心配を致して居ります、本多の御前は別段氣に  
 もなさらぬ、併し茅場町の其角といへる者は名高い宗匠であるが、  
 何故此様なで居らう、何うも變なことである、何か是れは他に考へ  
 事でもして居るものと思召して、別段お答めはございませぬ、その  
 内に最う夕景にも相成りまして、後には御酒宴といふことに相成つて  
 其れを御飯も下し置かれまして、文嶺ア、今日は大きに何うも結構  
 な遊びを致して有難いことである、何うか皆々疲れたでもあらうか  
 ら、何時なりとも遠慮なく引取つて呉れますやう、鯉屋誠に有難うと  
 さいいます、エ、御前に少々お断りを申上げんければならぬので  
 さいいます、文嶺何ちや鯉屋實は今日伺ひます、際其角の許へ立寄  
 ましたのでございませぬ、するど頻りに貴方のお屋敷へ参りたいと斯  
 様に申しますから、本人の望みに任せ召伴れましたのでございませ  
 が、何うも私共先程から考へて居ります、尤も家内の者も非常に心配を致  
 を致して居りますやうに心得ます、尤も家内の者も非常に心配を致

大 高 源 吾

で片傍に待つて居ります、無用な家來を遣さけて了ひ、さてお待  
 に相成つて居ります、所へ、鯉屋は三人を伴ひましてお目通りへ出  
 ました、まづ三人の者は銘々扶掖を致しました、そこで銘々の挨拶  
 が了りました、後、まづ今日の此の雪を馳走として、即吟或は付合な  
 せを催さうといふので、色紙短冊などをお取寄せに相成りまして、  
 其の連中の中に文嶺公もお加はりになり、また家來の内でも風流を  
 嗜む者が二三名も御招待といふので、前に机を据ゑ、お題が出ます  
 ると、そのお題に基いて即吟なぞを遣つて居ります、また付合を願  
 番に遣つて居ります、「心茲に有らざれば見れども見ぬす、喫へども  
 其の味ひを知らず」とか申して、是れだけ集まつた中にも茅場町の  
 寶井其角は第一の宗匠で、この仁に續く者はないといふ位です、  
 本多の御前は定めて佳句が出るでござらうと思つて在られますが、  
 付合なぞを致して見ます、兎角ト、何ういふものか、ヤッパ、其角は思  
 はしい句が出来ません、兎角ト、何ういふものか、ヤッパ、其角は思  
 なことを申します、時々は口癖のうらで、今日は十三日、明日は十  
 四日、竹や、竹や、といふことを口癖のうらで、今日は十三日、明日は十

に泊ると竹やの因縁が分るのだ。鯉屋「フー、何で分る。其角「左隣は吉  
 其の屋敷だらう。鯉屋「然う。其角「竹や。竹や「...」厄介な代物を  
 伴れて来たと思ひまして、三人は腋下から冷たい汗を掻いて居りま  
 した。鯉屋の宗匠は甚だ迷惑を致しまして、鯉屋「エ、誠に御前に申  
 ねましてございませう。若し夜中に彼れが起きて騒ぐやうな  
 がござりますれば、吾々三人が附いて居りますから、必ず取  
 するこゝでござりますが、何うか今宵一泊お許しのはを願ひた  
 うござります。文嶺「サア、泊るのなれば何ぞ遠慮はない...ア、こ  
 りや誰れかある。近習「ハッ、文嶺「宗匠達を奥座敷へ伴ひ、間  
 延べて置くが宜いぞ。其角「オ、鯉屋「鯉屋、奥座敷では可  
 鯉屋「何で其角「奥座敷では可けないのだ。鯉屋「ちやア何處に  
 らうことなら。玄關の次の室で、隣りは吉良の屋敷で...」鯉屋「何だ、  
 其角「然ういふ所に寝かして頂きたいのだ。鯉屋「勝手に仕  
 も厄介な奴を伴れて来たとは思ひました。が、そこは鯉屋は御家  
 衆に頼みまして、玄關の次の室に二十疊ばかり敷けま  
 あります。其處へ向けて四名の床を敷きまして、鯉屋「サア、貴  
 公氣を

して居りましたのでございます。文嶺「ハ、ア左様か、何だか須りに竹  
 やく、と云つて居るやうぢやのう。鯉屋「サア、それが何うやら憑き物  
 でも致して居るものと見なしまして、本日十四日を取間違へ  
 十三日だ、と申して居りますから、大きに私も心配でならないの  
 でございます。新様な者を召伴れまして、實に申譯のない次第...  
 文嶺「イヤ、何れも其のやうなことは心配には及ばぬ。宗匠「余の屋  
 敷へ向けて来て呉れたのは之れに越した悦びはない、また病氣が全  
 快したら最う一應伴れて来て呉れるやう、その時は又名句も出るで  
 あらうと心得るから、鯉屋「委細承知仕りました...」サア、宗匠、歸ら  
 何をボンヤリして居るんだ。其角「ナア、鯉屋「何だ、其角「へ、  
 紙だせ、其様に笑つては、其角「今日は十三日だ...」鯉屋「最う止  
 へ、お前の其れは聞き飽いて居るから、其角「明日は十四日だ...」鯉屋「  
 未だ、漆膠いなア、サア早く歸らう。其角「最う日は暮れたか。鯉屋「恐  
 た。其角「それなら頼みだがね、今晩は此のお屋敷に泊めて頂きたいの  
 で、鯉屋「困るぢやアないか、お前のやうな其様な無理なことを云つて  
 は、私が盛に御前に對して濟まないから、其角「アア宜しい、今晩當  
 家

は甚だ迷惑仕ります、何を云ふにも僅かな人数のことにございます。御念のため此段か届け申上げ奉ることにはございます。と言葉忙しく届けました、門番は之れを承はつて門を潰して驚かされた門番も、お待ち下さい、それは大變だ、と床より飛び起さして玄關へ飛んで参り、この事を玄關番に申入れました、其は容易ならざることであるといふので、玄關番よりは直に重役へ此の事を申入れる、重役より追ひつて居りました、此の事をお聞き遊ばして「ナニ隣り屋敷へ赤穂の浪人が討入をするとな、門内へ呼び入れよ」と直に居間からお起き出でになりまして、身支度を十分に遊ばしたること、でございます、そこ御近習の面々にお手燭なぞを持たせて玄關先へお出ましに相成つた、その内に耳門を開いて門番「ア是れからか、入らなさい」どありませす、やがて兩人這入つて参りました、是れぞ赤穂の浪人、一名は高源吾、今一人は富森助右衛門にございます、何れも夜討火事襲来に身に纏ひまして、御玄關先へツカ

りて寝なさい、お前が寝て呉れないと吾々三人が寝られないから、其角然う喧しく云ひなさるな、へ、今に面白くないから、明日待たれる、其の資船、ア、何うも忠義な者だ、竹や、竹や……、鯉屋、オイ寝られんせ、然ういふと、寢室の中へ這入つてまで、云つて居ると、鯉屋の宗匠は非常に心配を致しました、その内に次第々々に夜も更けて参ります、そのまゝグウ、四名の者は遂に、了、ひました、する、と見ぬまして、其のまゝグウ、門前の方に、俄かに騒がしく、門の耳門をトノ、叩く者がございます、御門を這入つた所に、門番は臥して居りました、が、餘り濃しく叩かす、と、このから驚かして、門番何だ、全体今頃は何者である、○恐れながら、浪人者、大石を首と致して今晩亡君の御無念を晴さんかために、隣り屋敷の吉良上野様方へ亂入仕つりまして、本懐を達したいと思ひ、斯く推参仕りました、尤も火の用心を第一と在りまして、御隣家様に御迷惑は掛けません、尤も火の用心を第一と在りまして、御隣家様に御迷惑を警めしますることにはございます、若しや御助勢等を下し置かれまして

源 尚

ッと来つて、彼で居りました銀星、牡丹の兜頭巾を脱いで、片手を式臺に支へ頭を下げました。文嶺「ア、勇ましいところの扮装である、して其方は何と申す、余は本多孫三郎であるを、源香「ハ、ッ、お目通り、仰付けられ有難き仕合に存じ奉ります、私共は赤穂の浪人大高源吾助、右「富森助右衛門と申す者でござります、文嶺「ハ、ッ、して又討入の頭は何と申す者である、源香「同じ赤穂浪人にて、大石内蔵之助、長雄を頭と致しまして、吾々に至るまで、只今是れまで、詰め掛けましてございます、文嶺「ハ、ッ、して人数は何程である、源香「左様でございます、四十七名にございまして、裏表より詰めかけましてございます、何を云ふにも、瘦浪人の悲しさ、御隣家様より御助勢を下し置かれましては、甚だ迷惑を仕ります、火の用心は別して、氣を附けます、ことわざいいますから、何うか御助勢の儀は、差控への儀を願ひ奉ります、文嶺「ハ、ッ、心配いたすな、ア、誠にも内蔵頭には、好き家來をお持ちなされたことである、地下に於て、應お悦びであらう、必ず隣家の付合と目につて、決して助勢なごは致さぬから、心配いたすな、此方屋敷との境目の高堀の内方には、高張提灯に燈火を點け、其方共の働さ宜いや

大 高 源 吾

うに差出して取らせると、また一万一隣り屋敷より、卑怯にも當方屋敷へ廻りて来る、奴が、あつたなら、槍玉に揚げて呉れる、少しも心配に及ぶな、大高、富森の兩人は、非常に悦びました、是れ兩人のためには、誠に結構でございします、が、吉良様のためには、飛んでもない御隣家をお持ちなすつたものでございませう、丁度、是れは吉良の右隣りの屋敷になつて居ります、そこで左隣りは、天下のお旗本でございまして、土屋主税様と仰しやいます、この土屋主税様の方へも、同じく、大石の下知によつて、赤垣源藏、杉野十平次、の兩名が、大高同様、使ひに参りました、たることとございします、すると、其れとてもお呼び入れになりまして、人数などをお聞きに相成り、加勢どころではございませぬ、屋敷境から高張提灯を出して、赤穂浪人の働きよいやうにして遣らうといふやうな、全体何でまた、兩隣家に憎まれるかといふのに、本來吉良様のお屋敷は、殿治橋内にございしましたのです、それが、昨年殿中の願助につき、淺野家は、断絶となりました、が、吉良の方は、別段に然のみのお答めはなく、たゞ、本所松坂町へお屋敷替へとなつたのみでございします、よつて、漸う昨年此所へお移轉になり、した、本來こ

の吉良のお屋敷は其の以前本の一入近藤登之助殿のお屋敷でございまして、近藤家断絶の後永らく明屋敷になつて居りましたが、其れへ吉良様がお移りになりました。畢竟するお出で遊ばした時に、一寸二鏡五厘張込みまして、燐寸の一ダースも配つてあれば、兩隣家も此様に御立腹はないのでございませぬ、移轉して来た時に宿茶を配らないといふ腹立ちに……イヤませぬ、私共の移轉してはなし、左様な馬鹿なことをはとさいませぬが、忠義といふ二文字は得なものでございまして、茲に至つて文樹公にお目通りも濟んで、大高子葉は大きに悦び、富森助右衛門と共に「期限遅れては相成らじ、御免」といつて、今御門を出やうとする、この時玄關の次の室に寝て居りました、早稲町の其角は、明日待たるゝ其の寶船、竹やぐり行やの因縁も愈上茲だと、福種一枚若たなりで飛び出して参りまして、るれば廣庭に於て大高子葉と永訣を告げやうといふ一段に相成りまするが、一寸一息御免を願ひまして次回に。

第六回

さて又話頭は少し元へ廻りまして彼の大高源吾にございませぬが、何うか致して討入前に一應吉良の屋敷の様子を見届けたいと思ひました、早稲心付きました竹賣りの計らひも、遂に盡餅と相成り、たから、早稲心付きました竹賣りの計らひも、遂に盡餅と相成り、思ひがけなく茅場町の其角に面會をいたしましたのでございませぬ、とこゝろが其角も非常に天高子葉の困難といふ有様を見て、金子なり又羽織を悪んで還りました、その身は心は少し可笑しく思ひましたなれども、人の親切を無にするといふ譯にもなりません、上つて其の場は体裁よく別れを告げまして宅へ歸り、今日は非常に失敗をいたしました話を、熱中の者二三の人々にもいたして、漸う其の夜は何事もなかつた、臥せりましのたでございませぬ、さて明くれば十四日と相成りまして、法事の取越しと、高輪泉岳寺に於いて催すことにございませぬ、尤も之れを表向きといたして、その實は今宵討入り手配りの申し渡り、でございませぬ、上つて大高も期限達はず罷り出でまして、さぞ泉岳寺にて評定の儀にございませぬが、これは後して本文に又委しく伺ふこと、仕りまする、いよいよ滞りなく御法事を済まして、されば今

うち、四十有餘名の者は目立たぬ様に集まつて参つて、そこで銘々酒宴を催すといふことに相成りました。尤も此の楠屋に於ける勢揃へのお話は、これは細部安兵衛のお話を申上げる際に讀るといたしまして、ほんの此の夜一寸大高が益に一つの發句を殘しましたといふ、講談だけを挿擧せんと申し上げるのでございませうが、既に酒宴半ばに及んで、當家の家内は赤穂浪人の討入りといふことが相分りました。したのちは、さまざま心配もなく階下において其の調理万端をいたして居ります。ところが大高は二階を中座をいたしまして、階下の便所へ参りまして、用を済ましてそのまゝ二階へ上らうといひました。すると、亭主の源助は帳場の前に座りまして、初めは二階の連中との姿を見て驚かされたものゝ、赤穂浪人が仇討ちといふことが分つたので漸う安心をいたしました。二階から色々な物が下つて参りました。から、それを皆々取片付けに及んで居ります。ところが其の身は白紙を前に置いて筆を執りながら頻りに首を傾つて考へて居ります。源助ア、何うぞして何でも一つ佳い句を入れたいものである……なア平公、平公親方何です。源助いづも違つて今度の題は非常に難か

宵討入りの手配り又は合言葉、凡てのことを大石より申し渡しました。た、さて午後に至つて長雄は南部坂の後室様にお別れを告げ、又他の者に本日半日の猶餘がございませうから、そのうちに銘々親兄弟妻に別れを告げたることでもございませうが、源吾は國許に一人の母が殘してございます。よつて此の方へ今宵の討入りの次第、一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、

でござります、  
ので、で私も何うかア何でも名句を出したと思つてね、一生懸  
命となつて考へて居りますので、源吾「ハ、ア左様かな、何うも風流な  
ことで宜しいが、併し宗匠は何方であるな、源吾「ハ、ア、宗匠と申し  
ますと、源吾「そのお撰みなさるのには何方がお撰みなさるのだ、源助「それ  
は横町の何でござります、山形屋といふ呉服屋の御隠居さんでござい  
まして、源吾「お名前は何、源助「エ、名前は六右衛門さん、仰しやいます、  
源吾「宗匠に六右衛門といふ名前は無か、答だが、何と申します、源吾「ハ、ア、そ  
らう、源助「へ、エ、それは何でござります、茶坊町の寶井其角といふ  
宗匠のお弟子でござりまして、其邊さんと申します、源吾「ハ、ア、そ  
れで今度の題は何といふ題だ、源助「夫れが其の大變に六ヶ敷いので、  
さいまして、「何のその」といふ題でござります、何うも梅とか松と  
か或は櫻とかかね、雪だとか花だとか云ふのなら、それに基づいて遣  
りよいのです、何のそのといふ様な題でござります、併し是れでモッ本年は仕舞で  
ど其の意味が解らぬのでござります、併し是れでモッ本年は仕舞で  
ござります、此の十六日が締切りでござります、二十日が巻開

しいなア、平公「さうです、ね、親方、「何のその」といふ様な題は難題で  
すから、私も大きに自己の名前の通り開口いたします、源助「待てよ  
、「何のその」ア、六ヶ敷い、二、困るなア、何のその……」と頻りに大  
きな聲を出して考へて居ります、何分大高は當時有名の宗匠家にも  
肩を比べる位の人でござります、何分大高は是れが耳に留まりまして  
ハ、ア、さては亭主は頻りに發句に凝つて居るものと見ゆる、と斯様  
に考へましたから、ア、手と二階へ上りまして其の身の座に着いたし  
ます、と、ボ、手と二階へ上りまして其の身の座に着いたし  
井つて参りました、下女「あの何か呼びでござりますか、源吾「ア、御  
倒だが一才御亭主を呼んで貰ひたいものだ、下女「長まりました、と、御  
て階下へ降りました、暫時経つと源助は又茶代にでも有りつくと、  
であらうかと、懇張主義からヒ、エ、カ頭を下げて二階へ昇つて参  
りました、源助「エ、何か御用でござりますか、源吾「此處だ、私が呼ん  
だのだ、源助「へ、エ、且、那様何でござりますか、源吾「イヤ、他でもないが、  
今私が一寸階下へ降りたときに、お前は頻りに斯う考へ事をして居  
なすつたが、彼れは何か發句でも考へて居たのか、源助「へ、エ、左様居

大 高 源 吾

さになるのでござります、是れでマア博多の丁にひになるのですが、第一貴殿秀逸に抜けますとね、博多の丁が一筋です、それから大尾が江戸傘が一本、マア十軸に表付きの下駄が一足といふ様な勘定で、マア何でも一つ慾張つて居ます様ですが、秀逸の博多帯でも一つ貰ひたいといふ考へで遣つて居ります、源吾「それは何うも大したものですな、で何か佳い句が出ましたか、源助「頼と出ません、マア切めて十句だけけなりとも入れたいと思ふのでござりますが、矢張り私を見習ひましてね、宅の若い者或は出前持が同じ様に助けて呉れます、けれども、何うも是れといふ佳い句は浮みません、マア漸う出前持が一句遣りましたの、釜前の職人が一句やつたの、私が一句と三句だけけはマア出来たんですけれども、他は頼と出来ません、源吾「マア左様か、その三句は何ういふ句が出来ましたな、源助「それが、マア雜俳でしてね、何うもお話にならないんです、源吾「頼へ雜俳でも出来りやア結構だ、何ういふ句が出来ました、源助「へ、そこが妙なるの、です、ね、且、歌は氣に件れると云つてね、マア宅に居ました、出前持の野郎は、十五の歳に親に勘當を受けまして、此の江戸へ出

大 高 源 吾

掛けて参つて、漸う霞町の口入屋から宅へ奉公に遣入つた奴ですが、自己のさア氣に件れて遣るものですからね、妙なことを云ひましたよ、源吾「よ、何と云つた、源助「エ、何のその、です、源吾「それは題だ、分つて居る、源助「何のその親の異見も浮の空、といふんです、ね、源吾「い、それは何だ、源助「それがさア自身は親に勘當されました、親のことは、葦とも思はない、我りやア我れだけで縦令番麥屋の出前持をして居つても、一人前食ふだけのことは仕て行くといふ彼奴の考へで、そこで「何のその親の異見も浮の空、です、ね、大高源吾は呆れ却つて了、ひました、源吾「それでは雜俳にも何にもお話にならない、夫れぢやア發句にも何にもなつてやしないよ、源助「左様ですか、源吾「それと、他に何と云つたのだな、源助「今一人は宅の職人です、釜前を引受けて居ります、此奴ア又大層大酒漢ですが、矢張り自己の氣に件れて遣りませした、源吾「ハ、ア、それは何と遣つたんだ、源助「何のその朝飯前の酒一升、つてなもので、大高も失笑して了、ひました、源吾「ひさい、ことを何うも云ふ奴もあるもの、何だ、それは、源助「それがさア大酒家です、からね、なアに葦オ、朝飯前に酒一升は、お茶浸よりも心易いと



大 高 源 吾

いふ考へで、自身が好きだから遣つたのですね。大變な發句もあるものだと呆れて了ひました。源吾「そこでお前さんは何と遣つたんだら、源助「エ、私は又些と皮肉を遣つたのですが、何うたらうと思つて居りますので、抜けりやア抜けますが、抜けなけりやア撥ね飛ばされるんで源吾「それは當然さ、何ういふ句を遣りました。源助「一寸込入つて居りますすがね。」「何のその」です。源吾「それは分つて居る、次は源助「よい面の皮鯉の瀧瀬」といふのです。源吾「何だそれは、第一字餘りになつて居て、發句とも付かず狂歌とも付かず、何と思つて其様なことを云ひすなつたのだ。源助「家は宅の床の間に懸つてございます。掛軸を見ました、すると鯉の瀧瀬りの掛軸ですがね、私も一遍王子の瀧にも一寸打たれたことがあります。あれは細い様な瀧です。けれどもね、矢張り打たれるといふと肩が痛うございます、それを貴殿鯉といふ奴は随分面の皮の厚いもので、アウウウウ上から數十丈流れる瀧を、彼奴何とも思はず下から一生懸命から瀬つて行きますね、面の皮が痛くないか知らんと思ふのです、そこで題が「何のその」でせう、だから「何のその、よい面の皮鯉の瀧のぼり」

大 高 源 吾

と遣つたんです、これを聞くと大石は首め並み居る一同の方々も呆れ却つてお了ひなすつた、随分馴れた老爺もあるもの、大高は腹を拘へて笑ひました。源吾「失禮ながら御亭主、そんなことをお前で何百作へて入れたところか、逆も抜けさうな氣遣ひはない、私が一句書いて遣らう。源助「それは何うも且那有難うございます。早速階下へ飛び降りまして、紙と筆を持って参りました、やがて大高は「ア、と夫れへ認めて遣りました。源吾「アこれを入れて御覽、秀逸とは行くまいが、何れ抜けるに相違ない。源助「エ、一ちやア一寸拜見を願ひます……成るほど、ヘエ、六ヶ敷い字ですね。源吾「解つたか。源助「左様でございます、一解つた様で解らぬ様で源吾「何だか便りない男だね。お前は源助「これは巖といふ字です。ね。源吾「さうよ。源助「で何といふのです。源吾「何のその巖をも貫す桑の弓。源助「ヘエ、源吾「何うだ。解つたか。源助「さつぱり解りませんね。源吾「アそれが解らぬ様なれば全然これに解めて了ふが宜いな、若し此の句を宗匠から尋ねられたら、さきに私か撥搦んで話を仕て置いで上げてやう、これは「口津の語ではないよ。

だ、その姿が一す此方へ見わたるのだから、さては彼の様な大きな  
 虎が向ふに臥して居るが、此虎が我が親爺を食ひ殺したに違ひない  
 と斯う思つたところから、李將軍は其の桑の弓に矢を番へ、宛な  
 ら満月の如くに響き放つて、十分狙ひを定めて置いて、右の虎を目  
 懸けて切つて發したんだ源助「へエ」成るは喜んで親の仇を討  
 中つたのだな源助「へエ」源吾「そこで先づ李將軍は喜んで其の虎に  
 つたといふ積りで、虎の傍へ出て来て見ると、些ども虎が動か  
 源助「へエ」ト何ういふものです源吾「かう擲擲しちやア可けない  
 よ、黙つて聴きなさい源助「へエ」源吾「動かぬのも無理はない、何  
 故かといふと全くは虎でないの、虎の形になつたる大きな岩が其  
 處にあつたんだ源助「へエ」成るは喜んで源吾「その岩へ矢が貫立つて居た  
 んだ、これがア人間の一心だよ、最初から此處に岩があると  
 て、また其の岩を目懸けて矢を切つて發つ者もない、發つたところ  
 が貫ちさうなことは無からう、それが李將軍は何でもかでも我が親  
 の仇を討ちたいといふ一心から起つて切つて發したのだ「虎と見て  
 石に立つ矢の例あり」といふことが出てあるが、それは李將軍のこ

唐土の話で、唐土といふと唐だ源助「旦那元談ぢやアございせん、  
 そんなに云はないかて解つて居ります源吾「解つてるか、唐土に李將  
 軍といふ人があつたのだ源助「それは何でございます源吾「それ解らぬ  
 ぢやないか、李將軍と云つたら唐人だ、唐の人間だ源助「そんなに  
 目を押さないかて宜うございます、へエ」源吾「解りました、するど唐  
 土の李將軍といふ名ですな源吾「さうよ、その李將軍といふ人の親が  
 ね、或るときに山へ行つたんだが、それさう山から歸つて来ない、  
 源助「へエ」源吾「ところが此の山に非常に強い虎が栖息をして居て  
 時々には人を食ふといふので土地の者も噂をして居た、ところが李  
 將軍の親はアいと山へ行つたさう姿を見せないうのだから、さては  
 う、我が親も此の山に棲息をする猛虎のため生命を棄つたのであら  
 たんければならぬといふので、此の李將軍といふ人は中々活潑な氣  
 象の人だから、桑で拵へた弓矢を携へて、そこで此の山へ段々分  
 け入つて虎の巢窟を捜して居たんだ源助「成るは、解りました源吾「  
 するど或るとき通か向ふの小高い山際に一疋の大虎が寝て居つたの

代句なんかする奴があらますもので、私が直接に入れたのです。六右「  
 分、一、ちやア此の譯を知つてゐるか。源助「知れたことを仰しやい、自  
 分の餘んだ句を自分に分らぬ者がありませうか、こりやア日本のお  
 話ぢやアないんです、貴郎方にも云つて聴かすから、アア講學のた  
 めです。源助「こりやアね昔時唐土にねかういふと、源助は大層威張  
 り出した様ですが、唐土といつたら唐です、日本の國ぢやアないのだ。六右「オ  
 イ、馬鹿に仕なさるな、そんなことは誰れでも知つてゐる。源助「その  
 唐土に李將軍といふ毛唐人があつたんです、その者の親がね成ると  
 きに山へ行つて虎のために食ひ殺された、そこで其の李將軍は  
 非常に立腹をして、何でもかでも親の仇を打ちたいといふところか  
 ら、桑で作へた弓矢を携へ山へ出て捜して居ました、すると或ると  
 き一疋の大虎に出會つたんです、向ふの方に虎が晝寝をして居り  
 ました、とら何ういふ譯だぞ貴郎方は仰しやるでせうけれども……  
 六右「ア、要らぬ餘計なことを云ひつこなしで眞身のところをお話し  
 なさい。源助「するとね親の仇の虎が寝て居るものだから、桑の弓に矢

とを云つたのである、上つて人間といふものは一心さへ通ずるとさ  
 には必らず岩だでも矢が貫つてはいないか、而も桑の弓を用つてすら  
 然ういふことが出来たといふ、アア所謂物の道理を引いてあるのだ  
 それを其の取込んだのだね、題が「何のその」といふから「何の  
 その殿をも貫す桑の弓」だ、解つたか。源助「へー、成アるはと、ヤ  
 ヲ何うも解りました、大きに何うも旦那有難うさまでございます」  
 今大高の話して居るのを一坐の者は承はつて大いに感心いたしました  
 た、とところが蕎麥屋の亭主ですが、仇討ちが済んで、十六日の締切  
 まで之れを入れました、果せるかな此の句が秀逸の句に扱ました  
 のでございます、巻開きの當日は大勢の者が集まつて参つて聞いて  
 居りますと、秀逸は是れでございますから、皆の者は感心いたしました  
 た、楠屋源助大きに悦びまして「源助「ア占りた、乃公だ其の句は、  
 何うぞ博多の帯を一本願ひますぞ」宗匠を首り一同の者は驚きまし  
 た「六右「源助さんお前か之れを入れたのは源助さうでございます。六右「  
 元談ぢやないせ、矢も禮ながらお前に此様なことが云へば善はない  
 誰れかにお前代句を頼んだのだな。源助「元談いつちやア可けません、

度を仕ましたらう六右「ヤ、く、源助、そのときに大高源吾といふ人が  
 書いて呉れたんです六右「ヤ、この野郎人を馬鹿に仕やアがる、それ  
 は乃公の師匠にも當時肩を比べたといふ位の天晴れの宗匠家で、あ  
 の人は大高子業といふ人だ、飛んだ句を入れやアがる源助「何でも宜  
 しい、貨ふ物さへ貨つたら夫れで宜いのだ、大變なことを致したこ  
 とでございます、到頭「ア、景物を貰つたことでございます、併し  
 大高の認めたる彼の半紙へ書いてございますのを、後に之れを額と  
 いたしまして、それを自分の二階座敷に掛けまして、非常に源助は  
 秘蔵をいたして居りました、夜打をばと名前を  
 屋も夫れまでは手打蕎麥といつて居りましたが、夜打をばと名前を  
 改へまして、赤穂浪人が此宅で勢揃へを仕たといふところから、  
 屋源助の宅は其の後非常に繁昌をいたしましたといふ、これ所謂大  
 高の當家に一寸残したといふはんの一句に於いての講談でございま  
 す、さて其の夜子刻過ぎの頃はひに至つて、既に刻限となつたもの  
 でございますから、大石が下知をいたして、一同當家を出立ちまし  
 て、そこで本所松坂町の吉良公屋敷の、さて裏表と二手に分れたる

を満月の如くに、番へて射したんです、すると虎はヒツカリと立つた  
 のです、それから傍へ行つて見ると虎が居たんです、ヤッ違ふ、  
 虎ちやアない岩です、六右「何だ粗相つかしい源助「エ、實は岩なんです  
 貴郎方でも然うでせう、向ふに岩があると思つたら夫れへ矢を射か  
 ける馬鹿もありませう、また射たところが出来たこともあり  
 ませう、そこが其の間の一心得ですね、どうも妙なものですよ、  
 虎と見て石に立つ矢の例あり、といふのです、宗匠「そんなものです、  
 購買りではないんですよ、そこをその一寸私が振つたのです、何  
 のその巖をも貫す桑の弓、△「オヤ、く、源助「踊り出しやアがつたぞ、  
 六右「そりやア解つて居る、さういふとお前が腹から出た様にも思は  
 れるが、今度は何か其の句と尙だ他に入れたのか源助「他にも入れま  
 した、その他の「何のその宜い面の皮鯉の瀧のぼり、六右「それは  
 ッ「バリ無茶苦茶ぢやアないか、マア景物も上げる巻も上げるが、失  
 禮ながらお前には此様なことの云へさうなことはないから、本當の  
 ことを云つて下さい源助「ぢやア宗匠「その帯は下さるな、それを  
 つたら白状します、實はね私宅の浪人が討入りのときに交

ことでございまして、源吾は表門の大石の方へ加はつて居りました。されば前伺ひましたる如く今討入らうとするときに、本多公のお屋敷へ参つて之れを断つたのでございませう。そのとき思ひがけなくも本多の屋敷を出やうとしたとき、後方に辭あつて「あいや子葉子、子葉々々」と大聲を擧げて呼ぶ者がありませうから、振顧つて見ると是れ別人ならず茅場町の寶井其角でございまして、稲俣一枚のまゝ夫れへ飛ひ出して参りました。其角さて大高氏、誠に何うも昨日は途中に於いてお出會ひ申して、存外なるところの失禮を仕りました。貴子の御胸中を知らず、それがために飛んでもないところの失禮をいたしました。いたしました。「明日待たるゝ其の寶船」といふ其の意味が私に向解らないので、漸う夜分わが宅へ歸つて寢すに考へまして、何うやら斯うやら相解つたることと心得て、それで背のはせより當お屋敷にお達しなされる時節であらうと心得て、それでは貴子の誠忠のお心を來つて相待ち居りましたることをございませう。貴子の誠忠のお心を辨へず頼でもないとこのろの失禮を仕りましたが、平にお免しを願ひたい、兎も角も今生のお別れと心得まして、貴子へ一句進上いた

さうと思つて待つて居りましたこととございませう。いひながら其角は大音を張り擧げて其角「日の恩や忽ち碎く厚氷」かく一句を咏じました。このとき大高子葉は「これは茅場町の宗匠、誠に今の一句は何うも拙者有難く受納仕る、最早や今生にお目懸るも是れかぎり、又々冥土にお目懸ることもありませう。おさらばでござる」と其のまゝ立去らうと致しますから其角「あいや子葉子何うぞ何でも宜しいから一句願ひたい」大變な無理なことを云ふ坊主もあるもので、かゝる忙がしい折柄に斯様なことを申し出でるとは暢氣な方もあるものですな、併し相手は源吾子葉でございませう。から、少しも慮せず荒笑ひ源吾「おが尊と思へば輕し笠の上」かく口吟みまして源吾「おさらばでござる」とあつて行つて了ひました。その後これと彼の江戸歌によく作り込んで断りました。「おが物と思へば輕し笠の雪、妹許ゆけば冬の夜の……」といふ様なことを斷ふ様にになりましたが、あれは此の討入りの節の源吾の句を歌首に付けましたものなださうでございませう。それは扱置さ、吉良の屋敷へ斬り入りといふことと相成りました。すると兩隣邸からは早速高張提



大 高 源 吾

分この人の句は様々ありする中に、第一よく出来てございまして、いふのは、本懐を達しまして引揚げやうといはしめられたるときに、雨國向ふで一軒の居酒屋が何うやら新うやら店を開けましたばかりのところへ道入つて参りまして、皆々酒樽の鏡を打破つて酒を飲

大 高 源 吾

て了ひ、漸う先づ茅場町の其角を介抱いたすといふことに相成りまして、十四日と云つて居つたので、各々方へ定めて發狂でも仕したかと思ひなすつたであらうが、實は昨日新様々々斯ういふ次第と物語つたことにございまして、三名の者は大きに感心をいたしました

名前「は」と云つて尋ねましたから、そのときに源吾「私」は大高源吾「ある」と名乗りますと、亭主は早速半紙を一枚取れへ出して、亭主「何でも宜しうございますから、これへ一つお認めを願ひます、私の宅に記念のために残して置きたうございます」とある「よい心掛」と早速筆を執りまして此の半紙へ認めましたは「山をぬく力も折れて松の雪」といふ一句でございます、酒屋の亭主は大いに悦びまして、これをば遂に掛物といたしまして、自身か宅に秘蔵をいたして居りましたが、後にさるお大名より之れをお買上げに相成りまして、大高源吾「色々の風流を何時々々まで御語り傳へに相成りまして、大高源吾「色々の風流を何時々々まで御語り傳へに相成りまして、引續きまして四十七名のう、ちにおいて、生涯に三度の仇討ちをいたしましたといふ、世に有名なる細部安兵衛武庸の傳記に取掛りますることとございます、一す一息いたしまして申し上げます。

第七回

さて引續きまして細部安兵衛武庸のお話に取掛かる次第でございます、尤も四十七名の内で名前の世間に届きました仁と、さのみ届かない仁との損得といふものは餘程の相違でございまして、同じやうに事を謀つて本懐を達し、その後四家のお屋敷へお預けになつて、何れも切腹を仰付けられました當日に、潔く其の處分を受けました中にも、或ひは貝賀彌左衛門だとか、または木村岡右衛門などいふお名前になつて見ますと、讀者諸君の内でも一寸首を傾けてお考へになる方々もございまして、四十七名のうちに其様な名前の仁があつたであらうかと、斯うお疑ひになるお方もございしますが、賀でございますの、木村でございしますの、この仁々も矢張堀部と同じやうに誠忠無類の御仁に相違ないのでございします、だが名の得れると得れないとは餘程の相違でございまして、常々でも細部安兵衛といへば、彼れは赤穂の浪人といふことは大抵の御仁は御存じで居らつしやる、就中この仁はまづ此の世へ對して仇討に能く生れて来たやうな御仁でございまして、その身一代の間三度仇を討ちましたといふのは、餘程珍らしいこととございまして、其れがたり



八歳に教育といふものは少しも怠りなく遊ばしたので、最う十七  
 兩親の教育の宜いところから先づ家中で屈指の評判、謹厚いことは  
 廣大もございませす、少しも狼がましい舉動はなく致して、この御  
 仁二十五歳の春までといふものは、婦人の側へ立寄つたことがない  
 といふ、珍らしいところの氣象でございまして、飽くまでも「父母  
 在ます時は遠く遊ばず」といふ語を服膺し、常に父母の膝下に在つ  
 て篤くし、車へて居りました、二十三歳より役附を致しまして、溝  
 口家の御近習見習役といふのを仰付けられました、が、決して其の身  
 は一日も怠つたことはないといふ位の御仁で、同じ御近習見習役の  
 中でも、非番當番がありまして、その非番の折柄には、御強の若手の  
 輩でもありませすから、今日は何處其處へ行かう、明日は彼所へ出掛け  
 やうと云つて、詰り自分の御奉公の間に少しでも暇がありませんれば  
 忘ける方へ心を移します者が十中八九で、若い時は二度ないといふ  
 やうな者へで怠けるのが多ございませす、安太郎は決して其様なこ  
 とは微塵もございませせん、非番の折柄には屋敷に籠つて書物を繕ひ

隨分様々なる苦勞を致した御仁でございませす、既に九歳の砌り自分  
 の實父の仇を速かに討ちましたので、その後二十七歳の時に、吾が為  
 には眞の伯父に當ります者の仇を討ち、三十三歳にして相果てました  
 仇を討ち、その翌年三十四歳の砌り遂に切腹を致して相果てました  
 といふ、隨分珍らしい御仁でございませす、講談師によりまして此の  
 期部の傳を様々に伺ひまするが、併し伯龍は師傳で、師から教へら  
 れましたところの安兵衛一代の間のお話をば、少しも掛直なく今日  
 より委しく申上げますることには、仕ります、本來この安兵衛といへる  
 仁は本姓を中山と申しまして、何れの國にて出生を致したかと云ひ  
 ますと、越後國新發田の城主溝口伯耆守殿の御家中でござりまして  
 食祿五百石を頂戴いたしまして、中山安左衛門と申し、物頭役を勤  
 めましたるお方の孫に當る御仁でございませす、尤も此の中山安左衛  
 門といへるお仁は一人の伴がありまして、名前を安太郎と申しまし  
 た、御夫婦の仲に、一人の伴がありまして、名前を安太郎と申しまし  
 て、申すまでもなく、將來は中山の家名を相続いたさうといふ御仁で  
 ございませすから、御兩親も非常にお愛しみて、幼少の頃はひより

申すに、出掛けやうといふのだから、貴公も付合ひ給へ。安太、芝居を御存知ないか、芝居といふものは、役者が今日色々様々の藝道を演じて見物人を悦ばせるのだ。随分見ても爲に成りますね、勸善懲惡の早學問と謂つてね、見て居るうちに善惡といふものを演りますとね、一國一城の主君の身の行状が悪くなつて、或は妾などに感れるといふやうなことになる。其の主人を様々に悪い道に誘入れる、それから己れが都合によつたら其の家を横領仕やうと掛かるんだな、すると其の中にも亦忠義な者があつて、主君に之れを諫言を入れる。金言耳に逆らひ其薬口に苦しといふやうなことは、お手前も御存知であらう、何うも乃公の遊興の妨げをする不埒な奴だといつて手討にする、其の息子は浪人をする、それから一寸世話物になるんだな、様々の艱難辛苦をして、何うも私のお父さんの命を捨てたのは、彼奴が讒言を構へたからだ、奴を此のお家に置いといては益す國も亂れ、主君も

て、家の中に此のことが評判高く相成りまして、中山の御子息は堅物で、ある世の中に又彼の位の變入はあるまいといふ、評判でございまして、放蕩の御仁がありませうと、早速安左衛門殿はお出掛けになつて、必す梓安太郎を引合になし、吾が子を讃めるではないが、梓安太郎を見習ひなさい、といふやうに父が自慢に述べやうな次第でございませう、何うぞ致して、斯うなつて見ると家中の若手の輩は残念で堪りませぬ、何うぞ致して、吾れく、の黨派の中へ引入れて、奴を放蕩に仕込ん、遣りたいと、中にも同役の方々は色々考へて、心を傾けさせて、彼れを勝山さうと致しませぬ、決して左様な方へは心を傾けさせ、ん、皆々、面白半分、中山に感ひまするといふやうな次第で、○オ、イ、中山氏、今日、貴殿、非番でありませぬ、何處かへお出掛けになつては如何でありませぬ、安太、左衛門、拙者は屋敷に少々用事がありませぬか、へ、皆同役の者は行かうといつて相談が纏まつたんだ、何うでせう、この節、新發田の城下に大變面白いて相談がありませぬ、そこで芝居見物な

しました安太、ハ、左様か、何うも是れは稀代なことを承はりま  
 したな、するど何ですか、芝居を見て學問の足しになさるか、私  
 などは餘り好みませぬ、君達のやうに然う云つて居られると至  
 極面白いやうですが、私などは決して然うは思はぬ、今日役者とい  
 ふ者は何です、男子たるべき身を以て顔に紅粉を飾ひ、婦女子の真  
 似を致して、おれを獲性男子といふその上、今日婦人を捉へて淫がま  
 しい道に引入れたら、中には甚だしい所に至つては、他人の細君で  
 あらうが何であらうか、己れが媚び諂ひ受教を賣つて、其の者を取入  
 れる、俗に之れを男地獄と稱へる、何うも怪しからぬことを致すと  
 いふやうな噂も聞いて居る、左様な物を見て拙者は少しも學問の足  
 しには仕合せせん、ア然ういふ物を見る暇がありませんれば、屋敷  
 に在つて書物を眺めまして、昔時より古人が遺し置かれましたる、  
 結構な學問といふものがありませんから、其れを一心に學ぼうと心得  
 ます、○ア、左様か、そりやアア貴殿のやうに云つたら、誰れも  
 芝居を見に行く者はない、安太、それで見に行かぬといふではないか、  
 ○左様か、同役何うも困るぢやアないか、此様なまた變人はない

放蕩を盡して、終には主家傾といふやうな非望を企てる奴だ、何  
 うぞして之れを攀ちたいといつて、色々々苦心をして、ア、の詰りに  
 なつて、その悪人は進退ならぬやうになつて、悪事の証據物件が積  
 められて来て、遂にはその者は亡びる、主君は改心をする、善人の  
 伴はお取立てになつて大層立身出世をするといふ筋で、初めは悪人  
 が憂つて来て、善人は種々に苦心の後榮へるといふやうな形で、ま  
 た仇討物でも、親を攀たれて種々様々に苦心の上は苦心をして、な  
 は其の兄弟とか、或は縁者の者が反撃に遭ふ、誰れが全体この處置を  
 付けて、首尾よう仇を討つであらうと、見物人はハア、思つて居  
 るうちに、思ひがけない所から其の柔弱な腕前の者が強うなつたり  
 また神の御利益で力量を授かつたり何かするまたは立派な助太刀の  
 者が出来て、親の仇を討つて主家へ歸參が叶ふ、ア、目出たい、  
 といふのが打出し、よつて騒動の起るのは其の混雑して居る初めか  
 ら二幕三幕目までにあつて、それから後はオナ、纏まりが付くのか  
 だ、よつて之れを勸善懲惡の早學問といふやうな度で、随分其れア  
 面白もんだ、安太、是れを聞いて居りましたが、コ、コ、笑ひ出

ないことを云ひ給ふ、荷も今日武士たるべき者が、落話何かといふ  
 ものを何の効能あつて聞きませるか、詰らぬことを云へ、  
 てるが、拙者は其様な落話などは大嫌ひだ、○然う君のやうに怒ら  
 ないでも宜いではないか、ちやア講釋を聞きに行かう、ね、講釋は  
 何うだ、安太「左様さね、講釋は是れア宜しいね、中にも伯龍の講釋  
 なもので、第一卑しくない、僕に至つて好きだ、中には直打がありま  
 るからと、斯う云つて呉れると、講談師の業体も少しは直打がありま  
 すけれど、な、昔時のやうな御記録を讀むのと違つて、今の講釋師  
 講釋とは何だ、昔時のやうな御記録を讀むのと違つて、今の講釋師  
 は柄が悪くなつて、高座へ上つて鏡舌を出し、自の法螺を吹いて客を  
 瞞着し、其様なものは武士たる者が聞くべきものではない、彼の川  
 柳點にもあるではないか、「講釋師見て来たやうな虚言を吐き、實に  
 馬鹿々々しいものだ、斯う云はれると講談共は三文の直打もござい  
 ません、何しる中山安太郎の口には悪かつては堪りませぬ、随分斯う

ね、強いに強いと云ふところの力士が来て、相撲は何うですな、この節江戸から  
 大變に強いと云ふことである、相撲は随分男子たるべきものが見ても宜しい  
 活潑なものですから、ね、相撲に任せうか、安太「左様さな、相撲は  
 強いの者が勝つて弱いの者が負けると思ひませぬ、○然う云つたら誰れも  
 左様なものには拙者は見やうとは思ひませぬ、○然う云つたら誰れも  
 見に行く者は手もあるから、ね、また弱い奴にコロと強いの者が負ける  
 といふ面白くない、手もあるから、ね、それがために彼等は大名の玩弄物  
 になつて、皆夫れ、お抱へになつて、随分勇ましいものでありま  
 す、行らつしやらぬか、安太「厭でござる、拙者は其様なものは見たく  
 はない、○仕様がな、然う云はれると、淨瑠璃は何うだ、義太夫  
 面白くない、其れア、安太「左様ですな、淨瑠璃などいふものは口合衆  
 みたることを三味線に合はせて、拙者は行つたことはないが、即  
 て居る者を泣かせたり何かするといふ、そのやうな陰氣なものは大  
 嫌ひだ、○オイ、是れも可かぬか、ちやア落話は何うぢや、落話  
 は是れア泣かせる方ぢやアない笑はせる方だ、安太「お手前達は仕様の

んだかね、之れを聞くに安太郎は目を圓くして大きに驚きました。  
 安太「これは各々方には怪しからぬことを仰しやる、何と思つて左様  
 なことを云はるゝ、今日武士たるべき者を千日養つて置くのは、僅  
 か一刻の用に立てんがためではないか、主君よ、恩縁を頂いてこの  
 身体を養ひ居る上は、スワ戦場といふ時には主君の御馬前に罷り出  
 で、第一その御奉公のため一命を捨てんければならない、身殿送  
 は大切なる身体ではないか、その大切なる身体を以て遊女遊女に心  
 を配るとは何たる痴事でありませう、況して遊女何かといふものは梅  
 毒氣のあるもので、若しや然らぬ所へ參つて、吾が身体に梅毒な  
 るが傳染つたら、何の身体を以て主君に御奉公を仕やうと思ひ給ふ  
 拙者は左様なことは大嫌ひだ、○左様か、定めて然らぬやう  
 と思つたんだ、何と御一同、中山氏だけは不賛成だよ、●仕方  
 がないね、おやア明日から中山氏には物を云はぬ、付合をせぬ仁  
 だ、あの仁は友人の付合といふことを知らない仁だ、何しる茲に新  
 うやつて八人居るが、中で六人までが行かうといふやうなるもの  
 心には進まぬとは心得ても、アア謂は、多數付きといふやうなるもの

いふ氣象の男ですから、誰れが何と云はうが、決して其の付合を仕  
 やうの、物見遊山に出掛けるといふやうなことを好まぬ賢でござい  
 ます、何日も同役の方々は誘れ出さうとして、何でも後でも中山を一つ  
 こで五六名が今日しも相談を致しませう、何でも後でも中山を一つ  
 遊女場所へ誘出さうといふので、皆々相談が調ひました、が待ち構へ  
 て居りますと、安太郎は役を勤め了りまして下城いたしました、待ち構へ  
 す、○オイ中山、中山君、一寸待ち給へ、安太「イ、各々方は未だ  
 お引取りなさらぬのか、○是れから皆引取らうと思つて、お手前の  
 來るのを待つて居るんだ、アア何うだ、今晩付合ふか付合はぬか、  
 いよ、貴殿が例のごとく詰らぬ理屈を並べ立つて付合をせぬと仰  
 しやれば、最う吾々一同申し合せて、明日から詰所へ參つても口を  
 利かぬぞ、安太「ヘ、大層な勢だなア、何を付合へといふのだ、○  
 他でもないが明日は非番だらう、安太「左様、○然うすればアア身体も  
 後容業が出来来る、そこで吾々一同氣を揃へて、今晩夕景から遊女場  
 所へ趣かうといふのだ、あの新發田の城下の遊廊へ行つて見たまへ  
 隨分美しい遊女が居る、昔の者が氣を揃へて女購買に行かうといふ

大 高 源 吾

合で、其所が明友の付合だから宜しいといつて出掛けるのが、所謂付  
 合ではないか、それを手前一人が然ういつて不賛成なれば、最う  
 口は利かないから然う思つて呉れ給へ、貴殿は梅毒が傳染る  
 仰しやるが、梅毒の傳染るのは万人に一人だ、安太何だと、万人に  
 人□左様、安太その万人の中の一人に當つたら何うなる。□勝手  
 に仕たまへ、然ういふ貴殿のやうな變人には以來は交際せぬ、安太  
 然う各々方のやうに怒つて呉れては甚だ困る、何も身共が遊女場所  
 へ行かないと云つたからと云つて、詰所で口を利かぬとは酷いでは  
 ないか、□それなら付合ひたまへ、付合ひさへすれば宜いではない  
 か、流石の安太郎も非常に困りました、安太、それでは何うか暫らくお  
 待ち下さい、拙者これから一應屋敷へ歸つてお父上に相談を致し、  
 父が行けと申しますれば参りませう、父の許さぬことを何うも私が  
 勝手に出掛けるといふことは出来ませぬから、□へー、面白いな  
 ゝ、成程堅物だけあつて女郎買をお父上に相談をする、ぢやアア  
 行つて話して御覽、それで若し父上が御承知なれば、小林氏の許へ  
 皆んな集まつて待つて居るから、乾度其れへ来た下さい、そこで城

大 高 源 吾

外で別れを告げまして、安太郎は漸くのことと迷惑ながら屋敷へ歸  
 つて参りました、根が正直無類な方でございますから、父安左衛  
 門の前へ罷り出で兩手を支へまして、安太、さてお父上、今日のお役目  
 は首尾能う勤め終せましたか、明日は非番でございます、それに付  
 きまして他の者が新様々々新様に申します、私は甚だ心得違ひなこ  
 とを云ふものど心得、段々異見を致しましたか、皆が氣を揃へて行  
 かうといふのに、貴殿一人が付谷を仕なければ、明日から詰所へ参  
 つても口を利かぬ、と新様に申します、さて口を利かぬといふこ  
 とになるも拙者甚だ迷惑を仕ります、何も詰所で他の者が口を利か  
 んでも構はぬ、アアと勤めて居れと仰しやれば其れまでのことと  
 さいます、其れではお役が勤まらぬとも心得ますし、一應お父  
 上に御相談を申した其の上で返答を仕やう云つて歸つて参りました  
 が、何うしたものでございませうか、と眞面目になつてこの事を相  
 談をかけますと、困つてお了ひなすつたのは山中安左衛門殿でござ  
 います、安左、家内は其方にお在でか、家内、ハイ、安左一寸お出で、  
 家内、貴方、何か御用で、安左、安太郎が新様々々に申して私に相談を

するのだが、私の口から其様なことが云へるものか、汝何うか彼方へ伴れて行つて宜いやうに取計ふて呉れますやう、之れを聞いて與方は大さにお笑ひになり、奥方「サ、此方へお出で、……何を汝詰らぬことを阿父さんに申上げるんだ、安太「けれども貴方、お父上に御相談を仕ませんければ分らぬではございませぬか、奥方「それは日頃から汝が餘り堅苦しいによつて、同役の方々が困らせやうといふので、其のやうなことを仰しやつのであらう、何も汝は其のやうな場所へ行かざれば宜いから、今晚だけのことだから皆様に付合ひをしてお出で、然してまた後は身を慎みさへすれば夫れで宜しい、何うせ然う此の紙入にお金子を二十兩入れて置きませした、それで若物は是れ、持は是れ、羽織は之れを若てお出で、若しこの金子で足りないやうなこともなら、羽織かに使ひを立つて妾の許へお寄越し、然うすれば何時でも足りないといふところは妾が送つて上げる、安太「左様でございませぬか、おやア母人、何うあつても行かねばなりませんか、何うも困つたん

とでございませぬ、不精々々ながら衣類を着換へ始めました、伯龍も此様な母親が一人欲しいのでございませぬ、伯龍共のお母は甚い相違なもので、たゞへば席から歸つて参りました、今晩は友人の付合いでございませうか、この野郎何を吐しやアがる、宅に妻子を引抱へ米喰ふ蟲が澤山居るに、ようア其様な野方途なことが云へたものだ、と引叱られます、なかく、財布へ錢を入れて呉れるところの騒ぎではございませぬ、着て居る羽織を脱がせるといふやうな形で、何うも中山安太郎の阿母は斯ういふ氣質でございまして、加之に二十兩といふ金子を入れて遣つて、足らなければ何時でも母の許へ取りに寄越せといふやうな、臨分粹な母親もあるものでございませぬ、やがて衣類を着替へまして、安太郎は「ノ、同役小林某の許へ遣つて参りました、他の者は宵から是れへ集まつて、最う大抵何と云つて来るのであらうと首を長うして待つて居りました、○「オヤッ中山來たな、それこそ何うも吾々の天晴朋友といふて耻かしくはない、お父上は御承知か、安太「左様、私は大体左様なことは好まないのであり

大 高 源 吾

ますけれども、皆様方にお付合とあれば是非に及ばぬ行つてお出で  
と斯ういふママ母上の仰せ、そこで二十兩持参いたした、若し是れ  
で足りませんやうな事なら、母の許へ手紙でも出しますれば何時  
でも送つて呉れます等でございます。○此奴ア有難い、オイ御一同  
今夜は中山氏の番りだ、ママ其れだけあれば今夜の入費は澤山だ  
早々八九名は出掛けるといふことに相成りました、さて新發田の遊  
廓へ乗込んで参りますと、他の者は是れまでチロイ、参つて居  
りますから馴染先がございます、やがて其所へ遣つて参りました、  
「何うぞお通り」といふので、さしも何れの土地でも斯様な渡世を  
して居ります所は、「粗で庭掃く」といふ鄭重なる扱ひ、お世辭の  
八百も云ひならべて、直様二階へ通しました、早々ア藝者の五六  
名も集り、追々馳走も其れへ出まして、次第に酒の酔が廻るに臨ひ  
何れも家中の若武士の輩、持前の隠し藝などを遣り始めました、或  
は踊るのもあれば唄ふもあり、井鉢の縁を叩き始めるといふ、その  
中に安太郎一人は羽織も脱らず、チャンと袴の上には手を載せまして  
苦がり返つて四邊の様子を見て居りました、酒はこの世の狂ひ水と

大 高 源 吾

はア、ア能く云つたものだ、あの小林の態は何だ、手拭を取つて向  
ふ顔巻、頬邊に手を當てがつて可怪しな聲を出して、彼様なことが  
主君の前で出来るが、馬鹿々々しいことを致して悦んで居る」と苦  
り返つて睨み付けて居りますと、木村「オイ、オイ中山、オイ安太郎何  
だ、木村何故お手前は其様に睨んで居る、今晚のやうな此様な愉快な  
ことにはないぢやアないか、今晚は皆んなが持前への藝廻しで、何う  
も井上の淨瑠璃の調など来ては堪つたものぢやない、また小泉の  
踊るところの手振といふものは付い腰付だなア、僕が先程から都々  
一を遣つて居るが、お手前の耳へは何と這入つた、誰れしも此の通  
り持前の隠し藝といふものがある、それを貴殿一人が然う膝に手を  
置いて睨んで居られると、追々これから十八番を出すことが出来な  
い、よつて貴殿も何か遣り給へ、武藝の外に何か隠し藝といふもの  
があるであらう、何でも宜いから遣り給へ安太郎馬鹿なことを云ひ給  
へ、拙者は斯様な席へは初めてだ、左様なことは存せぬ、木村「ナ、知  
らぬといふ奴があるものか、是非遣り給へ、遣らんか、遣らんとい  
はるれば吾々は最う付合はせぬ。○然うく、中山、遣つて呉るれば





入をして居るのか、眞圓に寝て居るのかといふ様子を見て居ります。川柳にもある通り「客の狸を狐が起す」といふやうな体でございませう。吾々なれば然うでございませう。堅苦しいことは一通りならぬ。お方でございませうから、ヤツと其の座敷の眞中に座つて八方を眺んで居ります。と、どころが今宵は中山が初會でありますから、成るだけ手取りの女郎を充行ふが宜からうといふので、同役の者から注意を致しましたものを見、頃合の女郎が従容に其所へ遣つて参りました。た、ヒョッと唐紙を開いて見ると、ヒョッと行儀正しく座つて此方を眺んで居りますから、遣入つて参つた女郎は大變に体裁が悪うございませう。女郎「オヤ貴方、未だお寝みではないのでございませうか、何か若物をお召替へ遊ばして、其れにお腰衣がありませうから、お替へ遊ばして下さいますやう、お召物は妾が襲んで置きます」と。へ奇らんと致しませうと、グツと腕り付けまして「安太「こりや必ず側へ寄るな、何うも薄汚い奴だ、遊女賣女といふものは梅毒の傳染女易いものといふことを聞いて居る、目通り叶はぬ退れ」大變な女

さながら、グツグツと研を掻いて狸寝入といふものを遣つて居ります。すると廊下をバツグツと上草履の音が致します、その音がすると何となく胸がドクドクいたしまして、そりやお出でな、遂に其の部屋の前を通り越して他室へ行つて了ふ、オヤ、是れは乃公の合婚ではなかつたかと思つて待つて居りますと、また足音が致します、また通り越して了ふ、然うなるも段々目が覺りてなりませぬ、先刻から天井板を勘定をして見たが、何遍讀んでも十八枚しかない、大變に遅いではないかと思つて居ると、また足音がする、行いて了ふ、眞圓に「ア今晚は間拍子の悪い、大分奴は廻しを取つて居やアがると思はる、来やアがつたら斯ういつて彼ア云つて、其の胸算用を致して居やうといふ、その間が何とも云へない心持が致しまするもので、どころが何うやら斯うやら取合の唐紙が開きますると、態と見向きもせずグツグツと狸寝入りをして居ります、直に床の中へ遣入つて呉れることもあらずか、裾裾を取つて衣箱に懸けまして、それから枕元に平座り込んで、尻から煙の出るはど煙草を喫み続け、この客は狸

けを勤めるのでございませぬ、安太成程、それなれば少しも梅毒氣はあ  
 るまい、一寸位は談話を致しても宜からう、汝は全体名前は何とい  
 います、安太、歳は幾つだ、小三十八歳でございませぬ、宗旨は代々真言宗  
 ……安太、控へるッ、乃公は人別調へではないぞ、大變に難しいか客  
 もあるもので、安太、何うも汝は十八歳で京都の生れの者と聞くが、生  
 れ故郷を去つて斯様な所へ参り、藝者などを稼いで居るとは不埒な  
 奴だ、何うせ親の許さぬ不義淫奔を致して、それで斯ういふ所へ参  
 つたのであらう、小三、旦那、御元談ぢやアございませぬ、新様な渡世  
 をして居りますから然う思召すでもございませぬ、決して其様な  
 穢氣淫氣で此のやうなことをして居るのではございませぬ、安太、ハ、  
 ウ、然うするど何うしたのだ、小三、妾は元京都の者でございまして、  
 妾の所父は悉皆屋でございまして、此地へ商ひに参つて居ります  
 うち、一昨年でございまして、大變に思ひました、それで阿母さん  
 と二人が京都の住居を取片附けて熊々この國へ來まして、色々様々  
 と介抱を致しました、遂に其の効驗なく到頭死去いたしました、

那買のお客もあるものでございませぬ、餘りのことに呆れ返つて還々  
 の休で女郎は出て行つて了ひました、安太、郎はホッど一息を致して  
 「何うやら斯うやら厄介者を追拂つた、ア一世の中に何が辛いとい  
 つても女郎買はと辛いものはない、また夜中何んな者が乗込んで來  
 るかも知れない」とます、八方に眼を配つて居ります、暫らくす  
 ると又一一人女が違つて参りました、取合の府紙を開けまして、女  
 方、何ぞ其様な詰らぬことを仰しや、いたしました、到頭合娼の花魁を去  
 してお了ひなすつたではありませぬか、安太、また來やアがつたな、遊  
 女買女といふものは梅毒が傳染るといふことを聞いて居る……女  
 元談ぢやアございませぬ、上旦那、妾は決して女郎ではございませぬ  
 アノ藝者なんぞでございませぬ、安太、ハ、ウ、藝者、藝者といふと何か、女  
 お客様のお座敷で御酒のお酌を致したり、三味線を弾きまして御機  
 嫌を取りますする者でございませぬ、安太、ハ、ウ、成程、然ういへば汝は見  
 覺わがある、先刻井上の側に座つて三味線を弾いて居た女だ、女  
 左様でございませぬ、安太、それなれば毎夜々々多くのお客を取つて三筋  
 を以て被世をいたすのだな、女郎、左様でございませぬ、はんのお座敷だ

大 高 源 吾

族先ではとさいますし、借財が澤山ありましたところから、  
 「茲は身を助けるほどの不幸」で、幼少の頃はひより習つて置きま  
 した三筋の糸を今は渡世の種と致して、是れで貴方一人の母を養つ  
 て居ります、母は當時眼病を患ひまして、今では眼界が見ないや  
 うになつて居ります、阿母さんを養ふために斯ういふ渡世をして居り  
 ますので、安太「よ、い、母を養ふために醫者を致して居るといふのか  
 ？」何うも其れは見上げたものぢや、なか、感心ぢや、然うして  
 母には孝行をするが宜いぞ、其方のやうな親孝行といふことを聞く  
 と、身共も亦この後、最負に致して遣らうと心得る、ア、汝を呼ばう  
 と思ふと、斯ういふ遊女屋へ参らねばならぬか、小三「何う致しまして  
 それなら何も貴方當家へお出でになるには及びません、この邊に嬉  
 し野といふ料亭がとさいます、其れから此の裏の小三に報して呉れ  
 いと仰しやつたら、直に妾は上りますのでとさいます、安太「然うか、そ  
 れなら然う仕やう、この後最負にして遣らう」云ひながら懐中から  
 些かの金子を取り出して紙に包み、安太「是れを其方に取らせる、小三「何う  
 も有難うとさいます、安太「何か母の口に適ふ物を買つて遣れ、然うし

大 高 源 吾

第 八 回

て取用事はない、長居を致して居ると、深夜にも及んで居る、男  
 女七歳にして席を同じうせずといふ言葉もある、若し不義者など、  
 云はれる時は此方は迷惑、直に起つて、大變難しい人間もあるもの  
 でとさいます、小三は其れなり起つて行きましたが、中山は其の夜  
 は少しも寝ません、其のうち、夜が明け渡りますと、道々の休で昔  
 の者に先立つて逃げ歸りました、我ら何が幸いといつても女郎買は  
 ぞ、幸いものはないと、懲り、致して丁ひました、其様なら其れな  
 りで行かないかといふと、何うも此の位物堅い中山安太郎でとさい  
 ました、小三の親孝行といふ、僅た孝行の二文字に感心をして、  
 その後この仁が打つて變はつて柔かくなり、その身を過り、遂には  
 小三と駈落ちに及ぶといふお話に引移りますが、一寸一息入れまし  
 て次回に。

が、世の中、何に何が幸いといつても此の様な幸いことは生涯になかつ  
 ても、中山安太郎は夜の明けを待つて這々の体で逃げ歸りました





それで、ア新うして度々、斯様な場所へ参るやうな次第だが、随分眼  
 を大事になさるがよい。母有難うございませす。お茶の一杯も喫んで  
 眠りますかといふ、それからといふものは別に料亭では會ひません、  
 暇がありませるといふ、小三の家形へ來まして、遂には酒の一口も飲み始  
 めるといふやうな形でございます。我ら中山は堅い、といつて  
 も、この仁どても決して木の間から生れて來たといふ人間ではござ  
 いませす、遠くても近いのは男女の間、何時しか互に親切を盡し合つた  
 ところから、遂には情を通じるといふやうなことに相成つて、後  
 はチロイ、小三の許に寝泊りをするといふやうなことになつて参  
 りまして、そのうちに此の者の母は老病とでも云ふのでございませ  
 うか、非常に悪くなりまして、安太郎は入費萬端の手當を致して遣  
 りまして、手の届くだけ介抱をして遣つたのでございませす、何う  
 も壽命といふものは是非のないもので、遂に養生叶はず死にたし  
 ました、葬式萬端のところは萬事安太郎が其れ、指圖を致して立  
 派に致して遣りました、然うなる最う其の後には小三も中山の親切  
 を非常に悦びまして、別に花には出ませす、安太郎の來る度毎に其

誠に大切に事へるといふやうなことで、二十五歳の年までは女の肌  
 を御存知ないといふ至極の堅物でございませす、それが一遍に柔  
 くなつて了ひました、後には二日も三日も小三の許に流連をなすつ  
 て、お屋敷の方へは一向お歸りがなないといふやうな次第でございま  
 す、中山安左衛門殿も殆ど呆れてお了ひなすつた、家内を手許へお  
 招きになりまして、安左衛門は堅物ぢや、と云つて平生から自慢を致  
 して居つたが、なかく堅いと思はれてはなない、一遍に柔かくなつて了  
 つた、困るではないか、何うぞ、汝も異見をさつしや、それも通常  
 の若者のやうに偶に女郎買ひに出掛けるのとは違つて、密かに聴い  
 て見れば、生意氣にも商者買ひをするといふことをである、實以て不埒  
 の至りである、豫て長澤の氣を彼れが妻に申受ける約束がいたして  
 ある、若し先方へ斯様なことが聞ゆる時には大きに不都合なことで  
 ある、汝も異見をして止めて呉れねばならぬ、と大いに御立腹でござ  
 います、それゆゑ御家内も非常に心配をして在らつしやいませす、  
 偶に密つと歸つて参りますと、其奴を捉まへて懇々と御異見でござ  
 います、安太郎は別段馬鹿ではございませんから、成程是れは不都合

大 高 源 吾

合なこども思ひまして安太實にお父上、私も思はぬ場所へ足を踏入れまして、御両親に御心配を懸けまして如何とも申請がございませぬ、實小三といへる者は不憫な者でございまして、元京都の生れの者でございまして、一人の眼界の叶はぬ母を養つて居りました、それ等のことを思ひ彼れを寵愛いたして遣りましたが、併し、ア仰せに随ひ歸めることに致したところで、彼れを京都へ還して遣るとかまた何れへなりとも身の處置を付けて遣らんければなりませんから何うぞ恐れ入りましたか金子を少々頂戴いたしたう存じます、其れを以て持廻に縁を切つて参りますから、そこで安左衛門殿も道理のことと思召し、お手許から五十兩といふ金子を出してお遣り遣はした、すると奥方より内證にまた三十兩、合つして八十兩の金子を持ちました、能々小三の家形へ遣つて参りました安太さて小三、私は最う汝の許へ来ることも出来なくなつた小三、オヤ貴方、何うか遊ばしたのでございませるか安太實はお父上や母人が非常に喧ましく仰しやつて、殊に私には家内を充てがはんければならぬといふので、家中の某から近々に貸ふ筈に相成つて居る、先方へ其の様なことが聞は

大 高 源 吾

てはならぬといふので、非常に御異見をなさる、生涯汝を妻として屋敷に置けるやうなこともなら都合が宜いけれども、然ういふ譯にも行かぬ、よつて最う汝とは縁を切つて、何とか安の身の處置を付けて遣らうと思つて来たんが、それに付いてお父上より五十兩、母上より三十兩、合せて八十兩金子を持つて参つた、之れを汝に上げらから、之れを路用として京都へ歸らうとも、また當所に於て何れへか縁付かうとも、其方の勝手にするが宜い、兎も角も今日限り縁を切つて貸ひたい、云ひながら金子を其れへ差出しました、すると女は非常に悦びまして「オヤ、ア然うでございませるか、此様に金子を頂きました、それでは此のお金子を以て妾は身の處置を付けます」といつて悦んで取るやうなれば安太郎はこの後苦勞は致しませんが、せんのであります、縁といふものは異なるものでございまして、互に是れは双方氣意合つたものでございませるか決して小三は金子を見向きも致しませぬ、兩眼に一杯涙を湛めまして、暫しは差俯向いて考へて居りましたが、小三御道理の仰せでございませぬ、決して貴方を御無理とは思ひませぬ、素より卑しき妾風情をお屋敷に置いて頂く



といふことはなすまい、一また然うやつて貴方も結構な御縁談が  
 定まつてございますと、一坊げましては甚だ相済みません、だ  
 が此のお金子を頂きましたところ、何うも仕方がございせんから  
 お持ち歸りを願ひます、決して貴方が奥様をお迎へ遊ばすのに妾は  
 苦情はございせん、安太「それでは何か、金子は要らぬといふのか、  
 して汝は何うする積りだ、小三「左様でございます、貴方にお別れ申し  
 て何の妾は此の世に乗り込みがございませう、一よつて妾は母の跡を  
 ひまして冥途とやらへ参る者へでございませう、死ねるこの身は厭ひ  
 ませんが、まだ貴方にはお話しも致しません、一寸貴方これに御  
 覽なさいませう、三月四月は袖でも纏す、早や五月の縁帯、最  
 ナ「帯はして居るではないか、小三「イエ、其様な帯ではございません、  
 コレ御覽なさいませ、この通りお腹が大さうございませう、安太「何か喰  
 ひ過ぎたのか、小三「御元談仰しやつちやア可けません、貴方のお腹を  
 身に宿しましてございませう、左「孕みは男の子といふことを聞いて居  
 ります、死ねるこの身は更々厭ひませんが、腹の中のこの子をば

暗から暗へ還るのが、それが悲しうございませう、安太「エ、ッ……」泣  
 石の安太「斯も之れを聞いて驚いて了ひました、安太「これは飛んでもな  
 いことになつて了つたな、何うぞ致してそれを凹下ます工夫はない  
 か、小三「其様な貴方御元談仰しやつちやア困るぢやありませんか、安太「  
 元談ぢやアない、此方は大きに迷惑をする、何うも汝が然うして風  
 まで宿したとして見れば、此のまゝ縁を切つて他から妾を迎へると  
 いふ譯にもならん、ハ「困つたことだな、何か良い工夫はないか、  
 小三「それなれば、何も貴方妾のやうな不來な者を夫れはとまで思  
 召して下さいますれば、これまで貴方に頂きましたお金子も少くは  
 貯へてもあり、またこの家の諸道具萬端を賣りますれば相當にお金  
 子も出来ず、その金子を隠めまして、この國ばかりに暮さんでも  
 他國へ乗込んで参りまして、貴方と妾とが生涯夫婦になつて暮しま  
 したら、其れに越したる楽しみはございません、安太「成程、それぢや  
 ア然う仕やう、何うも孕んだとあれば致し方がない、詰りお父上や  
 母人に對しては濟まないことであるが、何れも乃公が居ないからと云  
 つて、他から来た誰れが御養子でもなすつたら、中山家の相続の出

と止りしところより、その名を後世に遺しました位、仁には紀の國那智の灘に打たれて、中山安太郎は是れまで親孝行といはれたる物堅い事興るといへど、漸うのことに善光寺の方へ違つて参りました。人物をとさいました、漸うのことに善光寺の方へ違つて参りました。發田を後になして、漸うのことに善光寺の方へ違つて参りました。かの善光寺から一里ばかり、手前の五仙の驛といふ所に、以前の分の屋敷に奉公して居りました。正助といふ中間が、今は當地へ歸つて農業を致して居りました。其れを便つて二人は態々是れへ違つて参りました。且那は遊ばしたな、併し何うもお出で遊ばして見れば構はないといふ譯にもなりませんが、金子も少くは貯へがあるから、何處か一軒の家を借りて貸ひたい、そこでア何なりとも致して世を送つて行かうと思ふので、それから此の宿の周旋によりまして些いな家を一軒借り受けて、その身は「手紙廻文館所」といふ看板を出しました。

來ぬこともあるまい、ちやア兎も角も汝と駈落を仕やう、小三貴方與個でございすか、何うも有難うございす」と忽ち茲に相談が付きました。が、實に色情の道ばかりは、何れも誦まんければならないものでございまして、迷へば忽ち八萬地獄、悟れば忽ち安養淨土、彼の文覺上人といふ天晴なる名僧も、一度は色情の道に迷ひ、一旦兄弟の約を結んだ渡邊源左衛門、其の妻が色香に迷ひまして、遂に弟の邊源左衛門を殺害してまでも此の想を貰かんと、母の身に替へがつて脅迫手段を用ゐました。此の想を貰かんと、母の身に替へがたう思ひ、不束なる妻を其れはとまでに思召し下さるならば、今宵貴方はお忍び下さいまして、夫源左衛門をばこの高樓に南枕に寝かして置きますから、お斬り捨てを願ひます、その後晴れて夫婦になりませう、と欺かれるとは露知らず、遂に衣川の館へ忍び込んで源左衛門の首を掻いて、月明に透して能く見てもあれば、此は如何に豆の首と思ひの外、その身が戀しと慕ひましたる袈裟の首でございすから、この外に煩悩の絆も切れ悟の道を開かして、その身は源左衛門の側に來つて、切腹せんと致しました。が、豆が之れ

三度の仇討を致しまして、後に浪野家に仕へまして、堀部安兵衛武庸と名乗り、有名なる誠忠無類の赤穂義士の一人となりませう。ございませぬ、夫婦の者は大きに悦びまして、蝶よ花よと育て上げに及んで、道へば立て立てば歩みの親心、漸く五歳の年まで夫婦は愛んで育て上げに及んで居りました。安太郎の身には別に異つたことはございませぬが、小三は安之助出生の後、始終病氣勝ちでございまして、別段是れといふ程ではございませぬが、始終アラク病うございまして、後、遂に安之助五歳の年に歸らぬ旅に赴いて了ひました。それから後は父親の手で育てられるといふやうなことに相成りました。丁度安之助七歳の年までは、ア何うぞ斯うぞ里の子供を集めて、手習の指南をして、細々ながら煙を立つて居りましたのでございませぬ。ある時安太郎は背戸口で物に躓いて、アッ、倒れました。一時は氣も遠くなる程でございませぬが、漸うのことに元に戻りました。一時は氣も、その時より左方の片足片腕懸して、左方半身といふものは異状はございませぬが、肝心の使ひまする右の方、他人の身体だか吾が

て、また土地の子供を集めて、手跡の指南を致すといふことに相成りました。小三も藝者なことを勤めて居りましたもの、似合はず、スツかり以前、の身装を改めまして、夫の手助けを致し、ア夫婦仲睦く暮すを何よりの楽しみと致して居りました。其のうちに最う十月、蒲らて遂に易すくと玉のとき、男子出生いたしました。講談師の口調は定つたものでございまして、子供が生まれますると玉のやうな子が生れます。玉のやうな子でございませぬが、偶にはまた炭團のやうな子が出来ましても宜いのでございませぬ。御馳走を致しまして、山海の珍味、一々見定めることが出来ませぬから、ア其の位に云つて置きますれば、大した間違はなからうと斯ういふ者へでございませぬ。併し是れは玉のやうな子といつても宜いのでございまして、中山安太郎は家中で評判の美男でございませぬ。小三も元は藝者を勤めて、京都の生れでございませぬから、是れも想綴は宜しい、何方に似ましたところ、悪くはございませぬ。是ア至つて骨格も丈夫な方でございまして、之れを七夜に至つて安之助と名前を命付けましたのでございませぬ。是れが其の身一代の間に

大 高 源 吾

身み体ただか分わらんやうに相あ成なつて、手てなごはお大お變へに辨われて了しひました  
 筆ふを持もつことが出で來きません、是これ所し所し雨あ中などか申まして中ち風かの種た類るで  
 ございませす、スツカ、牛う身みが自由じ由ゆにならぬ、仁にはお數からもございませす  
 が、左ひだり程ほど老おいい朽くちたる歳としといふにもあらず、また血ち氣き盛さかんでありま  
 するが、身み体たが半はん身み自由じ由ゆにならぬ、仁にはお數からもございませす、了しひましたから、  
 最早いちばん近ちか所ところの子こ供どもを樂たのめて教お育やしするにやうになつて了しひましたから、  
 それが爲ために子こ供どもは皆みな斷たつて了しひ、まづ其その後のちは居い喰くといふのでござい  
 まして、未まだだ貯たくわへも少すくしはございませす、其その後のちは居い喰くといふのでござい  
 て了しひ、未まだだ貯たくわへも少すくしはございませす、其その後のちは居い喰くといふのでござい  
 若わ替かまで無なくして、了しひ、未まだだ貯たくわへも少すくしはございませす、其その後のちは居い喰くといふのでござい  
 こどもならぬやうになり、初はじめ是これへ便べんづて参まりませす、後のちには二ふた三さん枚まいの  
 家いへは死し絶ぜつにならぬやうに、別わか段だん親おや類るといふ者ものもございませす、餘あま儀ぎなく驛いの  
 端はしへ來きませして、牛う小こ屋や同どう様さまな漸しだう盛さかなら三四さんしよ盛さかも敷しけやうといふや  
 うな所ところへ移うつりませして、實じつに今いま日ひの活くわ計けいにも追おはれるやうな始はじ末まつでござ  
 さいませす、「國くに傾かたむいて忠ちゆう臣しん願ねがれ、家いへ貧ひんしうして孝かう子こ出でづる」の例れいで、  
 かなく、この安やす之の助すけといへる者ものは恰ただ劑じ者ものでございませして、年とし積たも行い

大 高 源 吾

朝あは最いちばんう寅ひま刻ときに起おきませして、其そのの身みは善ぜん光くわう寺ていの街まち道みち筋すぢへ出でませして、  
 竹たけの先さきに鮑あわ貝がひを結むすび付つけたるものを携たへ、之これを以もつて馬うま糞ふんを拾ひろひ集あめ  
 めませして、漸しだう一ひと荷にの荷に物ものとなりませす、然しかる農いん家かへ持もつて参まつ  
 て幾いくらかに買かつて食くひ、また暇ひまには近ちか所ところ隣りん家かの使つかひ歩あきなご致いたして  
 少すくしも油あぶら斷たなく働はたらきませした、些ちかの錢ぜにを儲たくわけませす、其そのれを以もつて  
 喰く物もの藥くすりなどを購かひませして、漸しだう父ちちを養やしなふといふことに相あ成なりませした  
 何なにしる安やす之の助すけ一人ひとりにて七しち歳さいの年としから少すくしも油あぶら斷たなく介か抱かかりませした  
 たのでございませす、既すでに八はち歳さい九く歳さいとなつて來きませして、安やす之の助すけは向むかも  
 忘わすれず孝かう行ぎやうを盡つとめて居いりませした、最いちばんう安やす太た郎らうも何なに分ぶん中ちゆう風かぜのことにて  
 全ぜん快かいをする見み込こみはなし、此こゝの上うへ零ぜろ落らくれやうもございませせん、  
 少すくし身み体たの快かいい時ときには善ぜん光くわう寺ていの街まち道みち筋すぢへ出でませして、繩なわ笠がさにて面おも体たを  
 隠かくし肩かたを顔かほに充みてかひませして、往むか來きする者ものに絶たり付つき、願ねが曲まがを願ねがひ  
 まして手ての内うちを貫くわんてかひませして、往むか來きする者ものに絶たり付つき、願ねが曲まがを願ねがひ  
 實じつに親おやに背そむいたる不ふ孝かうの罰ばつで、我われ分ぶんの助すけと致いたして居いませす、  
 るのであるか、と吾われが身みの不ふ幸さいを咥くはち居いりませしたることでござい



大 高 源 吾

たが、その後不埒な奴と思召し上へ願ひを出して勘當といふことに  
 致してお了ひなすつた、御家内は其れ等のことを非常に苦に病んで  
 丁度三四年以前に御病死といふことに相成つて了ひ、今は其の身も  
 六千の坂をお越しになり、何時とも知れないお年齢ではございま  
 るが、未だ跡目を相続する者もなく、アア作は今頃何しうて居  
 るかと、且夕其れを案じてお在で遊ばしたか、今般老後の思ひ出に暫  
 時の休暇を幸ひ、主君へ願ひをお上げなすつて、善光寺へ御参詣の  
 途中、今この五仙の驛へ来りまして、この茶店にて休息いたしてお  
 在で遊ばすのでございませう、とこるが槍持に又助といふ者がござ  
 まして、此奴仰の類持でございませう、類りに水菓子などを喰つて居  
 りましたか、ウーと云つて其れへ踏反却つて了ひました、若黨の  
 平助は之れを見て驚きました、平助且那様、大變なことが出来まし  
 た、又助の野郎が類を起しました、何うも困つた野郎ぢやアございませ  
 んか、安左「そんなことを云つてる手間に介抱をして遣れ、平助「へ、  
 ア誰れか手を貸して呉れ、餘り類作つちやア可けない、ソレ確かり  
 と押へる」と云ひながら二三人掛かつて背中から押へ付けやうと致

大 高 源 吾

しますが、非常の力で反却らんと致しますから、押へる者も持餘し  
 て居ります、安左「コッヤ、餘り手荒いことをするな、この薬を服ま  
 して遣るが宜い」とやがて腰なる印籠をお取出しになつて、中から  
 煉薬のやうな薬をお出しになり、安左「是れは類には適薬である、直に  
 瘧るから平助「オイ誰れか来ないか、亭主「へ、平助「一寸水を一杯呉  
 れ、湯呑に水を汲んで亭主は持つて参りました、やがて齒を咬ひ緊  
 つて居る口を開けて、平助は其の薬を口へ入れて遣りまして、湯呑  
 を口へ當てがいますから、安左「コッヤ、然ういふことをしては到底  
 駄目だ、汝がグツと含んで口移しに服して遣るのですか、安左「然うよ、平助「其  
 ア且那様、何ですか、口移しに服して遣るのですか、安左「然うよ、平助「其  
 ア且那様、一寸御覧なさい、此の野郎の口中を、こんなに齒屎が一杯溜  
 つてございます、非常に臭い口でございますよ、安左「其様なことを云  
 はんで服せて遣れ、漸う口中へ吹込んで遣りまして、類りに脊中を  
 擦しながら平助「確かりしろ」と云ひながら、ソレを叩かします  
 と、忽ち氣が付いたるものと見せまして、兩眼をパツと見開かしました

天 高 源 吾

癪なとよいふものは發つて居ります時は非常に激しうございます  
 が、さて鎮まつて見ると恰で虚言吐いたやうなもので、野郎大さな  
 口を開いて延びの一行つたら何うだい平助「ヤ、此の野郎、暢氣なこと  
 か、最うホッく行つたら何うだい平助「ヤ、此の野郎、暢氣なこと  
 を云つて居やアがる、汝は先刻から癪を發しやアがつて、皆の者に  
 非常に介抱をさせながら、汝に分らんか其れが又助「ヘエ、癪を發  
 しましたか平助「發しましたかでもないものぢや、且那が御印籠から  
 薬を出して下さつたので、それで以て漸う鎮まつたんだ、且那にお  
 證を申せ又助「何うも且那様有難うございます安左「汝は然ういふ悪い  
 病氣があるんだから、道中するには食物に氣を付けねばならぬとい  
 ふのだ、餘り水菓子などを喰ふな又助「ヘエ、何うも有難うございま  
 す、色々御厄介を掛けまして……平助「ヤ、又助「又助「ヘエ、平助「乃公に  
 も證を云はんか、一遍口中の掃除とせい又助「ヘエ、何うぞしました  
 か平助「何うぞしましたものないものだ、且那の吩咐で止を得ず乃公  
 が汝に口移しで水を飲して遣つたんだ又助「エ、ツ、ヤッ平助さん、  
 貴方が私に口移しで飲してお呉んなすつたか平助「然うよ又助「ア、氣

大 高 源 吾

持の悪い、お前さんの其の口の中の齒屎は……平助「コ、ヤ、何といふ  
 ことを吐すんだ、乃公を馬鹿に仕やアがつて」と啾鳴つて居りまし  
 たが若黨且那様、最うホッくお出掛けなすつては如何でございま  
 す安左「それでは茶代を取らせるが宜い」とさて當家へ茶代を取らせ出  
 立せんと致しましたが安左「オヤ……」と四邊をキョロキョロ見て在ら  
 つしやる平助「且那様、何うかなりましたか安左「不思議なこともある  
 ものだ、今身共が是れへ置いたる印籠が無くなつた平助「ヘエ、印籠  
 が……オ、オ、オ、御亭主、亭主「ヘエ、平助「乃公が且那が此の所に  
 印籠をお置きなすつたが、其れが知れなくなつたのだ、汝知らんか  
 亭主「左様でございますね、一向私は存じませぬね、平助「誰れか此  
 所へは來なかつたか亭主「エ、誰れも參つた者はございませぬね、  
 今門口から孝行者の安公が覗いて居りましたが、彼奴は金子の中に  
 轉がして置いておいても間違のあるやうな者ぢやアございませぬ、其れ  
 稀代でございますね、誰れか門口から遁入つて來て盗つた奴が  
 るのでせう」ヒョッと裏手へ來まして向ふの牌道を見るとき、盗み  
 性があつて盗つた奴は、其奴を持つてド、逃げ歸ります、盗み

も盗み根往があつて盗つたといふ譯ではない、ほんの出来心でござ  
 いまして、印籠を提げまして向ふへ十歳ばかりの小僧が楊氣にア  
 く遣つて参ります様子、其奴を見付けた平助は「後を追  
 けまして、突然首筋を引捉へ平助「ヤ、此の泥棒、何を仕やアがる」  
 ホカ、今から珊瑚樹な目に目を付けやアがつて、年にも似合はない太  
 だ、殿なりながら引揚つて参りました平助「且、那様、この子僧の樂  
 と、一眞個に貴方太ね奴でございます、平助「且、那様、この子僧の樂  
 と見ぬます」と云ひながら用捨なくボカリ「と打殿ります安之、ア  
 痛、い、もし御勘辨下さいませ」とワイ「泣き出しました、安左  
 衛門殿は、打殺して了つても大事なものでございます、安左「イヤ、其様  
 様な泥棒は打殺して了つても大事なものでございます、安左「イヤ、其様  
 に打つな」に漸う彼の手を止りまして、熱々ど小僧の面体を打  
 めて居りました、歳が報すか段々ど彼に問ひ試みましたる處より  
 現在吾が伴安太郎の子に當る、御自身のためには孫といふことが相  
 分りまして、この孫の安之助に其の印籠をお與へになりましたが、

圖らず五仙の蟬端に於て、丁度十年振りにて父子孫三人が茲に出會  
 ひといふお話に移ります、一寸一息いたしまして次回に申し  
 上げます。

第九回

扱ても安之助は大きに悪いことを仕たど氣が付きましたから、打た  
 れながらも大地へ両手を支へまして非常に詫びをいたして居ります  
 のを、彼の槍持の又助は容赦もなく頻りに打たんと致します、先  
 瀬より之れをアツと見てかいてになりました老人安左衛門殿は見兼  
 ねましたるものと見ね安左「コリヤ、手前の様に其様に酷く打つも  
 のではない、勘辨をして遣れ又助でも旦那、泥棒を仕た奴ですから  
 打ち殺しても構はぬぢやございませんか、安左「その様な非道なことを  
 云ふものではない……コリヤ小僧、汝は何と心得て左様なことを  
 した、全休他人様の物を無断つて持つて行かうとするから、その様  
 な酷い目に遭ふのだ、若し欲しいと思はゞ、私は此物が欲しうござ  
 いますから何うぞ下さいませ、何故断つて持つて行かぬ、定めて



大 高 源 吾

慾得で致したことであるまい、大方魚でも釣らうといふについで  
 此の印籠を蚯蚓入にでも致したいと思つて、それで欲しいと心得て  
 無断つて持つて行つたのであらう、さうであらう、この印籠が  
 欲しいのか安之「イ、エ違ひます、決して其の印籠は欲しくはござい  
 ません、安左「ム、ソ、それでは此の根付か、これは般若面、これが欲  
 しいと思つて持つて行つたのか安之「イエ、これは珊瑚珠といふのだ、  
 ど之れなる緒締だね、赤い珠であるな、これは珊瑚珠といふのだ、  
 これが欲しいのか安之「違ひます、左様な物は欲しくはございませ  
 安左「ム、ソ、妙なことを云ふな、印籠は要らない、根付は要らぬ、  
 緒締は欲しくはないと申して居つて、何で又持つて行かうとした、  
 安之「ハイ、私、此の印籠の中に入れてございませぬ、お薬が欲しいと  
 さいまして、丁度私のお父さんも此の小父さんと同じ様な癪といふ  
 悪い病氣がございます、今朝はさから其の病氣が發りました、非常  
 に苦しんで居りますので、この向ふの藥屋へ例の如く父に服ま  
 せませぬ、適薬を買ひに参りました、ところが錢が少々足りませぬの  
 で、番頭が執拗なことを云つて何うしても買つて呉れません、致し

大 高 源 吾

方がないからナ、空しく歸つて参ります途中、圖らず此の叔  
 父さんが癪に惱んで苦しんで居られると、貴殿が其のお印籠の中か  
 らお薬を出してお上げなさいましたら、忽ちに病氣が癒りました、  
 ア、一世の中に結構な薬もあればあるもの、さうぞして彼の様な  
 薬をお父さんに服ましたらば、定めて病氣が治るであらうと思ひま  
 して、そこで無断つて持つて行かうといはしたのでございませ  
 この後、は決して斯様な悪事はいたしません、何うぞ御勘辨下さい  
 す様、とホ、涙に呉れまして居ります、その小僧の顔  
 を暫くの間に老人中山は見えておいで遊ばした、わが伴の安太郎が幼  
 少の頃はひの容貌に酷く似てございます、虫が知らずか何となく、  
 若しや我が孫にてはあるまいかと考へておいで遊ばした、安左「ム、  
 左様か、して汝の宅は何處だ安之「ハイ、この向ふの驛端の隠れ家  
 が然うでございます、安左「ム、それでお前のお父さんといふのは百  
 姓か安之「イ、エ違ひます、安左「それでは町人か安之「イ、エ、元は武士  
 でございまして、只今では浪人をいたして居ります、安左「ム、  
 名前は何といふ安左「ハイ、お父さんは安太郎と申しまして、私、安

の善光寺への街道筋にて馬糞を拾ひまして、私には毎朝夜のうらから起きまして、これを買つて貰ひまして、漸う其の日を過して居ります様なこと  
 堪り兼ねたるものと見ゆまして、少時は落涙に及んでおいで遊ばし  
 たが安左、ア、何うもはや「家賃しくして孝子出づ」といふの聲へ  
 俸の様な不孝者に斯るところの孝心無類なる者が出来たか」と名乗  
 りたいのは山々でございませぬが、まさか此所で御自身もお名乗り遊  
 ばすといふ譯にもなりません安左「これ小僧、汝は中々年齢にも似合  
 はず、天晴れ親孝行なる者であるな、今のうちに精出して其の親に  
 孝行を致して置け、恥度末には汝の身のためであるぞ、エ、待て、  
 汝に遺はす物がある」家來の目に觸かぬ様に、懐中の紙入から二朱  
 金を掴み出したる上、印籠の蓋を開つて中へ這入るだけ一杯お詰り  
 なすつて、ヒョリと蓋を遊ばしたが安左「さアこれを其の方に遺はす  
 よつて持つて歸つて中の薬を親に服らせよ」と前へ出してお送りな  
 すつたるときは、子供ながらも非常に喜びまして安之「何うも有難  
 うございませぬ、左様なれば之れを私が貰ひましてお祈ひませんか、  
 安左「ヨ、其の方が目を着けた品であるから遺はすのだ、持つて歸

之助と申しませぬ、この一言を聞いて安左衛門殿はハッとお驚きに  
 相成りまして、俸が家出をいたしましたるときから、指屈り敷へて  
 御覧なされると、丁度足掛け十年、さては此兒が我がためには眞實の  
 孫、安太郎の伴であるかと、思召に相成つて見ると、實にお胸も張  
 裂くばかりの思ひでございませぬが、家來の手前もございませぬし、  
 まさか此所で名乗るといふ譯にもなりません、涙道に涙を浮めて胸  
 一杯になつておいで遊ばしたが安左「ハイ、お父さんと二人でございませぬ、私  
 一人で暮して居るのか安之「ハイ、お父さんと二人でございませぬ、私  
 五歳の年に阿母様は病死をいたしました、既に一昨年のことです、  
 人で暮して居ります安左「ヨ、一、既父は今は何をして居る安之「ハイ  
 手習の師匠として居りましたが、右の片足と片手が動きませぬ  
 圖らず中風といふ病氣に罹りまして、既に一昨年のことです、  
 ので、今では此の五仙の驛を雇れた處で小屋みたいな家に住居を  
 たしまして、お天氣の好い日にはお父さんは街道筋へ出まして、  
 を話ひ袖乞をいたしまして、私は毎朝夜のうらから起きまして、  
 の善光寺への街道筋にて馬糞を拾ひまして、私には毎朝夜のうらから起きまして、これ





たが今は浪人ですと斯ういふと、名前は何と云ふて尋ねますか  
ら、お父さんは安太郎私には安之助でございまして云つたらね、お父  
さん其のねお老人のお武家がね、私の顔を見て居ながらホッ泣  
いて居るんですよ、私も何だか気が變になつて来てね非常に悲しく泣  
なつたのでございまして、さうして阿母と三人で居るのかと云つて尋  
ねましたから、阿母は五歳の年に亡くなりまして、お父さんと二人  
で暮して居りますと云つてね答ひますとね、今では何をして居ると  
此様に尋ねるので、お父さんは一昨年から中風を病らうて居りまし  
て、此の驛の端の處に今は住居をして、お天氣の好い日には善光寺  
街道へ出て唄を誦うて、錢を貰つて居ります、私には毎朝早くから起  
て街道の馬糞を拾うて、それを百姓家へ持つて行つて世渡りをして  
居りますと云つたらね、ホッ泣いて居らっしゃいました、さ  
うしてね平生からお父さんが云ふ様なことを云つて居らっしゃった  
精出して親孝行をしろ、親にさへ孝行をして置いたら大さに末で好  
いことがあると云つてね、親にさへ孝行をして置いたら大さに末で好  
やないんですよ、この印籠を貰つて歸つたの、これを汝に還るから

お父さんに藥を服まして遣れいと云つてね、御覽下されお父さん此  
様に立派な印籠です、安太郎は手に取上げ再三推敲さまして安太  
、有難うございまして、安太郎は手にお武家に会つて、かく御大切なる品  
たして呉れるから、お情深いお武家に会つて、かく御大切なる品  
を下し置かるゝといふのも、偏に汝が孝行からだ、さうも不思議でござ  
である、と疑めつ透りつ眺めて居りますと、さうも不思議でござ  
います、見愛の緒締が付いてございまして、印籠は梨地に圓の  
若の面、珊瑚珠、緒締が付いてございまして、印籠は梨地に圓の  
ちに三ッ柏の紋、何うやら此の印籠は見た様な印籠と考へて居  
りました、安太「何ういふお武家様が下すつたのだ、安之助、おのね此の印  
籠を持つて歸つて親父が尋ねたら、安左衛門といふ者に買つたよ、云  
つて置けど、此様に仰しやいました、安太「エ、一ッ……」ハッど驚き  
ました、安太「ア、何うも大いことを致して呉れた、道理で先きはか  
ら見た様な印籠と心得たが、かねて我等が屋敷にあるとき、お父上  
の御秘蔵をなすつた印籠、何うぞこれを下し置かれる様と度々お  
願ひ申ししたが、惜んで下し置かれぬことであつた、常々父上が御秘

する 安之、あのもし旦那様、只今は大に有難うございます、彼所に  
 見えてございます、此の稲村の後方に頭を下げて居ります、これからお説を申し上げま  
 此の稲村の後方に頭を下げて居ります、これからお説を申し上げま  
 す、杖を止めて振願りやツと稲村の後方を御覽に相成ると、身には  
 番頭を廻ひまして、頭といへば火の付く様な頭髪をいたして、自己  
 が身を差らひましてか顔も得上げず大地に首を下げて居ります、  
 不埒な奴とは思召した、其處は親子の情愛、胸一杯に塞がつて  
 参りました、少時はヤツと斯う睨み付けておいでに相成りました、  
 安左「コリヤ白痴奴が、その態は何だ、乃父はな罰を中てたいとは  
 思はぬぞ、だが天道様が、お免しがない、今となつて定め後悔いた  
 したであらう、汝れが心一つで立派に五百石の跡目相続をいたす武  
 士が、只今の其の境界は何だ、端下女に心を奪はれ、年を老つたる  
 両親を振棄て、汝れはそれでも宜からうがな、跡目に残つた両親の身に  
 もなつて見る、我れは此の老年になつて未だ跡目相続をする者もな  
 いぞ、汝の様な不孝な奴でも三ヶ年以前死なばこそ、老母は朝夕これを苦  
 に病んで、今を去るにと三ヶ年以前死なばこそ、老母は朝夕これを苦

蔵の印籠、さては此の度善光寺へ御参詣について、圖らず汝が  
 通りを致したのである、汝のたれには祖父様であるぞ、安之「そんなら  
 お父さん、かねてお話のございませした、彼れが祖父様でございました  
 か、安之「これからホチと歩いて参詣の折柄か、またお歸りの途次  
 か、安之「これからホチと歩いて参詣の折柄か、またお歸りの途次  
 やい、私には斯る不孝を働いたる身の上だから、稲村の蔭に身を潜めて、  
 ない、私には斯る不孝を働いたる身の上だから、稲村の蔭に身を潜めて、  
 すといふ譯にはならぬ、よつて彼の往來の稲村の蔭に身を潜めて、  
 切めて餘所ながらお父上のお聲なりとも聞きたいものと思ふ、お前  
 は、街筋へ出て宜しくお説を申して呉れる様、と漸う安之の助の  
 に、すがつて宅を出でました、が、往來の片傍にございます、稲村の蔭  
 に、身を潜り、大地に坐つて様、如何と考へて居ります、安之「ア、お  
 父さん、向ふへ杖にすがつてお出でになりませした、安之「オ、それではお  
 前、厚く禮を云うて呉れる様、と其の身は大地に両手を支へ頭を下  
 げ、面目次第もなき有様と身差らひ扣へて居ります、と、こゝろへ  
 杖にすがつてトボくとお出掛けに相成りました、と、こゝろへ

まい、云はう様ない不孝者奴が、汝の様な白痴漢が斯る又孝行無類な子を拵へるといふのは、ア、これでも因縁であらうか。安之助の顔をヤツと御覽に相成り、その顔に手を懸けて「藍は藍葉より出で、尚は青し、氷は水より出で、尚寒し」とは此の事か、孫は子よりも可愛い例へ、抱きしめたいといふお心持は山々でございませうが、最早や家來が傍へ近寄つて参りますし安左「コリヤ汝は人外人中へ出て交りの出来る奴ではないが、切めて人間らしく越後の新發田へ参つて、菩提所は存じて居るであらう、よつて其の方の母の石碑の前に到つて、潔く腹を切つて相果て、その上で以て是れなる孫は我が屋敷へ遣せ、此度一人前の武士にして遣るぞ」云つて居る所で立止まつて獨語を云つて居らつしやいます安左「オ、平助、な所で立止まつて獨語を云つて居らつしやいます安左「オ、平助、ひ署いんでなア立止まつて休みながら能狂言の對辭を遣ひ忘れたのでそれを稽古を仕て居たのだ平助「暢氣なことを云つて居らつしやいますな、ア、お御脚もお疲勞でございますすれば、お駕籠に召じて行らつしやいましては如何でございます安左「ア夫れでは駕籠に乗つ

て行かう泣顔を家來に見付けられじと、顔を反向けながら漸う傍へ來た駕籠に打乗つて引戸をヒタリとお閉め遊ばしたが、小者は何も知りません、駕籠を昇いで善光寺の方へ「ア、行つて了ひました、稲村の蔭から這ひ出して延び上り伸び上つて其の後姿を暫く打眺り、兩掌を合せて安太「ア、お父上勿体なうございました、偏にお免し下し置かれます様」と罷びをいたしまして、漸う安之助の肩にすがつて元の我が宅へ歸つて参りますると安太「今お祖父さんの仰しやつたことを汝は聴いたであらうな、ア、未だ武士道の盡さざるところと心得る、必らず越後の新發田へ其の方を伴うて参り、我れは母仁様の御石碑の前にて切腹をいたしてしお訛言をいたさう、よつて汝は中山安左衛門といふお名前を必らず忘れるな、新發田の御家中にて五百石、そのお屋敷へ便つて行つて立派な武士にして貰へ、吾等の様な不孝の者でも矢張り子と思し召して下し扱かれて彼れだけの御教訓、現世を去るとも決して忘れは置きません」と暫くの間は涙に昏れて居りましたが、モウ黄昏の頃はひでございまして、頻りに胸がせまつて参りました、よつて父の賜物と思ひ、印籠

大 高 源 吾

を推察して、盗を開けますと、中からバラバラと驚きました。安太、安之助、これを見よ、さては斯うやつて路用の金子までお入れ置き下し置かれたる。こゝから悉皆出しまして勘定をいたして見ますと、都合三兩二分といふもの這入つてございます。それを反古紙の上で類りに勘定をいたして、父子はアクく喜んで居る。折しも表の方を通行いたしまして、あつても足らないといふ様な悪黨で、只だ賭博ばかりを打ち歩いて悪事を働かうといふ、その喜助が今日はスッカリ負られて了つて一文なし、喜助「アア間拍子が悪いこつた、何を好い銭儲けの工夫はあるまいか」と通りかよつた彼の驛端、ヒロイと安太郎の小屋のうちをみるとはなしに覗いて見ると、頻りに父子が金子の勘定をいたして居ります。ユウーこりやア妙だ、こゝの宅の奴乞食は元は何でも浪人者だと云つて、よう此の往來へ出やアがつて袖乞をして居た奴だ、武士なんかにいふものは妙なものだ、たへ人に乞食を

大 高 源 吾

して居ても、卒さといふとき用の意金といふので、自己は夫れだけの貯へといふものを持つて居やアがる、いふ物を目付けたぞ、寧ろ今夜この宅へ忍び込んで、あの金子をせしめて呉れやう、浪人といつたところ、多寡の知れた病みはうけた奴だ、罷り間違へば息の根を断らたら夫れつさりのこと、そんなアいと何處かへ行つて了つた、安太郎親子の者は左様なことは存じません、まづ漸う薬を服みまして、そこでア夕景の食事もいたし安太「ア早く寝て必らず明朝は其の支度に掛ると仕やう」何分蚊帳も何かあると云ふで、はなし、片傍の火鉢に對して蚊煮べをいたしまして、漸う團扇で扇ぎ出して、父子は「コロ」と其の處へ横臥になつた、盗問の疲れもございますから「スヤ」と寝込んで了ひました、然るに寝て見届け置かば、此の様な乞食小屋同様の宅です、素より戸締りなんかありさうなこともございませぬ、庭の垣を打破つて、内方へ這入りました、浪人者の様子を見ると、\* \* \* した單衣を腹の上へ這入



庭へ飛び降りたが、一月は限なく明互つてありませぬ。そのま  
 と脱げんともせず、垣根の傍に立止まつて、やがて胸巻の内方より  
 取出ししましたる反古紙に包んでありませぬ。奴を置いて喜助「オヤ、  
 何のこつたい、只た是れつばかりしかありやアしね、こんなんな  
 ら殺すんぢやアなかつた、待てよ是れは皆二朱金だな、一つ二つ三  
 つ四つ五つ六つ七つ八つ……これで一兩、それから是れで二兩、三  
 兩と……ハア、二分だ、暢氣な奴もあるもので類りに金子の勘定  
 をいたして居りました、そいつを先刻から父の悲鳴を挙げましたる  
 ときより氣が付いた安之助は、おのれお父さんを殺しやアがつた、  
 何うするか見ると、子供ながら決心をいたしました、その身は辞  
 を發つたら殺されると思ひますから、アツと様子子を考へて居りまし  
 が、今庭に降りて金子の勘定をして居る奴を見すまして、おのれ親  
 の仇、何うするか目に物見せて呉れやうと、蛇を寸にして人を呑  
 の性あり、類伽鳥は卵子のうちより鳴く聲諸島に優れるとやら、僅  
 か年齢は九歳でございませぬが、かねて親父が身の魂と思ひ所持いた  
 し居りましたる大小刀も、今は大刀なり親父が身の魂と思ひ所持いた

けましてスヤ、入つて居ります、八寸の研ぎすました出刃丁  
 を、まさかの時の用意と之れを携へて、傍へ進んで参りました、ッ  
 と被て居ります物を取除けると、腹に巻いて居りましたが、ハ  
 ッと目を覺まして安太郎は「大いに驚いた、おのれ曲者」と起さんと  
 するやつを喜助「エ、イ聲を發てるな」と胸板を向ふへ「ッ」と突いた  
 る途端に、病みはうけて居りますから堪りませぬ、そのまゝ仰向け  
 に、ハッ、倒れかけた、再び起きんとする所を、面側と思ひました  
 るか、彼の出刃丁取直すより疾く振被つて「斃ばれ」と胸板より  
 刺し通したのでございませぬ、堪りませぬ、アツと悲鳴を挙げまし  
 て七転八倒の苦しみを、そいつを跳りかゝつて十分刻り廻し喜助「ヤ、  
 浪人、必らず我れを恨むな、黙つて汝れが寝た振をして居りやア別  
 段殺す氣も無かつたに、聲を發てやがつたから、そこで振るなく選  
 つ了つたんだ、汝と我とは別段仇同士でも何でもね、金が仇  
 だ、往生をしろ」と断息を刺して出刃丁の血を拭ひ、金子が仇  
 と手拭で巻いて、腰に之れをば挟みまして、野方途にも胸巻を以て

大 高 源 吾

の刀の刀身だけは鞘に納めて置くつてあるのを存して居りますから  
 密に夫れを取出して漸う柄の處に手拭を巻いて、大膽にも拔足をし  
 て庭へ降りて参つて、大兵衛の村雲喜助を首尾よく刺し貫して本  
 懐を縫しやうと云ふ、中山安之助の初度の仇討といふ講談でござい  
 ますが、一寸一息いたしまして次回に。

第十回

子供ながらも安之助は根が大膽なる氣象でございまして、おのれ父  
 の仇、やはか其の分に捨て置かうかと、彼の小刀を携へて拔足刺足  
 そつと庭へ降りました、村雲喜助は左様なことは毫も知らず、垣  
 根の傍に立つた、漸う金子の勘定をして、紙に包んで自身の財  
 布に收めんとして居ります、尤も夏のことです、此の者も單衣  
 を着て居ります、薄着でございまして、左方の脇腹の處へ見當を付  
 けまして、安之助が力に任して突貫しましたのでございまして、  
 何でう以て堪りませうキヤツと其の處へ平倒りまして、流石大膽なる者で  
 つて苦しみまする七転八倒の有様でございまして、

大 高 源 吾

はあ、血が流れても根が子供のことでありまして、その邊に影し  
 く血が流れても、彼方此方へ這ひ廻つて居ります、有様を見る  
 と、安之助も其所に平倒つて了、泣き出し、泣き出した、泣き  
 と、隣家といたところ、半町も隔れて居ります、一軒百姓家が  
 ります、その家の老爺が不圖目を覺まして、爺、お、一、一寸起  
 さぬか、また隣家の安坊が戶外へ出て泣いて居るぞ、親父が病氣を  
 發したのであらう、お前、行つて様子を見て来て、遣れ、婆さんは目  
 撫りながら、婆、妾は眠いから、お前、行つて見て、お遣りなさいよ、爺、困  
 つたものでないか、と老爺は小言を喰ひながら、種を一枚引被け  
 ました、そのまゝ草履をはいて入口を開けまして、ノック、それへ  
 遣つて参りました、爺、安坊、何を泣いて居るんだ、お父さんが病  
 氣なら何故側で介抱して遣らないのだ、また例の癪が發つたのか、  
 安之、小父さん、然うではないんです、また例の癪が發つたのか、  
 ございませう、爺、何、爺、何、大變とは何うしたんだ、安之、おのね、宅へ泥棒が侵  
 入つて、爺、何だと泥棒が侵入つた、馬鹿なことを云ふな、汝んどこ

がつたんだ、老婆は見ると其邊は血だらけ、これもキヤツと驚きま  
 した。倒れつ轉びつ一生懸命先づ名主の許へ駆け付けまして、さ  
 して此の事をば注進をいたしました。すると容易ならぬことである  
 を報せました。早速現場へ駆け付け、五人組または總代の方へ之れ  
 ぎでございませう、上つて夜中ながらお代官所へ此の件を達しまし  
 た。早速代官屋敷より見分をいたして役人が其處へ出張をいたしま  
 して、早急に見ると傷はホンの脇腹が一才突いたばかりであります  
 が、何がさて急所の痛手、賊は息が絶えて居ります、と云う  
 賊は村雲喜助と云うて、かねて上でも目を注ぎておいで、と云  
 で、さういふ、また安之助の親父の死骸を見るところ、胸板を出  
 で、刺さっています、また安之助の親父の死骸を見るところ、胸板を出  
 兎も角も死骸は葬つて遣れい、と云ひ置いて、役人はお引取りに  
 ました。尤も村雲喜助の死骸は上において、お取棄てといふこと  
 相成りました。手當に及んで先づ形ばかりの葬送をして遣りました  
 て、それ、手當に及んで先づ形ばかりの葬送をして遣りましたが

の様な乞食小屋同様の宅へ泥棒が侵入つて堪るものかい安之、それ  
 も小父さん侵入つたんだよ、今日晝間ね祖父さんからお金子を頂い  
 たので、それをお父さんがチャンと肌に着けて寝たのだ、すると悪  
 い奴が這入つて来てお父さんが、到頭お父さんを殺して了やアが  
 だ、爺エ、ッ……何だ、お父さん殺した、へエ……本當か夫  
 れは安之さうして其の泥棒がね、今庭へ降りて其の金子の勘定をし  
 て居やアがつたのだ、何でもお父さんの仇を報つて遣らうと思つて  
 ね、脇差の刀身があつたから夫れで脇腹を突貫して遣つたらね、あ  
 の垣根の傍へ平倒つて了つたんだ、小父さん向ふに倒れて居るのが  
 泥棒だ、爺エ、ッ……「氣が付いて熱く見ます、足下は  
 唐紅一人の賊がモウ虫の息でビクビク抜かして了ひまして、人殺し  
 と云ふなり此の老爺は其處へ卒腰を抜かして了ひまして、人殺し  
 見ます、此の聲を聞き付けて、嗚つて居りますから、この者の家内と  
 へ駆け付けて参りまして、婆何だ、ね、願々しい、爺さん何うか仕  
 のかね、爺エ、ッ……何うもないが、大變だ、安坊が人殺しを仕やア

處に發つて居るんだ、その時分からの家柄だぞ……なア婆さん、  
 奴もあつたものぢやアないか、九歳の年で何と親の仇を討つたといふ  
 大層な者だ、それを子にして置いたら、お前でも私でも殺されたら  
 直に仇を打つて呉れるよ、婆さん元談ぢやアないよ、延喜の悪い、  
 自分殺されるのを待つて居る様なものぢやアないか、平左「ア何で  
 も宜い、さア何うぞ此方へ上つて呉れ、我れのことをお父さん、婆  
 さんのことを阿母さんと呼へ」安之助は兩人の顔を見て居りました  
 が、安之助の父さん、私には服やだ、平左「何やだ、何故いやだ、安之助は百  
 姓の子に成りともない、平左「……何うする積りだ、安之助は越後の新  
 發田に私の祖父さんがある、その祖父さんは立派なお武士だから、  
 私には新發田へ行つて武士に成るんだよ、平左「勝手に仕やアがれ、そん  
 ななら其様なんでも何故代官のお屋敷で其の事を云はないんだ、さ  
 うだらうよ、九歳の年で親の仇を討たうといふ様な奴だから、嵐が  
 遠くはなア婆さん無駄手敷だ、婆さんこんなことを云つたつて爺さん  
 仕様がなないぢやないか、代官の屋敷へ此の事を届けました、すると「雷  
 仕方がないから又々代官の屋敷へ此の事を届けました、すると「雷

九歳になりまする安之助一人は孤兒といふのでございませうから、  
 こでお代官所へ之れを伴れて参りました、代官よりは驛の者に沙汰  
 に相成りまして、男の兒が欲しいといふ者があらば何時なりとも  
 いに來いといふので、段々之れをば知らして遣りますと、茲に當  
 において平左衛門といふ百姓がございまして、お代官へ向けて願  
 ても子が無いところから、家内と相談の上で、その身は年を老つ  
 て出ました、漸う申し受けて安之助を伴ひ自分の宅へ歸つて参りま  
 した、平左「老婆さん、ア、何うやら斯うやら安之助を首尾よう貰うて  
 来たぞ、婆さん、これハ結構なことあります……さア何うぞ此方へ  
 上つてお呉れ、平左「安之助、今日から汝は此處の宅の子だぞ、金と云う  
 ちやア無いが、今日汝の親父の様に袖乞をせんければ、食うて行けぬ  
 といふ様なことはないぞ、田地も相當にあり、この驛では五人組の  
 次席に坐られる我れの家柄だ、これでも先祖から二十何代といふも  
 の相續をして居るんだ、我れの宅の裏の松の樹を見る、昔時義經さ  
 んが奥州へ落ちて行らうしやつた時分に、辨慶といふ人が此處の松  
 の樹の根柢へ腰掛けたりといふ、辨慶「腰掛けの松と云つてな、向ふの